

木簡研磨

第二七号

木臂研房

第二七号



木
簡
学
会

題字
藤枝

見
刻

目

次

卷頭言——書くことと削ること——

柳山 明

目 次

二〇〇四年出土の木簡

概 要

奈良・平城宮跡	吉江	8	1
奈良・平城宮跡左京三条二坊一坪	渡辺	見 宏	10
奈良・平城宮跡左京三条五坊十坪	清水	昭博・鶴見	11
奈良・東大寺境内	清水	昭博・鶴見	17
奈良・西大寺旧境内	久保	泰寿	16
奈良・旧大乘院庭園	馬場	邦江	13
奈良・下永東方遺跡	川上	洋一・岡田	20
鶴見	基	憲一	17
鶴見	表原	克代	16
奈良・藤原京跡石京十二条四坊	奈良	藤原京跡石京十二条四坊	1
奈良・四条遺跡	平岩	欣太・米田	vii
奈良・石神遺跡	市	大樹	iii
奈良・飛鳥京跡	松井	一晃・鶴見	i
京都・平安京跡右京六条三坊六町	市	大樹	23
京都・宇治市街道跡	十文字	健・鶴見	30
浜中	南	泰寿	34
浜中	邦弘・大原	孝雄	41
浜中	邦弘・大原	瞳	46

京都・内里八丁遺跡	西村 健司	引原 茂治
大阪・禁野本町遺跡	森田 克行	東京・天龍寺遺跡
大阪・鷺上郡衙跡	鷺谷 和彦	東京・裏西城址(1)
大阪・北花田口遺跡	岸 本 崇	東京・裏西城址(2)
兵庫・川除・藤ノ木遺跡	芝 一 宏	千葉・長須賀条里制遺跡
兵庫・板井寺ヶ谷遺跡	香寿人	千葉・小針北遺跡
兵庫・桶當遺跡	定 松 佳重	千葉・長須賀条里制遺跡(美信地区)
兵庫・嫁ヶ瀬遺跡	鈴 木 正貴	千葉・北下遺跡(一)
愛知・荘安賀遺跡	早 野 浩二	千葉・北下遺跡(二)
愛知・下津北山遺跡	鈴 木 正貴	滋賀・西根遺跡
愛知・清洲城下町遺跡	坂 本 和弘	滋賀・北萱遺跡
静岡・大瀬村東一遺跡	今 村 直樹	滋賀・加茂遺跡
静岡・土橋遺跡	鈴 木 弘太	滋賀・慈恩寺遺跡
山梨・上座遺跡	鈴 木 絵美	岐阜・鶯山岬遺跡
神奈川・北条時房・頭時郡跡	坂 本 敏則	長野・松本城下町跡伊勢町
神奈川・下馬廻辺遺跡(鎌倉女学院地点)	坂 本 和弘	福島・柳崎寺跡
神奈川・永福寺跡	朝 田 公年	福島・泉庵寺跡(除奥国行方郡斎)
東京・水戸藩徳川家小石川屋敷跡・駿河小島藩松平家	栗 田 則久	大谷 弘幸
層敷跡・播磨安志藩小笠原家屋敷跡	栗 田 則久	栗 田 則久
(春日町遺跡第III・IV地点)	高 志 大橋	門 永 越
東京・水野原遺跡(新宿区No.一一〇遺跡)	高 志 大橋	越 伸 一
水 本 和 美	高 志 大橋	本 賢 二
96 93	高 志 大橋	本 賢 二

136 134 132 129 127 124 121 120 118 115 113 111 109 108 107 106 104 103 102 100 98

岩手・花立Ⅱ遺跡	及川
山形・渋江遺跡	押切智紀
山形・手藏田一〇遺跡	名和達朗
山形・鶴ヶ岡城跡	菅原哲文
秋田・駒川谷地遺跡	五十嵐一治
秋田・東根小屋町遺跡	高橋
秋田・鹽本城跡	学・五十嵐一治
青森・高間（一）遺跡	木村淳一
石川・本町一丁目遺跡	竹内弘和
石川・森本C遺跡	谷口宗治
富山・梅原胡摩堂遺跡	澤辺利明
富山・小出城跡	越前慎子
富山・弓庄城跡	種垣裕二
新潟・三角田遺跡	三浦知徳
新潟・松葉遺跡	広井一造
一九七七年以前出土の木簡（二七）	175 172 171 170 167 165 150 156 151 149 146 142 141 139 138
奈良・平城宮跡	渡辺晃宏
石川・堅田B遺跡（第二〇・二一・二三号）向井裕知	200
新潟・上田遺跡	田中一徳
新潟・南魚沼市余川地内試掘調査地点	水澤幸一
新潟・築地築東遺跡	久保田一
新潟・西川内北遺跡	水澤幸一
島根・中野清水遺跡	田中一徳
広島・草戸千軒町遺跡	水澤幸一
広島・城伝土居屋敷跡	久保田一
香川・高松城跡（松平大膳家上殿敷跡）	水澤幸一
徳島・徳島城下町遺跡（中徳島町一丁目地点）	田中一徳
徳島・常三島遺跡	水澤幸一
徳島・新蔵遺跡	久保田一
福岡・博多遺跡群	田中一徳
福岡・本堂遺跡	水澤幸一
石本秀啓・一瀬賢	田中一徳
大庭康	水澤幸一
中原賢	田中一徳
智時計	水澤幸一
豊治	田中一徳
198 196 194 192 188	186 185 183 182 181 180 178 176
勝浦康守	200
徳島・徳島城下町跡（第二二号）	207

シンポジウム「中国簡牘研究の現状」の記録

荊州地区出土戦国楚簡

廣瀬薰雄

富谷至

關尾史郎

糧山明

渡辺晃宏

古尾谷知浩

寺崎保広

英文目次

コラム

ローマ木簡実見記

(馬場基)

ローマ木簡研究者実見記

(馬場基)

木簡の仮文の訂正をめぐる雑感

(渡辺晃宏)

166 128 126 (1) 282 279 272 267 250 235 211 210

図版

一 藤原宮跡出土木簡

二 石神遺跡出土木簡

三 上齋遺跡出土木簡

四 鷺本城跡出土木簡

凡例

一、以下の木簡出土事例報告は、各木簡出土地の発掘機関・担当者に依頼して執筆していただいたものであるが、体裁及び枳文の記載形式などについては、編集担当の責任において調整した。執筆者の所属が発掘機関と異なる場合には、執筆者名に註記を加えた。

一、報告は「二〇〇四年出土の木簡」、「一九七七年以前出土の木簡」及び「枳文の訂正と追加」の三欄に分けて掲載した。
一、各欄ごとの遺跡の排列は、それぞれは奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、各遺跡の記載は、所在地、調査期間、発掘機関、調査担当者、遺跡の種類、遺跡の年代、遺跡及び木簡出土遺構の概要、木簡の枳文・内容、関係文献（当該木簡掲載の報告書など）の順とし、国土地理院発行の五万分の一地形図を使用して、木簡出土地点を▼で示した。（）内は図幅名である。

なお、「枳文の訂正と追加」の欄では、当該報告が掲載された本誌の号数を遺跡名の下に（）で明記し、地図は原則として削愛した。また、「遺跡及び木簡出土遺構の概要」は省略し、必要な場合は「木簡の枳文・内容」において最少限の言及を行なった。
一、紹介する木簡には遺跡ごとに木簡番号を付し、（）で示した。数

次の調査の木簡を一括して紹介する場合は、原則として調査ことの通し番号とした。なお、「枳文の訂正と追加」では、既報告本の訂正、新出木簡の追加の順とし、一括して通し番号を付した。

一、木簡の枳文は、木目方向を縦として組むのを原則とした。但し、曲物の底板などについては必ずしもこの限りではない。

一、枳文の漢字は既ね現行常用字体に改めたが、「實」「寶」「證」「龍」「廣」「盡」「應」などについては正字体を使用し、異体字は「マ」「サ」「ヰ」「辛」「ヰ」などについてのみ用いた。

一、枳文下段のアラビア数字は木簡の長さ（文字の方向）・幅・厚さを示す（単位はmm）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。なお、円形の木製品の法量は、径と厚さを示し（単位mm）、欠損している場合は復原径を示した場合がある。また、それぞれの発掘機関における木簡番号がある場合には最下段に示した。「枳文の訂正と追加」の欄において枳文を訂正する木簡については、型式番号の次に既掲載番号と木簡番号を17(2)のごとく付した。

一、枳文に加えた符号は次の通りである（[註]第1回参照）。

一、木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。
一、木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることとを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。
一、木簡の上端・下端などに切り込みのあることを示す。

々々

抹消された文字であるが、字画の明らかな場合に限り原字の左傍に付した。

○ 穿孔のあることを示す。但し、釘孔など別の用途の穿孔は省略した。

■ ■ 抹消により判読困難なもの。

□ □ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□ □ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□ □ 欠損文字のうち字数が推定できないもの。

× 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

「」 異筆、追筆。

合点。

本目と直交する方向の刻線を示す。

〔〕 校訂に関する註で、本文に置き換わるべき文字を含むもの。原則として文字の右傍に付す。

() 右以外の校訂註、及び説明註。

〔×〕 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し原字を上の要領で右傍に示す。

カマ、カ 横書きのうち字数の数えられないもの。

…… 同一本箇と推定されるが、折損などにより直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかつた場合、行末・行頭に付けたもの。

* 卷頭図版に写真の掲載されているもの。

一、本文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、次の一八型式からなる(注頁第2圖参照)。

011型式 短冊型、側面に孔を穿ったもの。

015型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 短冊型で、側面に孔を穿つたもの。

023型式 小形矩形の材の一端を丸頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたるもの。方頭・丸頭など種々の作り方がある。

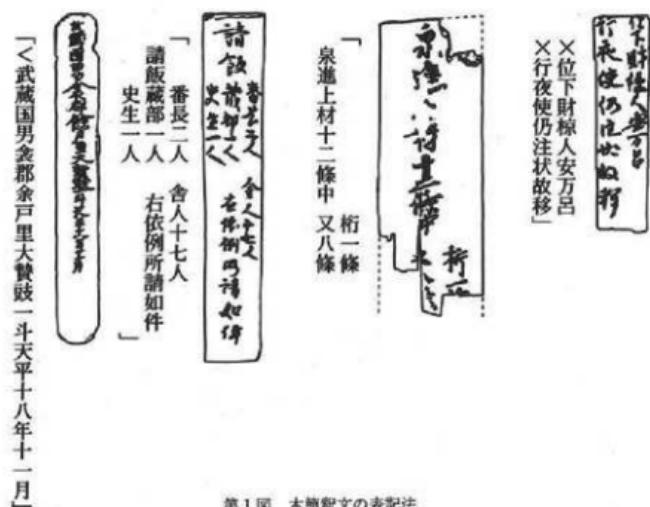
032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたるもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

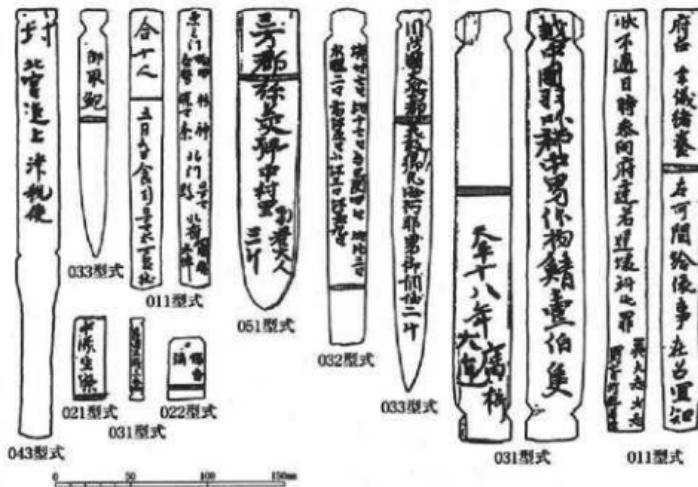
039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

041型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作つたもの。

(033型式) 長方形の材の一端を羽子板の柄状に作り、残りの部分



第1図 木簡訣文の表記法



第2図 木簡の形態分類

の左右に切り込みを入れたもの。

059型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによつて原形の失われたもの。

061型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

065型式 長方形の材の一端を尖らせてゐるが、他端は折損。

081型式 用途の明瞭な木製品に墨書きのあるもの。

091型式 用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。

091型式 折損、腐蝕その他によつて原形の判明しないもの。

091型式 削屑。

なお、中世・近世の木簡については、以上の型式番号に適合しないものが多いので、註記を省略する場合がある。

一、この凡例は木簡出土事例報告に関するものであり、論文などにおいては、必ずしもこれを用いるものではない。

一、英文目次は天理大学のW・エドワーズ氏にお願いした。

木簡学会役員(一九〇五・一九〇六年度)

会長 崇原水遠男
副会長 鈴野 和己
委員 篠江 宏之
鶴森 浩幸
鈴木 景二
鶴見 馬場 泰寿
吉川 山本 基常子
今泉 真司 崇崇
狩野 佐藤 佐竹 征夫
平川 佐藤 佐竹 昭
和田 石上 渡辺 常子
佐藤 幸一 吉江 保弘
平川 佐藤 坂上
佐藤 久 道雄 古尾谷知浩
宗譲 道雄 西山 角谷
南英一 清水 岡村 寺崎
南久 博泰 烏平 常子
南久 敏史 道雄 清次
南久 李東野 小林 勝山 吉川 山中 土橋 田熊 坂上
南久 清水 博泰 道雄 清彦 佐藤 康俊
南久 みき 治之 昌一 清次 吉川 聰 章誠 信

全国木簡出土遺跡・報告書データベースの公開

二〇〇四年一月、木簡学会は、奈良文化財研究所と協力して、「全国木簡出土遺跡・報告書総覧」（以下「総覧」と略称）を刊行した（本誌第二六号二五八頁参照）。『総覧』は二〇〇二年末までに公表された全国の木簡出土遺跡（九七五遺跡、三二一八四点）を対象としているが、その後も木簡出土情報が相次いで寄せられており、データの増補が望まれていた。

そこで奈良文化財研究所史料調査室では、「総覧」編集段階のデータをもととして、近年の出土情報が増えたデータベースを作成し、奈文研のホームページにて、今年一〇月二七日から公開を始めている。本誌第二六号までに掲載された事例や、本誌未掲載であるが報告書が刊行されているもの、本誌掲載後に刊行された報告書の情報などを増補して、現在一〇〇一遺跡、三三一〇〇〇点余の木簡出土情報が登録されており、今後も随時データの更新が予定されている。なお、冊子版の正誤表も同時に公開されている。

アドレスは左記の通り。

<http://www.nabunken.go.jp/database/>

奈良・平城宮跡

- 三

一 延長市二條大路南三丁目、二 同左北面

同上

2 調査期間
一 第二三〇次調査 一九八一年(昭56)六月

第一三〇次調查 一九八一年(昭56)六月

七月、二 第二六一次調查 一九九五年（平7）

七月、二 第二六一次調查 一九九五年（平7）

卷之三

4 調査担当者 一代表 岡田英男、二代表 町田 章

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡

6 遺跡の年代 奈良時代

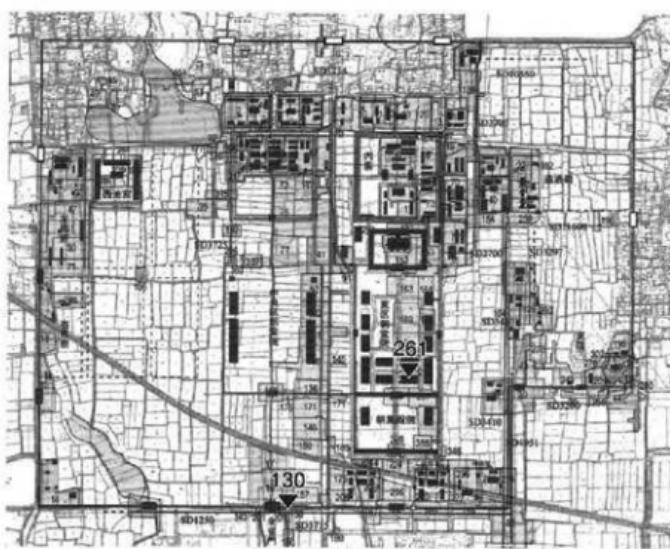
遺跡及び木簡出土遺構の概要

卷之六

第一三〇次調查

本調査は、朱雀門東側の南面大垣復原整備工事に伴う事前調査として実施されたものである。調査区は、大垣部分を調査した北調査区と、奈良時代の溝二条を検出した南調査区からなり、調査面積はあわせて五六〇m²である。木簡は南調査区から出土した。

東西溝SD一二五〇は、幅三・五m深さ〇・一〇・六mを測り
二条大路北側溝にある。南北溝SD九九二〇は朱雀大路東側溝ある。



平城宮跡発掘調査地点図

相当し、幅三・五印深さ〇・四印を測り、「一条大路北側溝SD一二五〇より発し」(一条大路を横断して南流する。木簡)一点は、SD九九一〇とSD一二五〇交点部分の最下層から、人形二点、曲物一点などとともに出土した。

二 第二六一次調査

本調査は、東区朝堂院東第六堂の調査である。東第一堂から第五堂までの調査により、東区朝堂院の朝堂は、奈良時代前半の掘立柱建物(下層建物)から、奈良時代後半に礎石建物(上層建物)に建て替えられたことが明らかにされている。

調査では、上層・下層の東第六堂(SB一六八五〇・SB一六八〇)を検出したほか、堂の両側で、礎敷SX一六八〇五を検出した。

下層東第六堂SB一六八〇〇は、桁行一二間梁行二間の身舎の南北

に扉が付く東西棟掘立柱建物である。身舎部分の柱穴が、基盤面に直接掘形を掘り、柱を建てた後に整地を施しているのに対し、廊の柱穴は整地土及び礎敷SX一六八〇五の面から掘り込んでいること、身舎部分にのみ基礎をもつこと、雨落溝の変遷などの知見により、朝堂の廻は後に増設されたものであることが判明している。

木簡一点は、下層東第六堂SB一六八〇〇の南側柱掘形から出土した。共伴する瓦や土器から、下層朝堂の建設が平城遷都時まで遡ることが明確になつておらず、木簡も遷都当初の時期のものとみられる。

8 木簡の积文・内容

一 第二三〇次調査

(1)

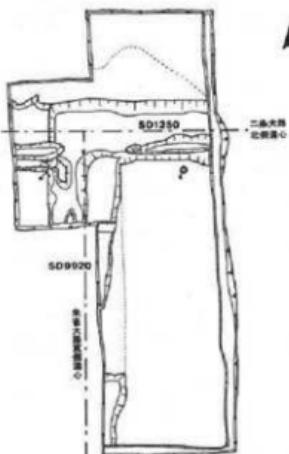
・ □□

(69)×(4)×3 081

(2)

・
□□
□□
□□
□□
□□
□□
□□
□□

(139)×(22)×2 081



第130次調査南区遺構図

左辺割れ。裏面は偏の残画のみ残り、二文字目は人偏であろう。

二 第六一次調査

(1)



128×102×13 065

上下両端は切斷。左右両端も切斷と判断したが、自然の割れの可能性もある。また、加工と墨書の前後関係は不詳。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『昭和五六年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九八一年)

同『一九九五年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九九六年)

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』一五、三三一(一九八一年、一九九六年)

(山本 勝)

奈良・平城 京跡左京三条二坊一坪

1 所在地 奈良市三条大路南一丁目

2 調査期間 第一九〇次調査 一九八八年（昭63）五月一～一月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 町田 章

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

一九八六年から八九年にかけて実施したデパート建設に伴う発掘調査では、総計一一万点にも及ぶ木簡が出土した。その大半は、左京三条二坊八坪東南隅の南北溝状土坑SD四七五〇の長屋王家木簡約三五〇〇〇点と、八坪北側の三条大路上の溝状遺構SD五一〇・五三〇・五三一〇の二条大路木簡計約七四〇〇〇点が占めるが、他にも多数の遺構から木簡が出土し

ている。本誌では各調査出土の主要な木簡を既に紹介したが、本誌未報告の調査の存在が判明したため、ここに報告する。

木簡が出土したのは、一坪南辺の奈良時代末期（一坪占地の時期にあたる）の井戸SE四八八五で、井戸枠は一辺八〇cmの方形縦板組構柱横棟どめ、掲形は径二・一mの円形、深さは二・九mで、底に円礫を敷き、径六八〇の円形曲物を据える。木簡は掲形と井戸枠内から各一点、計二点出土し、井戸枠内的一点のみ釈認できた。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「厚狭郡地子米五斗」

153×29×3 032

長門国厚狭郡の地子米の荷札である。公田の地子米は太政官の雑用に充てられ、同じ一坪の井戸SE五一四〇や同坪の包含層から墨書き器「官署」が出土したことから、旧長屋王邸に設けられた光明皇后宮の廃絶後再び國家の管理下に置かれたこの地が、奈良時代末に太政官厨家として利用された状況が窺える。長岡京の太政官厨家は左京三条二坊八町にあり、平城京における位置をほぼ踏襲していると考えられる。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所「平城京木簡」一（一九九六年）

同「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告」（一九九六年）

（著者著者）

奈良・西大寺旧境内



(奈良)

遺跡及び木簡出土遺構の概要
遺跡の年代 奈良時代～室町時代
木簡は室町時代の井戸から一点出土した。井戸は枠がなく、平面
は円形で直径一・二m、検出面からの深さは〇・九五mである。共
伴遺物には、丸瓦・平瓦・瓦質土器擂鉢・甕、陶器甕・壺、土師器
羽釜、凝灰岩の破片、炭化物がある。

- 1 所在地 奈良市西大寺北町
- 2 調査期間 第一七次調査 一〇〇四年(平成)四月～五月
- 3 発掘機関 奈良市教育委員会
- 4 調査担当者 久保邦江
- 5 遺跡の種類 都城跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 8 木簡の収文・内容

8 木簡の収文・内容

(1) 「〔パン〕〔ラム〕〔ラム〕〔ラム〕」

115×20×3 061

長方形の材の一端を山形にして、中央からやや上の位置に穿孔があ
る。木簡の形態と梵字が書かれていることから、笠塔婆であると考
えられる。

なお、取扱いにあたっては、奈良文化財研究所史料調査室の方々の
ご教示を得た。

(久保邦江)



境二基である。室町時代の一条の溝からは室町時代の土器・瓦のは
かに、奈良時代の土器・瓦も出土し、位置も考え合わせると、一条
北大路兩側溝と桑地の雨落溝を踏襲している可能性が考えられる。

木簡は室町時代の井戸から一点出土した。井戸は枠がなく、平面
は円形で直径一・二m、検出面からの深さは〇・九五mである。共
伴遺物には、丸瓦・平瓦・瓦質土器擂鉢・甕、陶器甕・壺、土師器
羽釜、凝灰岩の破片、炭化物がある。



(奈良)

- 主な検出遺構は、西小池中
東大池の西側と西南隅で、
調査面積は計約六八〇m²。
- 木簡出土遺構の概要
調査地は平城京跡左京四条七坊の東端部、興福寺大乗院にある。
(財)日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乗院庭園保存修理事業」の一環として一九九五年度以降継続して調査を行なっており、過去にも木簡が出土している(本誌第二二二四・一二六号)。

今回の調査地は現存する
水槽SX八八三八

- (1) 〔○□木□□
- ・「○□□

奈良・旧大乗院庭園

きゅうだいじょういんていえん

池SG八三三三、同南池SG七六五一などである。

- 1 所在地 奈良市高畠町
2 調査期間 二〇〇四年(平成16)七月一〇月
3 発掘機関 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部
4 調査担当者 代表 岡村道雄
5 遺跡の種類 庭園跡
6 遺跡の年代 古代ー近代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
8 調査地は平城京跡左京四条七坊の東端部、興福寺大乗院にある。
(財)日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乗院庭園保存修理事業」の一環として一九九五年度以降継続して調査を行なっており、過去にも木簡が出土している(本誌第二二二四・一二六号)。

木簡はいずれも近代のものである。このほかの文字資料として、鉛筆に「小野」と刻書で記名したもの、墨書き、墨書き焼瓦、刻印を有する焼瓦などが出土している。

- 8 木簡の収文・内容

(2)	「○種」	173×57×6 0.11
(3)	「按田」	(140)×31×6 0.19
(4)	「藤木」(細書)	43×29×9 0.11
(5)	「ウメキ氏」(細書)	(124)×19×10 0.19
	埋漬漬構S X八七九一	
(6)	「奈良県大中清水久須」 〔和国添下郡カ〕 □□小学校第〔老カ〕鶴良	25×20×8 0.1
(7)	「飛車」	23×20×3 0.1
(8)	・「角行」 ・「中将」	26×24×2 0.1
(9)	・「角行」	26×24×4 0.1
(10)	・「口口」	26×24×4 0.1
(11)	・「口」	26×24×4 0.1
(12)	・「大佐」	26×24×4 0.1
(13)	・「金将」	26×24×4 0.1
(14)	・「金将」	26×24×4 0.1
(15)	・「口口」	26×24×4 0.1
(16)	09 「銀将」	25×(23)×5 0.1
(17)	「少佐」	25×(22)×4 0.1

17	・ [少□] 〔少佐 <small>ナガサ</small> 〕	$(22) \times 20 \times 5$ 061
18	・ [□□] 〔佐 <small>ナガ</small> 〕	$26 \times (14) \times 4$ 061
19	・ [□□] 〔佐 <small>ナガ</small> 〕	$25 \times (13) \times 4$ 061
20	・「□」 〔大□〕 〔大將 <small>オウサム</small> 〕	$24 \times 20 \times 5$ 061
21	・「桂馬」 〔桂誠 <small>ケイジン</small> 〕	$26 \times (20) \times 2$ 061
22	・「□」 〔中尉 <small>チウエイ</small> 〕	$23 \times 19 \times 3$ 061
23	・「□」 〔准軍 <small>スンゴン</small> 〕	$23 \times 20 \times 4$ 061
24	・□ 〔中 <small>ナガ</small> 〕	$(10) \times (14) \times 2$ 061

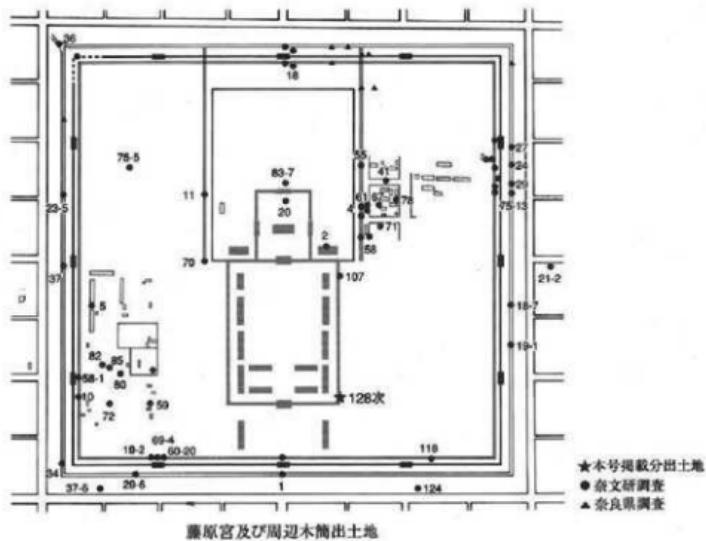
(1)～(3)は札状の木簡。(4)(5)は竹片に刻書したもの。(6)は看板状のもの。(7)以下は将棋の駒。文字は墨書きではない可能性が高い。上端部がしつかりとした圭頭のものと、やや崩れたものがある。多くは片面を削ぎ取るよう削り、行軍（車人）将棋の駒に一次的に加工する。削った面はいずれも未調整。削り方は、駒の下部左右どちらか一端に本来の面を残し、その対角線方向に向かって削り取るものと、全体を均一に削り取るものとの二種に大別できる。行軍将棋の文字は、墨書きのものもあるが、現状で糧色を呈するものもある。何らかの塗料の色か、鉄分が付着したためかは不明。行軍将棋は、日清・日露戦争期に詰め将棋から発展したものとされ、年代の上限を決める手がかりとなる。なお、転文は原則として行軍将棋に一次的に加工する前の当初の駒を基準にして表記した。

9

奈良文化財研究所「奈良文化財研究所紀要」二〇〇五(二〇〇五年) (馬場 基)

奈良・藤原宮跡

- | | | |
|---|---------------|---|
| 1 | 所在地 | 奈良県橿原市高殿町 |
| 2 | 調査期間 | 第一二二八次調査 二〇〇三年(平15)四月~七月 |
| 3 | 発掘機関 | 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 |
| 4 | 調査担当者 | 代表 金子裕之 |
| 5 | 遺跡の種類 | 宮殿跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 七世紀末~八世紀初頭 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 一九九九年度より実施している藤原宮跡大極殿・朝堂院地区における再調査の六回目である。調査位置は朝堂院回廊東南隅部にあたる。調査面積は一〇二四坪である。 |



木簡は、朝堂院の東外側を北流する南北溝SD九八・五から五〇・〇点以上出土した。大多数は削屑で、それ以外は二六六点にとどまる。SD九八・一五は、西流してきた溝が朝堂院回廊と朝集殿院区画施設の取り付け付近で北に折れたもの。規模は幅約一・五m深さ約〇・五mだが、屈折部付近と石敷き（後述）付近は浅く、氾濫原状に広がる。堆積土は大きく三層あり、最下層からは自然木と少量の瓦片が、第一層からは多量の木屑が、最上層からは造営時の廃棄物と瓦が出土した。木簡は第一層から出土し、特に石敷き以北の溝西岸部に集中する。木簡の出土状況から判断して、近接する場所から投棄されたものとみられ、極めて一括性が高い。

なお、石敷きはSD九八一五を埋めた後に東西方向に整地されたもので、朝堂院東面回廊の南から三間目の場所に位置する。この石敷きが通路的な性格をもつ舗装であったとする。回廊のこの位置に通用門が開いていた可能性もある。

8 木簡の釈文・内容

- (8) 「□連部卅三 嶋身部□四□」

・「卅七 五月廿四日」

・「五背部卅三百鷦部六」

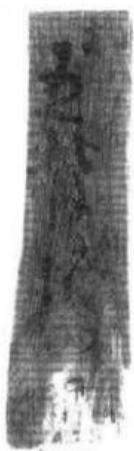
(9) 「五月廿四日」

・「可慈給其食者者〔屯六〕仰旨待待耳」

〔隨九〕

・「恐々還申我主我尊御心□賜□□」

2004年出土の木簡



(10)



(5)



(2)



(48)



(26)



(34)



(11)

取物物河
「横カ」

衣各
食糞
(曲物底板)

51)

日道
高志前

□□
□□
□□

122×72×6 861

年紀のある木簡は、(4)戊寅年(天武七年、六七八)、(2)癸卯年(天武八年、六七九)、(4)大宝元年(七〇一)、(3)大宝二年、(2)大宝三年が
ある。コホリ・サトの表記は、本誌に未掲載のものを含めて「郡」
「里」が圧倒的に多い。現時点では、「評」は(9)以外に一点あるの
みで、「五十戸」は(4)にその可能性があるに過ぎない。金体として
八世紀初頭の大宝年間の木簡が主体をなしているとみられるが、(9)
(12)のように天武朝のものごく少數含まれている。(4)は長期保存の
きく物品の荷札であつたため、(9)はこの記録簡を削り取った時点が
遅れたため、ともに廃棄が運れたのであろうか。

(1)はほぼ完形の文書木簡で、食物の請求を行なつたもの。上申す

る相手を「我主」「我尊」と表記する点が興味深い。

(2)は右衛士府から出された移。廃棄場所は宛先・差出いすれもあ
り得るが、衛士・仕丁との密接な関連を示唆する木簡が多數含まれ
てることから(後述)、差出に戻されて廃棄された蓋然性が高い。

但し、遺跡の立地場所からみて、右衛士府の本司ではなく、その閑
連施設であったと考えられる。木簡の出土地点の近くには、朝堂院
東面回廊の通用門が開いていた可能性があり(前述)、衛士府が
「中門」(養老宮衛令では「宮門」)の警備にあたっていたことと整合
するかもしれない。但し、衛士は仕丁などとともに造営工事に駆使
されることも多く、警備・造営の両面を念頭に置く必要がある。

(3)の四周は二次的整形。よく似た形状に二次的に整形された木簡
も共伴して出土しており、本来は同一簡であった可能性もある。

(5)~(7)には、衛士・仕丁などの編成単位である「列」の語がみえ
る。「猪手」「辛大」「鳴身」はその責任者である。(7)の「鳴身」は
(8)にも登場する。(8)(9)の「郡」は「列」と同義と理解してよからう。
(9)の「五骨」は(9)にもみられる。衛士・仕丁の人員編成は一〇人・
五〇人を単位としたため、その責任者を「十上」「五十上」「長」と
称したが、(10)にその語がみえる。(10)は「衛士」と明記された削屑。
(10)の「立丁」は、サトから一人一組で徵發された仕丁のうち、実役
に従事するものである。(10)は上日数を記したものか。(10)「二月廿
九」は「日」字が続かず、削り取った痕跡もないことから、二月の

上日数を記録した可能性がある。⁴⁰も同類と考えられる。³⁹は「病ニ依リテ還ル」とあり、³⁴の「通」(逃)と同義)とあわせて、過酷な労働の実態を示唆している。

本調査では、地名や人名を列举した木簡・削層が多数出土している。³⁹~⁴³はその一部に過ぎない。原形としてさまざまな文書形式が想定されるが、「地名+人名」となるものが目立ち、衛士・仕丁の本貫地とその名前を記したものが多く含まれると推定される。但し、このように考えた場合に若干問題となるのは、⁴⁴~⁴⁷には畿内地名がみられる点である。⁴²は山背国宇治郡大國里と推定。衛士・仕丁の貢進地として畿内が除外されていたという有力な見解があり、今後議論を呼ぶであろう。なお兵衛に関わる可能性については、兵衛の警備場所は「内門」(兼毛宮衛所では「關門」)であったこと、木簡にみえる人名の大多数は部姓であることから、成立の余地は低いと思われる。⁴⁸「忍海評」は、葛城地域における忍海コホリの成立時期が評制下に通ることを示す点でも重要である。⁴⁹「雀王マ」は雀部のこと、蟻王部(鷹)・孔雀部(孔雀)・建王部(建鷹)と同様の表記である。「某王部」は五世紀の大王の名を負う名代・子代の部に間わるものとみられる。⁵⁰は七片からなる記録筒で、上端は原形をとどめる。直接接合しない箇所もあるが、出土地点・木目の方向・筆跡から同一箇とみて間違いない。

貢進物荷札と考えられるのは⁵¹が唯一の例である。物品付札は⁴³

~⁴⁶がある。⁵²にみえる「熟麻」は、平城京跡の一条大路木簡に「右衛士府請熟麻斤斤」と書かれたものがあり(『平城宮発掘調査出土木簡概報』三一、二二頁)、本木簡群は衛士府に関わるものとのみ際の傍証となるかもしれない。また、⁵³の切り込みは下端のみにある。⁴⁴は下端を剃先形に尖らせるが、木簡の長さに対して横幅がかなり広く、あるいは付札ではないかもしれない。

⁴⁵は薬の処方を記した木簡である。「偏急子金要方」に収められた「秦丸酒」(關節痛などの治療薬)の項には同文がみられる。「偏急子金要方」は、初唐の医家である孫思邈が六五〇年頃に著した「千金要方」を宋代に校訂したもので、飛鳥京跡菟池遺構からも、同書に載る「西州統命湯」の処方と類似した木簡が出土しており(本誌第二五号⁵⁴)。「千金要方」が七世紀後半までに日本に将来された可能性が指摘されている。⁵⁵は右上・右下隅部を斜めに削り落とした材の上下に「玄黃」と記す。「千字文」の第一句「天地玄黃」を想起すれば、木器として使用する際の天地関係を示すとみられる。⁵⁶の四周は二次的整形。⁵⁷の「高志前」は越前の古い表記である。

9 関係文献

- 奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要』(2004年)
同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一八、一九(2004年)
年、1005年)

奈良・石神遺跡



(吉野山)

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥
2 調査期間 第一六次調査 一二〇〇三年(平成15)七月一~二〇〇四年一月
3 発掘機関 奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者 代表 金子裕之
5 遺跡の種類 宮殿関連遺跡
6 遺跡の年代 飛鳥時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

石神遺跡では、一九八一年からの縦横調査によつて、主として、

A期(七世紀前半~中頃)、三小期に区分、B期(七世紀後半~二小期に区分)、C期(七世紀末)の遺構群を検出している。最も整備されたのはA3期で、齊明朝の公的要塞施設として使用されたが、B・C期には官衙的な様相を呈するようにな

る。今回報告する第一六次調査区は、木簡二六五〇点が出土した第一五大調査区(本誌第二六号)のすぐ北側にあたり、石神遺跡の中心をなす施設群の北方に位置する。調査面積は六七三三m²である。

本調査区では、A期には全域に沼沢地SX四〇五〇が広がつていた。B期に沼沢地が埋められ、南北牽引溝SD四〇九〇、本来その一部であった土坑SX四一一三、南北石組溝SD四一二五、その東側石に接する石敷SX四一一四などが設けられた(B1期とする)。C期に造成のため一番は再度整地されるが、その過程で南北牽引溝SD四一二一や円形土坑SX四一二三が掘られた(B2期とする)。C期の造成整地後、南北牽引溝SD四一二七、それを整備したSD四一二七A・B、石敷SX四〇八一・四一二四が造られた。

D三四七A・B、石敷SX四〇八一・四一二四が造られた。

今回出土した木簡は、計八五三点(うち削削五七四点)に上る。

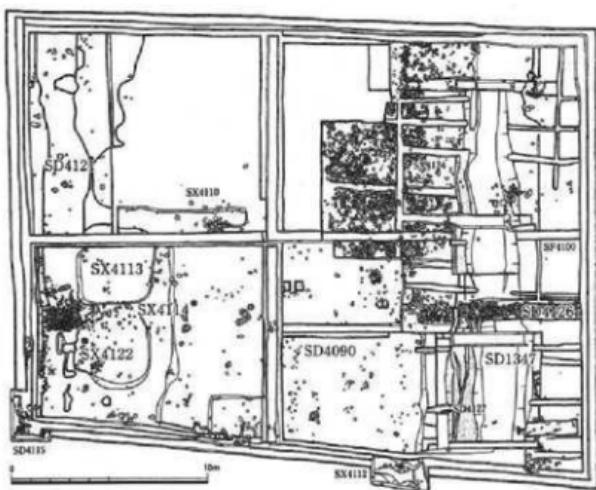
B1期では、B期の造成整地土から削削七点、南北溝SD四〇九〇・堆積土から一〇七点(うち削削四八点)、同埋立土から四点、土坑SX四一二三から一四点(うち削削五点)出土した。SD四〇九〇は、第一五次調査で検出した北流する南北溝で、A期沼沢地の埋立土を約〇・四m掘り下げ、東岸は急勾配で直線的、西岸は緩傾斜で施行する。幅は一三~一六mで、調査区北部で西側に広がる。底には一部に礫が散かれ、凌濛時の埋り残しとみられる砂混じり粘質土が点在する。その後、均質な暗茶灰色粘土が約〇・二m堆積し、東南部ではその上層に木屑混まりがある。木簡は各層に含まれてい

たが、特に暗茶灰褐色土・木屑層より層に多かった。SX四一二三は直徑約四mの円形土坑で、SD四〇九〇の西邊にある。

B2期では、南北溝SD四一二一から三八五点（うち削層二三点）、その上を広く覆う木屑層から一五点（うち削層七五点）、土坑SX四一二二から五一点（うち削層三点）出土した。SD四一二一は、幅約一m深さ〇・一～〇・二mの素掘り溝で、石敷SX四一二四以南にはない。木屑層は、調査区の西邊でSD四一二一を覆い、さらに広範囲に及ぶもの。SD四一二一には流水によって形成された砂層がないため、C期への造成工事の際に掘られた排水用の溝が埋まつた後、その上に広範に木屑を廃棄したものとみられる。SX四一二二は直徑約四m深さ〇・一mの円形土坑で、前述の木屑層より新しい。これらは、C期造成整地土出土の木簡一七点と合わせ、B期廃絶からC期造成に至る工事の過程で投棄されたとみられる。

C期では、南北溝SD一三四七Aの堆積土から八〇点（うち削層三〇点）出土した。SD一三四七Aは、既往の調査で検出した北流する溝で、幅約五m深さ〇・五～〇・八m。東岸の一部には護岸石が施される。最終的には、幅約一m深さ約〇・二mのSD一三四七Bとなる。

これらのほか、C期以降の東西溝SD四一二六から一点、遺物包含層から七点の木簡が出土している。



石神遺跡第16次調査造構図

南北満SD四〇九〇 (岸根士)

〔海ガ〕
×□浅井評

(10) □毛評鳴▽

91×21×2 0.33

(11) 六斗▽

〔役カ〕〔村ガ〕
〔▽道評〕〔五十瓦〕〔△△△〕▽
軍布廿斤

182×31×5 0.01

(12) □毛評鳴▽

(103)×22×4 0.19

(13) □毛評鳴▽

(118)×21×2 0.09

(14) □毛評鳴▽

(107)×(23)×3 0.01

(15) □毛評鳴▽

131×22×6 0.03

(16) □毛評鳴▽

(145)×20×3 0.09

(17) □毛評鳴▽

111×13×2 0.02

- (1) □道官□
- (2) 「戊子年□」
- (3) 「△王辰年九月□□日 三川國×
- 〔山四カ〕
- 「△高橋里 物マ□乃井六斗」
- (210)×24×5 0.09
- (4) 「△王辰年九月廿四日万枯里長マ大真」
- 「△呂五斗」
- (5) 「鴨評万枯里物マ稻都弥米五斗△」
- 217×20×3 0.02*
- (6) 「壬辰年九月七日三川国鴨院□□」
- (199)×(12)×5 0.01
- (7) 「△三川穂評穂里穂マ佐」
- 136×20×2 0.02
- (8) 「△川者豆評」
- (107)×25×4 0.09
- 「△杉原甘菜」

- 08 . ×乎 有朋自遠方來 □
- 09 「大大大□□□」^{〔大々〕} (左側面) (259)×(11)×18 081
- 南北漢S0四〇九〇 (埋立土)
- 10 「▽三川因鴨▽」
- 11 「▽□岐國多度評方×
- 南北漢S0四一〇一
- 12 □□・前牒告。」
- 13 「磯マ 宜マ □□人マ ^{〔島々〕} 海□□□馬矢マ ^{〔諸諸〕} 神人マ □□道守×
- 14 「^{〔穴カ〕} 狐王ママ 建王マ ^{〔若湯坐マ〕} 芙原ママ ^{〔小娘〕} 矢作マ ^{〔土師マ〕} 連人マ ^{〔五百來マ〕} 「赤根□」 ^{〔諸若湯坐マ〕} 秦ママ ^{〔大德世〕}」
- 15 「^{〔加牟〕} 加牟皮手五升 小麻田戸一升」
- 16 「鳥取□□一升 桜井戸一升」
- 17 「青見□□一升 知利布一升 汗久皮二一升」
- 18 「^{〔君々〕} △三川十上」
- 19 「^{〔青々〕} □見評△」
- 20 . ×五斗△」
- 21 (26+96)×22×3 019
- 22 (109)×18×3 031
- 23 (97)×29×2 051
- 24 . ×取□人一 □青×
「^{〔人カ〕} □三ツ 田麻□ ^{〔生カ〕}
- 25 「阿之乃皮尔之母□」
- 26 「□□三野國大野評」
- 27 「□五十戸六斗」
- 28 「▽己卯年八月十五日□」
- 29 「▽□五十戸神人マ×
- 30 「▽加ツ遠木太比」
- 31 「^{〔君々〕} □□□」
- 32 (95)×32×2 039
- 33 163×23×4 032
- 34 (297)×59×3 081
- 35 90×21×5 011
- 36 168×29×2 051
- 37 (92)×20×3 069

(32)	「 \vee 几」卯年十一月二日野国加尔評 \vee 」	140×34×5 031
(33)	「 \vee 穴 \square 五 \square 」 <small>〔地\square〕</small>	(122)×17×6 039
(34)	「 \times □ \square 養依六斗」	161×24×5 051
(35)	「留之良奈你麻久 阿佐奈伎尔伎也」(刻書)	91×53×6 065
	土坑 \varnothing × \varnothing 1111	
(36)	「壬午年廿日記 \times	
	「 \square	
(37)	「 \vee 安詳 \square □」	(92)×22×6 019
(38)	「 \vee 十七」	148×28×4 033
	「 \vee 竹田五十戸六人マ乎」	
	「 \vee 佐加柏依看束」	121×20×3 032
	「 \vee 江川里猪甘マ斯多」	
(39)	「 \vee 米六斗 \square 升 \square 」	(149)×23×5 032
	「 \vee □米六斗 \square 升 \square 」	
(40)	「 \vee 依地評 \square □」	(90)×28×4 039
	C期造成立地土	
(41)	「 \vee 羽栗評三川里人 \square □」	(123)×25×5 039



年紀のある木簡は「一点あり、乙亥年（天武四年、六七五年）から壬辰年（持統六年、六九二年）までの範囲に収まる。コホリは全て「評」で、サトは「里」より「五十戸」が多い。第一五次調査出土木簡と同様、七世紀後半の天武・持統朝の木簡が大部分を占める。仕丁制に関わる木簡が多数あり、特に三川国のものが多い。⁽²³⁾⁽²⁴⁾は青見評（後の碧海郡）、⁽²⁵⁾は穂評（後の宮城郡）の仕丁に関わる。⁽²³⁾は「加牟加皮手」という技術者のもの、青見評の鳥取以下のサトの仕丁が集団を組み、食料を支給されたことを示す。「神久」「鳥取」

「青見」の下の二文字は、(2)を参照すると「連人」と解説できるか。
(2)と共に伴して「桜井君」「持久君」「汎久皮ツ戸」など関連する語句
を含む木簡も出土した。(2)は「下端を二次的に削って尖らせる。本来
的には仕丁五日分の米支給帳簿であろう。裏面は別筆で和歌のよう
なものと記す。(3)「三川十上君」は、三川国の仕丁一〇人の統率者。
第一五次調査出土木簡「三野五十上大夫」(本誌第二六号(9))とあわ
せ、出身国別に仕丁が編成されていたことを示唆する。荷札木簡も
三川国ものが多い。うち(3)には「六斗」と記し、養米(後の唐
米)と推定される。養米は仕丁などの資糧物として用いられたが、
三川国の仕丁が遺跡近辺で活動していたことと関連しよう。

- (1)「道宣」は初出。調査区北側に予想される山田道と関係するか。
(2)は荷札木簡の類ではない。(9)は「(近水)海」となろう。(10)は後
の美濃国賀茂郡志麻郷に比定される。(11)役道評は卯依地評と同じで、
後の隱岐国役道郡のこと。(12)の「仕俵」は仕丁の俵の意で、養米の
ことであろう。(13)「竹田マ五戸」は後の若狭国見方郡竹田郷にあた
るか。(14)は「甘葉」の付札で、同溝からもう一点出土。(15)は角柱状
の材に「諭語」学而篇の一節を記す。左辺は二次的に削って側面に
「大」字を書する。(16)は「諭岐國多度評方田……」と書かれてい
たと推定される。(17)は「吾」字の上から孔が穿たれている。(18)は部
姓を列記した木簡。他に「春宜マ」「秦マ」「大甘マ」「竹田マ」「他
田マ」「大市マ」などの語句を記した断片が一点あり、(2)と同一箇

と考えられる。別筆で「小穂」「赤穂」(穂字は「養」の可能性もある)
と追記されているが、食料支給時に利用されたものか。表面中
行の「(口)宣マ」はソガベの可能性がある。「子連」は字連(字通)。

裏面左行の「五百束マ」は五百木部(伊福起)。別筆の「春宣マ」も
春日部の表記として興味深い。(2)は裏面にも記載が及んでいた可能
性が高いが、墨痕は確認できない。(3)は「養」を明記した荷札。上
端は二次的に整彩して尖らせる。(3)は羽子板状の木製品に二行七文
字ずつ整然と文字を刻む。和歌の可能性もある。(4)は月名を省略。
(5)の竹田サトは各地にあるが、「延喜式」では年科別貢雜物として
柏を貢進する国と合致する丹波国水上郡竹田郷にあたる可能性が高
いか。(6)「寸」は「村」の省略で、ここではサトの意で使用。(7)は
「□□□評」と「大夫」は若干行がずれるため、「評大夫」とは
ならない。(8)「月立」は月生・月朔と同義。(9)「於賦」はオフで白
貝のこと。

このほか、木簡を転用した定本一点(SD一三四七A)、封緘状木
製品一点(SD四〇九〇堆積土)も出土している。

9 関係文献

奈良文化財研究所「奈良文化財研究所紀要一〇〇四」(一〇〇四年)
同「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報」一八、一九(一〇〇四
年、一〇〇五年)

大阪・禁野本町遺跡



(大阪東北部)

- 1 所在地 大阪府枚方市中宮北町
2 調査期間 一 第一〇三—三次調査 一〇〇三年(平15)一月—一〇〇四年三月、二 第二〇三—四次調査 一〇〇四年四月—一〇〇五年三月
3 発掘機関 助枚方市文化財研究調査会
4 調査担当者 西村健司
5 遺跡の種類 集落跡
6 遺跡の年代 弥生時代—近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

禁野本町遺跡は、天野川と穂谷川の間に挟まれ、淀川に面し突出した交野台地縁辺の海拔二七三四四mの地点に立地する、弥生時代後期から末頃までのものと考察される。

二 第一〇三—四次調査

本調査は、第一〇三—三次調査区の東側周辺約三一〇〇mで実施したものである。調査の結果、東西道路の延長部分や、さらに北側で別の東西道路を検出したほか、掘立柱建物・井戸・池状遺構などを検出した。遺構の時期は、奈良時代前期から平安時代初期にかけての時期で、本遺跡

の南方約五〇〇mに位置する特別史跡百濟寺跡を運営した百濟王氏との関係が注目されている。

これまでの調査では、百濟寺跡の伽藍中壇場に一致する南北方向道路とともに、この道路と軸方向を掘え、一辺一〇〇m余りの外郭と一辺約二七mの内郭からなる方形区画を検出している(第六九次・第一〇三大調査)。この区画は、内郭・外郭ともに四辺の各中央に出入口を備えていたと推測されている。

一 第一〇三—三次調査

本調査は、第一〇三次調査の東隣接地で、約一〇〇〇m²を対象とした。調査の結果、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物、井戸、前述の南北道路に直交する東西道路などを検出した。

木簡は、井戸SE一〇一から、木製品・木片・自然木・種子類・土師器・須恵器などとともに、五点出土した。井戸SE一〇一は、掘形の直徑約三・二m深さ約三mで、井戸枠は抜き取られていたが縦方向の枠板らしきものが一部に残り、底部は一辺約一・四mの方形をなす。奈良時代後期から末頃までのものと考察される。

本調査は、第一〇三—三次調査区の東側周辺約三一〇〇mで実施したものである。調査の結果、東西道路の延長部分や、さらに北側で別の東西道路を検出したほか、掘立柱建物・井戸・池状遺構などを検出した。遺構の時期は、奈良時代前期から平安時代初期にかけ

である。

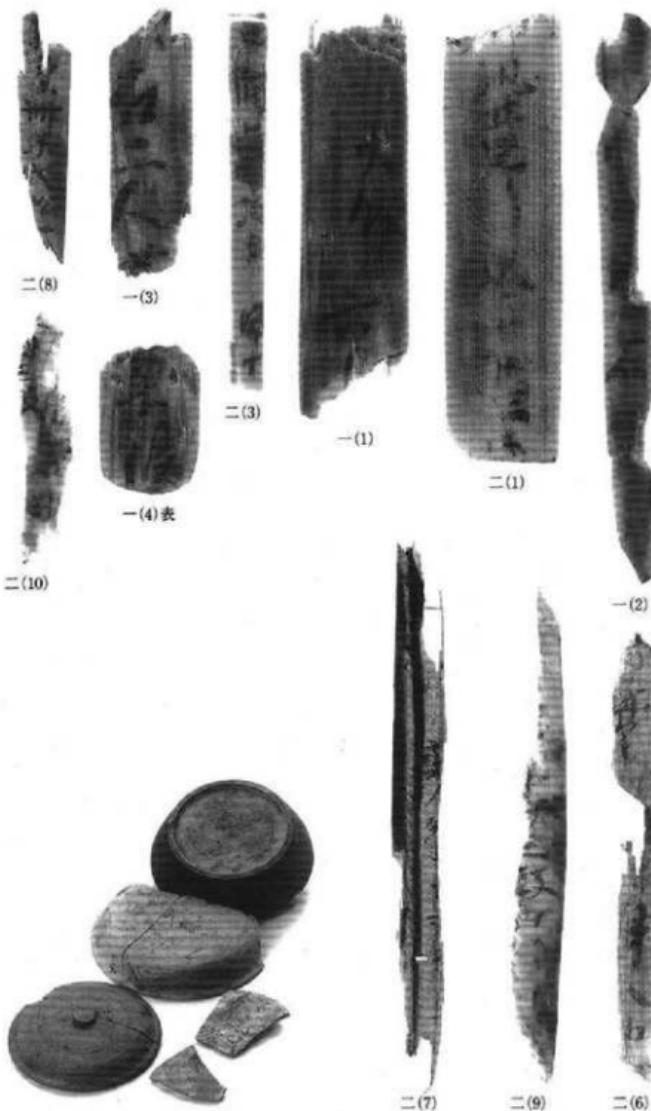
木簡は、井戸 SE-17-から三四〇点（うち削屑三四点）出土した。SE-17-は奈良時代前期のものと考えられ、直径一・四m深さ五・三mの規模をもつ。共伴遺物には、木製品・木片・自然木・種子類・土師器・須恵器のはが、「少家」「小家」「家」と記された三点の墨書きがある。このほか、奈良時代後期頃のものと考えられる井戸 SE-7から、「真山」「丁」（あるいはT字状の記号か）の墨書きをもつ土壁一点が出土している。

8 木簡の新文・内容

第一〇三一大調查

- | | | | |
|-----|--------------------------------|-----------------------------|-----|
| (1) | 大領
六月 | $160 \times 132 \times 4$ | 081 |
| (2) | 「 $\vee \square \square$ 米一石」 | $160 \times 17 \times 4$ | 033 |
| (3) | 右一人□
〔等々〕 | $(81) \times (25) \times 2$ | 061 |
| (4) | ・「 $\square \square$ 」
〔酒か〕 | $45 \times 29 \times 2$ | 065 |
| (5) | 肥人□ | $110 \times (13) \times 14$ | 091 |
| (6) | □麻印 | $161 \times 29 \times 5$ | 032 |
| (7) | 〔歌人々〕
□□□□□□□□ | $(133) \times 36 \times 5$ | 019 |

みより下は削れ、下端と左辺は削り。切り込みはかなり深く大きい。「官」または「宮」であろう。(3)は上端は刃物による一次の切断、下端折れ、左辺削り、右辺削れ。裏面の調整は粗い。(4)は四周削りで、いずれも二次的整形の可能性がある。「官」字の上部左右に小さな孔が二個穿たれる。墨痕は明瞭だが、軽続できな
い。用途も不詳。



禁野本町遺跡出土墨書土器

(木筒はいずれも赤外線画像)

(8)	□ 売畠東代〔船カ〕
(9)	□ □ □ 三段内
(10)	〔田カ〕〔路カ〕
	□ □ □
(11)	〔春カ〕
	□ 米 □ □
(12)	
(13)	
(14)	
(15)	
(16)	
(17)	
(18)	
(19)	
(20)	
(21)	
(22)	
(23)	
(24)	
(25)	
(26)	
(27)	
(28)	
(29)	
(30)	
(31)	
(32)	
(33)	
(34)	
(35)	
(36)	
(37)	
(38)	
(39)	
(40)	
(41)	
(42)	
(43)	
(44)	
(45)	
(46)	
(47)	
(48)	
(49)	
(50)	
(51)	
(52)	
(53)	
(54)	
(55)	
(56)	
(57)	
(58)	
(59)	
(60)	
(61)	
(62)	
(63)	
(64)	
(65)	
(66)	
(67)	
(68)	
(69)	
(70)	
(71)	
(72)	
(73)	
(74)	
(75)	
(76)	
(77)	
(78)	
(79)	
(80)	
(81)	
(82)	
(83)	
(84)	
(85)	
(86)	
(87)	
(88)	
(89)	
(90)	
(91)	
(92)	
(93)	
(94)	
(95)	
(96)	
(97)	
(98)	
(99)	
(100)	
(101)	
(102)	
(103)	
(104)	
(105)	
(106)	
(107)	
(108)	
(109)	
(110)	
(111)	
(112)	
(113)	
(114)	
(115)	
(116)	
(117)	
(118)	
(119)	
(120)	
(121)	
(122)	
(123)	
(124)	
(125)	
(126)	
(127)	
(128)	
(129)	
(130)	
(131)	
(132)	
(133)	
(134)	
(135)	
(136)	
(137)	
(138)	
(139)	
(140)	
(141)	
(142)	
(143)	
(144)	
(145)	
(146)	
(147)	
(148)	
(149)	
(150)	
(151)	
(152)	
(153)	
(154)	
(155)	
(156)	
(157)	
(158)	
(159)	
(160)	
(161)	
(162)	
(163)	
(164)	
(165)	
(166)	
(167)	
(168)	
(169)	
(170)	
(171)	
(172)	
(173)	
(174)	
(175)	
(176)	
(177)	
(178)	
(179)	
(180)	
(181)	
(182)	
(183)	
(184)	
(185)	
(186)	
(187)	
(188)	
(189)	
(190)	
(191)	
(192)	
(193)	
(194)	
(195)	
(196)	
(197)	
(198)	
(199)	
(200)	
(201)	
(202)	
(203)	
(204)	
(205)	
(206)	
(207)	
(208)	
(209)	
(210)	
(211)	
(212)	
(213)	
(214)	
(215)	
(216)	
(217)	
(218)	
(219)	
(220)	
(221)	
(222)	
(223)	
(224)	
(225)	
(226)	
(227)	
(228)	
(229)	
(230)	
(231)	
(232)	
(233)	
(234)	
(235)	
(236)	
(237)	
(238)	
(239)	
(240)	
(241)	
(242)	
(243)	
(244)	
(245)	
(246)	
(247)	
(248)	
(249)	
(250)	
(251)	
(252)	
(253)	
(254)	
(255)	
(256)	
(257)	
(258)	
(259)	
(260)	
(261)	
(262)	
(263)	
(264)	
(265)	
(266)	
(267)	
(268)	
(269)	
(270)	
(271)	
(272)	
(273)	
(274)	
(275)	
(276)	
(277)	
(278)	
(279)	
(280)	
(281)	
(282)	
(283)	
(284)	
(285)	
(286)	
(287)	
(288)	
(289)	
(290)	
(291)	
(292)	
(293)	
(294)	
(295)	
(296)	
(297)	
(298)	
(299)	
(300)	
(301)	
(302)	
(303)	
(304)	
(305)	
(306)	
(307)	
(308)	
(309)	
(310)	
(311)	
(312)	
(313)	
(314)	
(315)	
(316)	
(317)	
(318)	
(319)	
(320)	
(321)	
(322)	
(323)	
(324)	
(325)	
(326)	
(327)	
(328)	
(329)	
(330)	
(331)	
(332)	
(333)	
(334)	
(335)	
(336)	
(337)	
(338)	
(339)	
(340)	
(341)	
(342)	
(343)	
(344)	
(345)	
(346)	
(347)	
(348)	
(349)	
(350)	
(351)	
(352)	
(353)	
(354)	
(355)	
(356)	
(357)	
(358)	
(359)	
(360)	
(361)	
(362)	
(363)	
(364)	
(365)	
(366)	
(367)	
(368)	
(369)	
(370)	
(371)	
(372)	
(373)	
(374)	
(375)	
(376)	
(377)	
(378)	
(379)	
(380)	
(381)	
(382)	
(383)	
(384)	
(385)	
(386)	
(387)	
(388)	
(389)	
(390)	
(391)	
(392)	
(393)	
(394)	
(395)	
(396)	
(397)	
(398)	
(399)	
(400)	
(401)	
(402)	
(403)	
(404)	
(405)	
(406)	
(407)	
(408)	
(409)	
(410)	
(411)	
(412)	
(413)	
(414)	
(415)	
(416)	
(417)	
(418)	
(419)	
(420)	
(421)	
(422)	
(423)	
(424)	
(425)	
(426)	
(427)	
(428)	
(429)	
(430)	
(431)	
(432)	
(433)	
(434)	
(435)	
(436)	
(437)	
(438)	
(439)	
(440)	
(441)	
(442)	
(443)	
(444)	
(445)	
(446)	
(447)	
(448)	
(449)	
(450)	
(451)	
(452)	
(453)	
(454)	
(455)	
(456)	
(457)	
(458)	
(459)	
(460)	
(461)	
(462)	
(463)	
(464)	
(465)	
(466)	
(467)	
(468)	
(469)	
(470)	
(471)	
(472)	
(473)	
(474)	
(475)	
(476)	
(477)	
(478)	
(479)	
(480)	
(481)	
(482)	
(483)	
(484)	
(485)	
(486)	
(487)	
(488)	
(489)	
(490)	
(491)	
(492)	
(493)	
(494)	
(495)	
(496)	
(497)	
(498)	
(499)	
(500)	
(501)	
(502)	
(503)	
(504)	
(505)	
(506)	
(507)	
(508)	
(509)	
(510)	
(511)	
(512)	
(513)	
(514)	
(515)	
(516)	
(517)	
(518)	
(519)	
(520)	
(521)	
(522)	
(523)	
(524)	
(525)	
(526)	
(527)	
(528)	
(529)	
(530)	
(531)	
(532)	
(533)	
(534)	
(535)	
(536)	
(537)	
(538)	
(539)	
(540)	
(541)	
(542)	
(543)	
(544)	
(545)	
(546)	
(547)	
(548)	
(549)	
(550)	
(551)	
(552)	
(553)	
(554)	
(555)	
(556)	
(557)	
(558)	
(559)	
(560)	
(561)	
(562)	
(563)	
(564)	
(565)	
(566)	
(567)	
(568)	
(569)	
(570)	
(571)	
(572)	
(573)	
(574)	
(575)	
(576)	
(577)	
(578)	
(579)	
(580)	
(581)	
(582)	
(583)	
(584)	
(585)	
(586)	
(587)	
(588)	
(589)	
(590)	
(591)	
(592)	
(593)	
(594)	
(595)	
(596)	
(597)	
(598)	
(599)	
(600)	
(601)	
(602)	
(603)	
(604)	
(605)	
(606)	
(607)	
(608)	
(609)	
(610)	
(611)	
(612)	
(613)	
(614)	
(615)	
(616)	
(617)	
(618)	
(619)	
(620)	
(621)	
(622)	
(623)	
(624)	
(625)	
(626)	
(627)	
(628)	
(629)	
(630)	
(631)	
(632)	
(633)	
(634)	
(635)	
(636)	
(637)	
(638)	
(639)	
(640)	
(641)	
(642)	
(643)	
(644)	
(645)	
(646)	
(647)	
(648)	
(649)	
(650)	
(651)	
(652)	
(653)	
(654)	
(655)	
(656)	
(657)	
(658)	
(659)	
(660)	
(661)	
(662)	
(663)	
(664)	
(665)	
(666)	
(667)	
(668)	
(669)	
(670)	
(671)	
(672)	
(673)	
(674)	
(675)	
(676)	
(677)	
(678)	
(679)	
(680)	
(681)	
(682)	
(683)	
(684)	
(685)	
(686)	
(687)	
(688)	
(689)	
(690)	
(691)	
(692)	
(693)	
(694)	
(695)	
(696)	
(697)	
(698)	
(699)	
(700)	
(701)	
(702)	
(703)	
(704)	
(705)	
(706)	
(707)	
(708)	
(709)	
(710)	
(711)	
(712)	
(713)	
(714)	
(715)	
(716)	
(717)	
(718)	
(719)	
(720)	
(721)	
(722)	
(723)	
(724)	
(725)	
(726)	
(727)	
(728)	
(729)	
(730)	
(731)	
(732)	
(733)	
(734)	
(735)	
(736)	
(737)	
(738)	
(739)	
(740)	
(741)	
(742)	
(743)	
(744)	
(745)	
(746)	
(747)	
(748)	
(749)	
(750)	
(751)	
(752)	
(753)	
(754)	
(755)	
(756)	
(757)	
(758)	
(759)	
(760)	
(761)	
(762)	
(763)	
(764)	
(765)	

大阪・島上郡衙跡

しまかみぐんが

○二八mを測る。遺物は備前焼の壺鉢、竹製杓、棲瓦などで、井戸の時期は江戸時代中頃以降である。

木簡の积文・内容

所在地 大阪府高槻市清福寺町
調査期間 一九七九年（昭54）九月～一〇月
発掘機関 高槻市立埋蔵文化財調査センター
調査担当者 森田克行

1 所在地
2 調査期間
3 発掘機関
4 調査担当者
5 遺跡の種類
6 遺跡の年代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は浜津国島上郡衙跡のうち、推定郡庁院の東北方にある。調査面積は約七四〇m²である。検出した遺構には弥生時代・古墳時

代の土坑・堅穴住居・中世・近世の井戸などがある。

今回報告する墨書のある

木製柱状具は、近世の井戸

二から出土した。井戸二は

円形石組で、底部に橋を設

置している。検出面からの

深さは一・六m、上辺の内径〇・八五m、折の一辺は



(京都西南部)



- 8 木簡の积文・内容
 - (1)
 - ・「標(頭部) 姜太公 在此
 - ・「空(頭部) 姜太公 在此
 - ・「風(頭部) 姜太公 在此
 - ・「火(頭部) 姜太公 在此 徒□
 - ・「水(頭部) 姜太公 在此 □無
 - ・「地(重部) 姜太公 在此

東(303)×南(44.00)

上半部は原形をとどめるが、下端は腐朽のため原形は不詳である。断面はほぼ正六角形を呈する。頂部は中心をやや高くして、求心状

に三角面を六個作り、右回りで「標」以下を一字ずつ記す。ついでこれらに統く縦方向の各面には、それぞれ水平方向に切り込みを入れ、長方形の単位面を作り出す。そして各面に上から順に「妻」「太」「公」「在此」と記す。以下は一部しか判読できないが、頂部の「火」に対応する五段目に「從□」、「水」に対応する五段目に「□無」が判読できる。頂部の字句は五輪塔の標で、各面は「妻太公、此に在り」と読める。「妻太公」は道教にいう太公望を指す。「從□」「□無」は井戸に関わる出入りのことを指すものか。いずれにしても辟邪の靈符とみられる。

9 關係文献

高槻市教育委員会『鶴上郡衙跡発掘調査概要』四（一九八〇年）

（森田亮行）



(三) 田

川除・藤ノ木遺跡は、三田盆地中央、武庫川によって形成された自然堤防上に立地する遺跡である。今回の調査は武庫川の河川改修事業に伴うもので、調査面積は約三六〇〇〇m²である。

検出した遺構は、弥生時代後期から古墳時代前半まで、古墳時代後期、平安時代後期から鎌倉時代前半ま

兵庫・川除・藤ノ木遺跡

かわうけ

ふじのき

たばのき

での三時期が中心である。このうち最も新しい時期の遺構は、掘立柱建物・溝・井戸・墓などから構成される居住地をなし、計九区画検出されている。

今回報告する呪符木簡は、最も西側の居住地を構成する井戸SE

- | | |
|---------------|--|
| 所在地 | 兵庫県三田市川除子藤ノ木・岸ノ上 |
| 調査期間 | 一九八七年(昭62)五月～一九八八年一月 |
| 発掘機関 | 兵庫県教育委員会 |
| 調査担当者 | 吉田 昇・吉岡雅仁・市橋重喜・山田清朝
甲斐昭光・高瀬一嘉 |
| 遺跡の種類 | 集落跡 |
| 遺跡の年代 | 弥生時代～鎌倉時代 |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 川除・藤ノ木遺跡は、三田盆地中央、武庫川によって形成された自然堤防上に立地する遺跡である。今回の調査は武庫川の河川改修事業に伴うもので、調査面積は約三六〇〇〇m ² である。 |

書されたものが、各一点認められる。

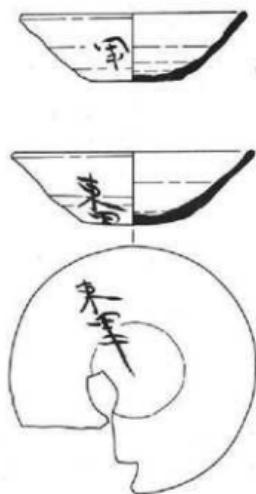
8 木簡の転写・内容

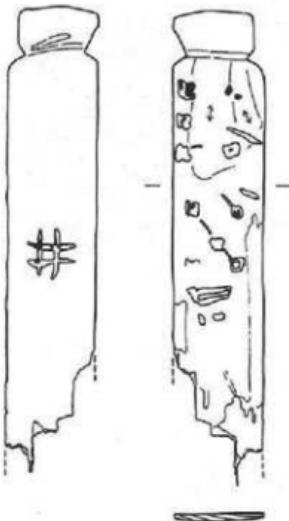
(1) 「く咄天翌 (符蓋)

「 井 

(185) × (96) × 3 039

〔田中〕
〔東田中〕





頭部には両側から切り込みを入れられており、下部は欠損している。画面に墨書きが認められる祝符木簡であるが、残存状況は良好ではなく、わずかに墨痕を確認できる程度である。材はヒノキである。

9 関係文献

兵庫県教育委員会「川除・藤ノ木遺跡」(兵庫県文化財調査報告一

〇四、一九九二年)

(山田清樹)

兵庫・板井寺ヶ谷遺跡



(様山)

日本道路公团による舞鶴自動車道建設に伴い、一九八三・八四年度に約七〇〇〇m²の発掘調査を行なった。

- | | | |
|---|---------------|----------------------------------|
| 1 | 所在地 | 兵庫県様山市（旧多紀郡西紀町）上板井字寺ヶ谷坪 |
| 2 | 調査期間 | 一九八三年（昭58）10月～一九八四年二月 |
| 3 | 発掘機関 | 兵庫県教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 水口富夫・市橋重喜・岸本一宏 |
| 5 | 遺跡の種類 | 集落跡・粘土探柵跡・自然流路 |
| 6 | 遺跡の年代 | 後期旧石器時代、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代末～室町時代 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

板井寺ヶ谷遺跡は兵庫県東部の様山盆地の北西隅付近に位置し、標高約300mの興法寺山から南東に張り出した微高地に立地する集落跡と、その東側に入り込んだ谷状地からなる。

その結果、平安時代末から鎌倉時代初頭までを中心とした掘立柱建物群・井戸などを検出し、下層には弥生時代後期から古墳時代前期までの粘土探査坑を数多く検出した。さらにその下層では、後期旧石器時代の大量の石器に加え、遺物集中箇所や礫群なども検出し、篠山盆地内の旧石器時代を代表する遺跡となつた。

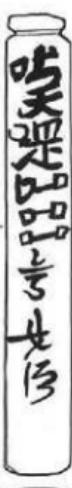
今回紹介する木簡は、掘立柱建物SB-0八内の北東隅に位置する井戸SE-0一から出土した二点と、東地区と呼称した谷状湿地部分の埋積土及び旧河道底から出土した二点である。いずれも一九八四年度の調査時に出土した。

(4)は旧河道底の砂礫層上面から人形・陽物形といった祭祀具とともに出土し、鎌倉時代前半のものと考えられる。(5)は包含層から出土した。木簡が出土した包含層からは田舟や木鍤が出土し、その上層では鎌倉時代後半の瓦器のほか、連曲下駄や馬鍼・卒塔婆軒用大足・挽物などが出土している。これらの層は泥地堆積層であり、泥状であったために軽いものは浮き、重いものは沈むといった現象が起つてゐたと推定でき、層ごとの堆積時期の限定は難しい。但し、旧

第 10 章

- | | |
|------------------------------|------------------|
| (1) 「△天定」(符縁) [急々如律令方] □□□□□ | 274×38×6 032 |
| (2) 「△天定」(符縁) [急々如律令方] □□□□□ | 256×40×5 032 |
| (3) 「△天定」(符縁) [急々如律令方] □□□□□ | (124)×(27)×3 059 |
| (4) 「△天定」(符縁) | (156)×(41)×9 039 |
| (5) 天鬼□□鬼
□□□ | (169)×47×6 059 |

(1)はスキ、(2)はサワラであり、ともに完形の呪符木簡で、同一文



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)

言であるが、符縁が異なる。(3)はスギ材で、上下を大きく欠損するが、下端が尖る形態であろう。井戸水に関する祭祀が行なわれたことを示す遺物である。

(4)はスギ材で、側面及び下部を欠損するが、推定幅六四で断面が薄鋸状を呈する。凸面には墨が残り、符縁には「火」の文字がみえるが、反対面では墨は消えて文字部分が浮き上がっている。

(5)は上部と下端を失する。文字は不鮮明で片面にのみ記されている。漢字が記され符縁ではないが、呪符の下端の可能性がある。

9 関係文献

兵庫県教育委員会「板井寺ヶ谷遺跡—縄文時代～中世の調査—」
(兵庫県文化財調査報告九六一、一九九二年)

(岸本一宏)

木簡研究第二六号

卷頭言 全國木簡出土遺跡・報告書総覽 刊行に寄せて 小林昌一
二〇〇三年出土木簡 要 稲佐京北辺 平城京跡右京北辺 平城京跡右
要 平城京跡左京三条三坊十一坪 平城京跡右京北辺 平城京跡右

城跡¹、建業²、流京跡³、兵庫⁴、大坂⁵、京築⁶、吉良⁷、石門⁸、中世⁹、龍泉¹⁰、
堀川¹¹、伊丹¹²、守連¹³、水谷¹⁴、城跡¹⁵、元和¹⁶、佐藤¹⁷、谷口¹⁸、水谷¹⁹、
堀川²⁰、小川²¹、屋敷²²、電氣²³、寺町²⁴、道跡²⁵、春日町²⁶、道跡²⁷、台東区²⁸、
馬場下町²⁹、松本城下町³⁰、六九³¹、松本城³²、御門道跡³³、北高道³⁴、
日丸里³⁵、利根³⁶、九丸里³⁷、利根³⁸、東高尾³⁹、延喜⁴⁰、荒井⁴¹、笛田⁴²、河股⁴³、
勝跡⁴⁴、（二）丸久⁴⁵、丸久里⁴⁶、山形城跡⁴⁷、新谷⁴⁸、道跡⁴⁹、龍内⁵⁰、茶畠⁵¹、
古志⁵²、田中東⁵³、大在⁵⁴、家道⁵⁵、山形城跡⁵⁶、新谷⁵⁷、道跡⁵⁸、春日町⁵⁹、道跡⁶⁰、
遺跡⁶¹、難波⁶²、金石⁶³、木本⁶⁴、跡⁶⁵、桜⁶⁶、可⁶⁷、道跡⁶⁸、石名⁶⁹、木本⁷⁰、舟⁷¹、
通⁷²、運⁷³、業⁷⁴、務⁷⁵、同⁷⁶、中⁷⁷、名⁷⁸、可⁷⁹、道⁸⁰、下前⁸¹、任⁸²、官⁸³、道⁸⁴、
木本⁸⁵、水谷⁸⁶、城⁸⁷、路⁸⁸、木本⁸⁹、城⁹⁰、路⁹¹、道⁹²、⁹³、⁹⁴、⁹⁵、⁹⁶、⁹⁷、⁹⁸、⁹⁹、¹⁰⁰、¹⁰¹、¹⁰²、¹⁰³、¹⁰⁴、¹⁰⁵、¹⁰⁶、¹⁰⁷、¹⁰⁸、¹⁰⁹、¹¹⁰、¹¹¹、¹¹²、¹¹³、¹¹⁴、¹¹⁵、¹¹⁶、¹¹⁷、¹¹⁸、¹¹⁹、¹²⁰、¹²¹、¹²²、¹²³、¹²⁴、¹²⁵、¹²⁶、¹²⁷、¹²⁸、¹²⁹、¹³⁰、¹³¹、¹³²、¹³³、¹³⁴、¹³⁵、¹³⁶、¹³⁷、¹³⁸、¹³⁹、¹⁴⁰、¹⁴¹、¹⁴²、¹⁴³、¹⁴⁴、¹⁴⁵、¹⁴⁶、¹⁴⁷、¹⁴⁸、¹⁴⁹、¹⁵⁰、¹⁵¹、¹⁵²、¹⁵³、¹⁵⁴、¹⁵⁵、¹⁵⁶、¹⁵⁷、¹⁵⁸、¹⁵⁹、¹⁶⁰、¹⁶¹、¹⁶²、¹⁶³、¹⁶⁴、¹⁶⁵、¹⁶⁶、¹⁶⁷、¹⁶⁸、¹⁶⁹、¹⁷⁰、¹⁷¹、¹⁷²、¹⁷³、¹⁷⁴、¹⁷⁵、¹⁷⁶、¹⁷⁷、¹⁷⁸、¹⁷⁹、¹⁸⁰、¹⁸¹、¹⁸²、¹⁸³、¹⁸⁴、¹⁸⁵、¹⁸⁶、¹⁸⁷、¹⁸⁸、¹⁸⁹、¹⁹⁰、¹⁹¹、¹⁹²、¹⁹³、¹⁹⁴、¹⁹⁵、¹⁹⁶、¹⁹⁷、¹⁹⁸、¹⁹⁹、²⁰⁰、²⁰¹、²⁰²、²⁰³、²⁰⁴、²⁰⁵、²⁰⁶、²⁰⁷、²⁰⁸、²⁰⁹、²¹⁰、²¹¹、²¹²、²¹³、²¹⁴、²¹⁵、²¹⁶、²¹⁷、²¹⁸、²¹⁹、²²⁰、²²¹、²²²、²²³、²²⁴、²²⁵、²²⁶、²²⁷、²²⁸、²²⁹、²³⁰、²³¹、²³²、²³³、²³⁴、²³⁵、²³⁶、²³⁷、²³⁸、²³⁹、²⁴⁰、²⁴¹、²⁴²、²⁴³、²⁴⁴、²⁴⁵、²⁴⁶、²⁴⁷、²⁴⁸、²⁴⁹、²⁵⁰、²⁵¹、²⁵²、²⁵³、²⁵⁴、²⁵⁵、²⁵⁶、²⁵⁷、²⁵⁸、²⁵⁹、²⁶⁰、²⁶¹、²⁶²、²⁶³、²⁶⁴、²⁶⁵、²⁶⁶、²⁶⁷、²⁶⁸、²⁶⁹、²⁷⁰、²⁷¹、²⁷²、²⁷³、²⁷⁴、²⁷⁵、²⁷⁶、²⁷⁷、²⁷⁸、²⁷⁹、²⁸⁰、²⁸¹、²⁸²、²⁸³、²⁸⁴、²⁸⁵、²⁸⁶、²⁸⁷、²⁸⁸、²⁸⁹、²⁹⁰、²⁹¹、²⁹²、²⁹³、²⁹⁴、²⁹⁵、²⁹⁶、²⁹⁷、²⁹⁸、²⁹⁹、³⁰⁰、³⁰¹、³⁰²、³⁰³、³⁰⁴、³⁰⁵、³⁰⁶、³⁰⁷、³⁰⁸、³⁰⁹、³¹⁰、³¹¹、³¹²、³¹³、³¹⁴、³¹⁵、³¹⁶、³¹⁷、³¹⁸、³¹⁹、³²⁰、³²¹、³²²、³²³、³²⁴、³²⁵、³²⁶、³²⁷、³²⁸、³²⁹、³³⁰、³³¹、³³²、³³³、³³⁴、³³⁵、³³⁶、³³⁷、³³⁸、³³⁹、³⁴⁰、³⁴¹、³⁴²、³⁴³、³⁴⁴、³⁴⁵、³⁴⁶、³⁴⁷、³⁴⁸、³⁴⁹、³⁵⁰、³⁵¹、³⁵²、³⁵³、³⁵⁴、³⁵⁵、³⁵⁶、³⁵⁷、³⁵⁸、³⁵⁹、³⁶⁰、³⁶¹、³⁶²、³⁶³、³⁶⁴、³⁶⁵、³⁶⁶、³⁶⁷、³⁶⁸、³⁶⁹、³⁷⁰、³⁷¹、³⁷²、³⁷³、³⁷⁴、³⁷⁵、³⁷⁶、³⁷⁷、³⁷⁸、³⁷⁹、³⁸⁰、³⁸¹、³⁸²、³⁸³、³⁸⁴、³⁸⁵、³⁸⁶、³⁸⁷、³⁸⁸、³⁸⁹、³⁹⁰、³⁹¹、³⁹²、³⁹³、³⁹⁴、³⁹⁵、³⁹⁶、³⁹⁷、³⁹⁸、³⁹⁹、⁴⁰⁰、⁴⁰¹、⁴⁰²、⁴⁰³、⁴⁰⁴、⁴⁰⁵、⁴⁰⁶、⁴⁰⁷、⁴⁰⁸、⁴⁰⁹、⁴¹⁰、⁴¹¹、⁴¹²、⁴¹³、⁴¹⁴、⁴¹⁵、⁴¹⁶、⁴¹⁷、⁴¹⁸、⁴¹⁹、⁴²⁰、⁴²¹、⁴²²、⁴²³、⁴²⁴、⁴²⁵、⁴²⁶、⁴²⁷、⁴²⁸、⁴²⁹、⁴³⁰、⁴³¹、⁴³²、⁴³³、⁴³⁴、⁴³⁵、⁴³⁶、⁴³⁷、⁴³⁸、⁴³⁹、⁴⁴⁰、⁴⁴¹、⁴⁴²、⁴⁴³、⁴⁴⁴、⁴⁴⁵、⁴⁴⁶、⁴⁴⁷、⁴⁴⁸、⁴⁴⁹、⁴⁵⁰、⁴⁵¹、⁴⁵²、⁴⁵³、⁴⁵⁴、⁴⁵⁵、⁴⁵⁶、⁴⁵⁷、⁴⁵⁸、⁴⁵⁹、⁴⁶⁰、⁴⁶¹、⁴⁶²、⁴⁶³、⁴⁶⁴、⁴⁶⁵、⁴⁶⁶、⁴⁶⁷、⁴⁶⁸、⁴⁶⁹、⁴⁷⁰、⁴⁷¹、⁴⁷²、⁴⁷³、⁴⁷⁴、⁴⁷⁵、⁴⁷⁶、⁴⁷⁷、⁴⁷⁸、⁴⁷⁹、⁴⁸⁰、⁴⁸¹、⁴⁸²、⁴⁸³、⁴⁸⁴、⁴⁸⁵、⁴⁸⁶、⁴⁸⁷、⁴⁸⁸、⁴⁸⁹、⁴⁹⁰、⁴⁹¹、⁴⁹²、⁴⁹³、⁴⁹⁴、⁴⁹⁵、⁴⁹⁶、⁴⁹⁷、⁴⁹⁸、⁴⁹⁹、⁵⁰⁰、⁵⁰¹、⁵⁰²、⁵⁰³、⁵⁰⁴、⁵⁰⁵、⁵⁰⁶、⁵⁰⁷、⁵⁰⁸、⁵⁰⁹、⁵¹⁰、⁵¹¹、⁵¹²、⁵¹³、⁵¹⁴、⁵¹⁵、⁵¹⁶、⁵¹⁷、⁵¹⁸、⁵¹⁹、⁵²⁰、⁵²¹、⁵²²、⁵²³、⁵²⁴、⁵²⁵、⁵²⁶、⁵²⁷、⁵²⁸、⁵²⁹、⁵³⁰、⁵³¹、⁵³²、⁵³³、⁵³⁴、⁵³⁵、⁵³⁶、⁵³⁷、⁵³⁸、⁵³⁹、⁵⁴⁰、⁵⁴¹、⁵⁴²、⁵⁴³、⁵⁴⁴、⁵⁴⁵、⁵⁴⁶、⁵⁴⁷、⁵⁴⁸、⁵⁴⁹、⁵⁵⁰、⁵⁵¹、⁵⁵²、⁵⁵³、⁵⁵⁴、⁵⁵⁵、⁵⁵⁶、⁵⁵⁷、⁵⁵⁸、⁵⁵⁹、⁵⁶⁰、⁵⁶¹、⁵⁶²、⁵⁶³、⁵⁶⁴、⁵⁶⁵、⁵⁶⁶、⁵⁶⁷、⁵⁶⁸、⁵⁶⁹、⁵⁷⁰、⁵⁷¹、⁵⁷²、⁵⁷³、⁵⁷⁴、⁵⁷⁵、⁵⁷⁶、⁵⁷⁷、⁵⁷⁸、⁵⁷⁹、⁵⁸⁰、⁵⁸¹、⁵⁸²、⁵⁸³、⁵⁸⁴、⁵⁸⁵、⁵⁸⁶、⁵⁸⁷、⁵⁸⁸、⁵⁸⁹、⁵⁹⁰、⁵⁹¹、⁵⁹²、⁵⁹³、⁵⁹⁴、⁵⁹⁵、⁵⁹⁶、⁵⁹⁷、⁵⁹⁸、⁵⁹⁹、⁶⁰⁰、⁶⁰¹、⁶⁰²、⁶⁰³、⁶⁰⁴、⁶⁰⁵、⁶⁰⁶、⁶⁰⁷、⁶⁰⁸、⁶⁰⁹、⁶¹⁰、⁶¹¹、⁶¹²、⁶¹³、⁶¹⁴、⁶¹⁵、⁶¹⁶、⁶¹⁷、⁶¹⁸、⁶¹⁹、⁶²⁰、⁶²¹、⁶²²、⁶²³、⁶²⁴、⁶²⁵、⁶²⁶、⁶²⁷、⁶²⁸、⁶²⁹、⁶³⁰、⁶³¹、⁶³²、⁶³³、⁶³⁴、⁶³⁵、⁶³⁶、⁶³⁷、⁶³⁸、⁶³⁹、⁶⁴⁰、⁶⁴¹、⁶⁴²、⁶⁴³、⁶⁴⁴、⁶⁴⁵、⁶⁴⁶、⁶⁴⁷、⁶⁴⁸、⁶⁴⁹、⁶⁵⁰、⁶⁵¹、⁶⁵²、⁶⁵³、⁶⁵⁴、⁶⁵⁵、⁶⁵⁶、⁶⁵⁷、⁶⁵⁸、⁶⁵⁹、⁶⁶⁰、⁶⁶¹、⁶⁶²、⁶⁶³、⁶⁶⁴、⁶⁶⁵、⁶⁶⁶、⁶⁶⁷、⁶⁶⁸、⁶⁶⁹、⁶⁷⁰、⁶⁷¹、⁶⁷²、⁶⁷³、⁶⁷⁴、⁶⁷⁵、⁶⁷⁶、⁶⁷⁷、⁶⁷⁸、⁶⁷⁹、⁶⁸⁰、⁶⁸¹、⁶⁸²、⁶⁸³、⁶⁸⁴、⁶⁸⁵、⁶⁸⁶、⁶⁸⁷、⁶⁸⁸、⁶⁸⁹、⁶⁹⁰、⁶⁹¹、⁶⁹²、⁶⁹³、⁶⁹⁴、⁶⁹⁵、⁶⁹⁶、⁶⁹⁷、⁶⁹⁸、⁶⁹⁹、⁷⁰⁰、⁷⁰¹、⁷⁰²、⁷⁰³、⁷⁰⁴、⁷⁰⁵、⁷⁰⁶、⁷⁰⁷、⁷⁰⁸、⁷⁰⁹、⁷¹⁰、⁷¹¹、⁷¹²、⁷¹³、⁷¹⁴、⁷¹⁵、⁷¹⁶、⁷¹⁷、⁷¹⁸、⁷¹⁹、⁷²⁰、⁷²¹、⁷²²、⁷²³、⁷²⁴、⁷²⁵、⁷²⁶、⁷²⁷、⁷²⁸、⁷²⁹、⁷³⁰、⁷³¹、⁷³²、⁷³³、⁷³⁴、⁷³⁵、⁷³⁶、⁷³⁷、⁷³⁸、⁷³⁹、⁷⁴⁰、⁷⁴¹、⁷⁴²、⁷⁴³、⁷⁴⁴、⁷⁴⁵、⁷⁴⁶、⁷⁴⁷、⁷⁴⁸、⁷⁴⁹、⁷⁵⁰、⁷⁵¹、⁷⁵²、⁷⁵³、⁷⁵⁴、⁷⁵⁵、⁷⁵⁶、⁷⁵⁷、⁷⁵⁸、⁷⁵⁹、⁷⁶⁰、⁷⁶¹、⁷⁶²、⁷⁶³、⁷⁶⁴、⁷⁶⁵、⁷⁶⁶、⁷⁶⁷、⁷⁶⁸、⁷⁶⁹、⁷⁷⁰、⁷⁷¹、⁷⁷²、⁷⁷³、⁷⁷⁴、⁷⁷⁵、⁷⁷⁶、⁷⁷⁷、⁷⁷⁸、⁷⁷⁹、⁷⁸⁰、⁷⁸¹、⁷⁸²、⁷⁸³、⁷⁸⁴、⁷⁸⁵、⁷⁸⁶、⁷⁸⁷、⁷⁸⁸、⁷⁸⁹、⁷⁹⁰、⁷⁹¹、⁷⁹²、⁷⁹³、⁷⁹⁴、⁷⁹⁵、⁷⁹⁶、⁷⁹⁷、⁷⁹⁸、⁷⁹⁹、⁸⁰⁰、⁸⁰¹、⁸⁰²、⁸⁰³、⁸⁰⁴、⁸⁰⁵、⁸⁰⁶、⁸⁰⁷、⁸⁰⁸、⁸⁰⁹、⁸¹⁰、⁸¹¹、⁸¹²、⁸¹³、⁸¹⁴、⁸¹⁵、⁸¹⁶、⁸¹⁷、⁸¹⁸、⁸¹⁹、⁸²⁰、⁸²¹、⁸²²、⁸²³、⁸²⁴、⁸²⁵、⁸²⁶、⁸²⁷、⁸²⁸、⁸²⁹、⁸³⁰、⁸³¹、⁸³²、⁸³³、⁸³⁴、⁸³⁵、⁸³⁶、⁸³⁷、⁸³⁸、⁸³⁹、⁸⁴⁰、⁸⁴¹、⁸⁴²、⁸⁴³、⁸⁴⁴、⁸⁴⁵、⁸⁴⁶、⁸⁴⁷、⁸⁴⁸、⁸⁴⁹、⁸⁵⁰、⁸⁵¹、⁸⁵²、⁸⁵³、⁸⁵⁴、⁸⁵⁵、⁸⁵⁶、⁸⁵⁷、⁸⁵⁸、⁸⁵⁹、⁸⁶⁰、⁸⁶¹、⁸⁶²、⁸⁶³、⁸⁶⁴、⁸⁶⁵、⁸⁶⁶、⁸⁶⁷、⁸⁶⁸、⁸⁶⁹、⁸⁷⁰、⁸⁷¹、⁸⁷²、⁸⁷³、⁸⁷⁴、⁸⁷⁵、⁸⁷⁶、⁸⁷⁷、⁸⁷⁸、⁸⁷⁹、⁸⁸⁰、⁸⁸¹、⁸⁸²、⁸⁸³、⁸⁸⁴、⁸⁸⁵、⁸⁸⁶、⁸⁸⁷、⁸⁸⁸、⁸⁸⁹、⁸⁹⁰、⁸⁹¹、⁸⁹²、⁸⁹³、⁸⁹⁴、⁸⁹⁵、⁸⁹⁶、⁸⁹⁷、⁸⁹⁸、⁸⁹⁹、⁹⁰⁰、⁹⁰¹、⁹⁰²、⁹⁰³、⁹⁰⁴、⁹⁰⁵、⁹⁰⁶、⁹⁰⁷、⁹⁰⁸、⁹⁰⁹、⁹¹⁰、⁹¹¹、⁹¹²、⁹¹³、⁹¹⁴、⁹¹⁵、⁹¹⁶、⁹¹⁷、⁹¹⁸、⁹¹⁹、⁹²⁰、⁹²¹、⁹²²、⁹²³、⁹²⁴、⁹²⁵、⁹²⁶、⁹²⁷、⁹²⁸、⁹²⁹、⁹³⁰、⁹³¹、⁹³²、⁹³³、⁹³⁴、⁹³⁵、⁹³⁶、⁹³⁷、⁹³⁸、⁹³⁹、⁹⁴⁰、⁹⁴¹、⁹⁴²、⁹⁴³、⁹⁴⁴、⁹⁴⁵、⁹⁴⁶、⁹⁴⁷、⁹⁴⁸、⁹⁴⁹、⁹⁵⁰、⁹⁵¹、⁹⁵²、⁹⁵³、⁹⁵⁴、⁹⁵⁵、⁹⁵⁶、⁹⁵⁷、⁹⁵⁸、⁹⁵⁹、⁹⁶⁰、⁹⁶¹、⁹⁶²、⁹⁶³、⁹⁶⁴、⁹⁶⁵、⁹⁶⁶、⁹⁶⁷、⁹⁶⁸、⁹⁶⁹、⁹⁷⁰、⁹⁷¹、⁹⁷²、⁹⁷³、⁹⁷⁴、⁹⁷⁵、⁹⁷⁶、⁹⁷⁷、⁹⁷⁸、⁹⁷⁹、⁹⁸⁰、⁹⁸¹、⁹⁸²、⁹⁸³、⁹⁸⁴、⁹⁸⁵、⁹⁸⁶、⁹⁸⁷、⁹⁸⁸、⁹⁸⁹、⁹⁹⁰、⁹⁹¹、⁹⁹²、⁹⁹³、⁹⁹⁴、⁹⁹⁵、⁹⁹⁶、⁹⁹⁷、⁹⁹⁸、⁹⁹⁹、¹⁰⁰⁰、¹⁰⁰¹、¹⁰⁰²、¹⁰⁰³、¹⁰⁰⁴、¹⁰⁰⁵、¹⁰⁰⁶、¹⁰⁰⁷、¹⁰⁰⁸、¹⁰⁰⁹、¹⁰¹⁰、¹⁰¹¹、¹⁰¹²、¹⁰¹³、¹⁰¹⁴、¹⁰¹⁵、¹⁰¹⁶、¹⁰¹⁷、¹⁰¹⁸、¹⁰¹⁹、¹⁰²⁰、¹⁰²¹、¹⁰²²、¹⁰²³、¹⁰²⁴、¹⁰²⁵、¹⁰²⁶、¹⁰²⁷、¹⁰²⁸、¹⁰²⁹、¹⁰³⁰、¹⁰³¹、¹⁰³²、¹⁰³³、¹⁰³⁴、¹⁰³⁵、¹⁰³⁶、¹⁰³⁷、¹⁰³⁸、¹⁰³⁹、¹⁰⁴⁰、¹⁰⁴¹、¹⁰⁴²、¹⁰⁴³、¹⁰⁴⁴、¹⁰⁴⁵、¹⁰⁴⁶、¹⁰⁴⁷、¹⁰⁴⁸、¹⁰⁴⁹、¹⁰⁵⁰、¹⁰⁵¹、¹⁰⁵²、¹⁰⁵³、¹⁰⁵⁴、¹⁰⁵⁵、¹⁰⁵⁶、¹⁰⁵⁷、¹⁰⁵⁸、¹⁰⁵⁹、¹⁰⁶⁰、¹⁰⁶¹、¹⁰⁶²、¹⁰⁶³、¹⁰⁶⁴、¹⁰⁶⁵、¹⁰⁶⁶、¹⁰⁶⁷、¹⁰⁶⁸、¹⁰⁶⁹、¹⁰⁷⁰、¹⁰⁷¹、¹⁰⁷²、¹⁰⁷³、¹⁰⁷⁴、¹⁰⁷⁵、¹⁰⁷⁶、¹⁰⁷⁷、¹⁰⁷⁸、¹⁰⁷⁹、¹⁰⁸⁰、¹⁰⁸¹、¹⁰⁸²、¹⁰⁸³、¹⁰⁸⁴、¹⁰⁸⁵、¹⁰⁸⁶、¹⁰⁸⁷、¹⁰⁸⁸、¹⁰⁸⁹、¹⁰⁹⁰、¹⁰⁹¹、¹⁰⁹²、¹⁰⁹³、¹⁰⁹⁴、¹⁰⁹⁵、¹⁰⁹⁶、¹⁰⁹⁷、¹⁰⁹⁸、¹⁰⁹⁹、¹¹⁰⁰、¹¹⁰¹、¹¹⁰²、¹¹⁰³、¹¹⁰⁴、¹¹⁰⁵、¹¹⁰⁶、¹¹⁰⁷、¹¹⁰⁸、¹¹⁰⁹、¹¹¹⁰、¹¹¹¹、¹¹¹²、¹¹¹³、¹¹¹⁴、¹¹¹⁵、¹¹¹⁶、¹¹¹⁷、¹¹¹⁸、¹¹¹⁹、¹¹²⁰、¹¹²¹、¹¹²²、¹¹²³、¹¹²⁴、¹¹²⁵、¹¹²⁶、¹¹²⁷、¹¹²⁸、¹¹²⁹、¹¹³⁰、¹¹³¹、¹¹³²、¹¹³³、¹¹³⁴、¹¹³⁵、¹¹³⁶、¹¹³⁷、¹¹³⁸、¹¹³⁹、¹¹⁴⁰、¹¹⁴¹、¹¹⁴²、¹¹⁴³、¹¹⁴⁴、¹¹⁴⁵、¹¹⁴⁶、¹¹⁴⁷、¹¹⁴⁸、¹¹⁴⁹、¹¹⁵⁰、¹¹⁵¹、¹¹⁵²、¹¹⁵³、¹¹⁵⁴、¹¹⁵⁵、¹¹⁵⁶、¹¹⁵⁷、¹¹⁵⁸、¹¹⁵⁹、¹¹⁶⁰、¹¹⁶¹、¹¹⁶²、¹¹⁶³、¹¹⁶⁴、¹¹⁶⁵、¹¹⁶⁶、¹¹⁶⁷、¹¹⁶⁸、¹¹⁶⁹、¹¹⁷⁰、¹¹⁷¹、¹¹⁷²、¹¹⁷³、¹¹⁷⁴、¹¹⁷⁵、¹¹⁷⁶、¹¹⁷⁷、¹¹⁷⁸、¹¹⁷⁹、¹¹⁸⁰、¹¹⁸¹、¹¹⁸²、¹¹⁸³、¹¹⁸⁴、¹¹⁸⁵、¹¹⁸⁶、¹¹⁸⁷、¹¹⁸⁸、¹¹⁸⁹、¹¹⁹⁰、¹¹⁹¹、¹¹⁹²、¹¹⁹³、¹¹⁹⁴、¹¹⁹⁵、¹¹⁹⁶、¹¹⁹⁷、¹¹⁹⁸、¹¹⁹⁹、¹²⁰⁰、¹²⁰¹、¹²⁰²、¹²⁰³、¹²⁰⁴

木に記された釋・神石連出土工具署木簡をめぐって

文字の形と語の識別——「參」の二つの字形
書評 平川南著「古代地方木簡の研究」
新刊紹介 木簡学会編「日本古代木簡集成」

續

五五〇〇円

33

科六武雄桑竹武
○田江原内組
○和宏祐子亮人
円哉之

科六武雄桑竹武
○田江原内組
○和宏祐子亮人
円哉之

愛知・刈安賀遺跡

かりやすか

された。木筒はこのうち九六A区・九六D区・九六G区・九六K区から出土した。

九六A区・九六G区・九六K区では、やや蛇行しながら流れる砂

- | | |
|---------------|--|
| 所在地 | 愛知県一宮市大和町刈安賀 |
| 調査期間 | 一九九六年(平成8)四月—一九九七年(平成9)一〇月 |
| 発掘機関 | 財愛知県埋蔵文化財センター |
| 調査担当者 | 黒田哲生・大崎正敬・石黒立人・浅井厚視 |
| 遺跡の種類 | 城郭跡・集落跡 |
| 遺跡の年代 | 弥生時代・江戸時代 |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 刈安賀遺跡は、濃尾平野を流れる日光川や大江川などによく成された自然堤防及び後背湿地上に立地する。戦国時代から |

元川や大江川などによって形成され、戦国時代から織豊期にかけては、付近に浅井新八により築かれた刈安賀城が所在した。層で一九世紀の陶器類が出土するが、一方で六世紀前半までの遺物も少なからず認められることで、七世紀まで週らせて考えてもよいかもしれません。

九六G区旧河川NRO

発掘調査は東海北陸自動車道及び県道岐阜福澤線

九九六年度から二年間行な

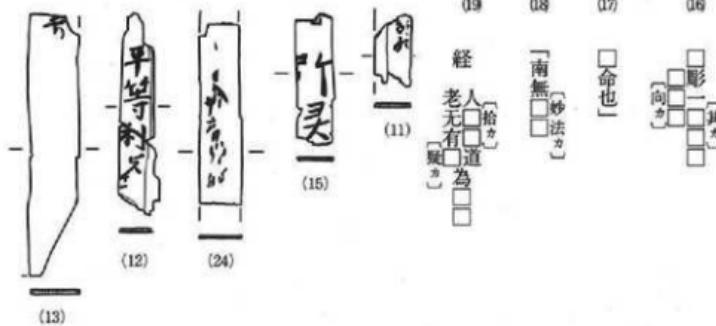
わざ一九九六年度には九

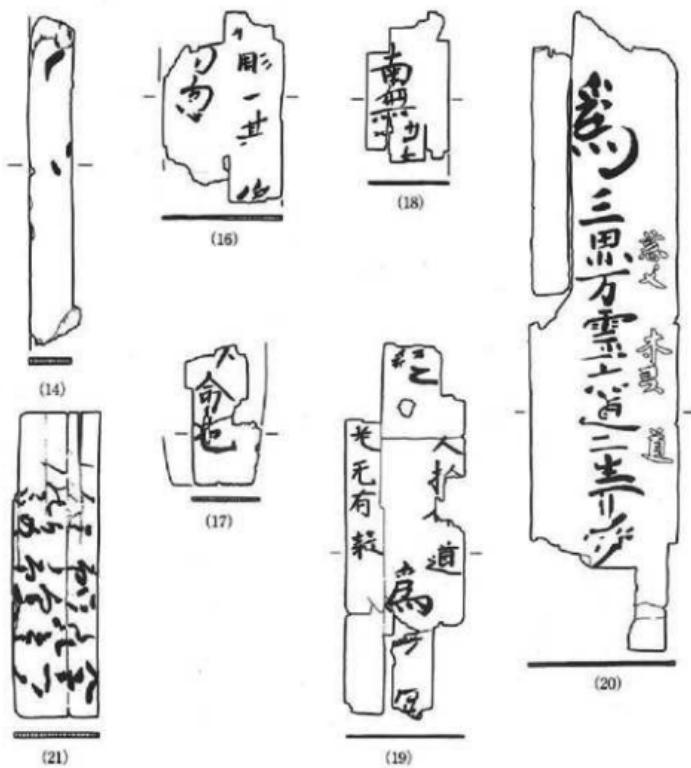
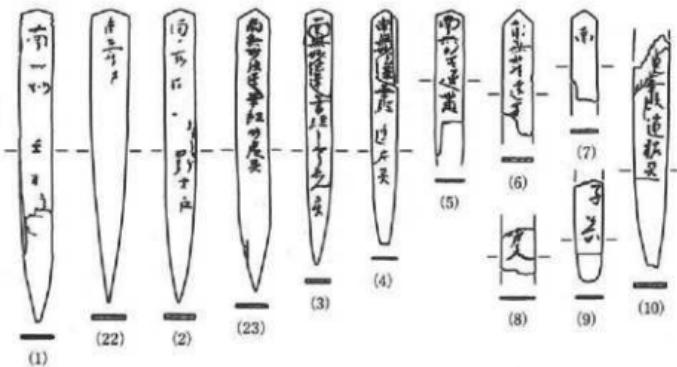
(2) 南無妙法蓮華經

220 X 24 X 3 (06)

2008 X 22 X 3 (06)

(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)
□ 罪	□ □	□	□	□ □	□ □	□	□	「南」	「南無妙法蓮華經」	「南無妙法蓮華經」	「南無妙法蓮華經」	「南無妙法蓮華經」





頭部は圭頭状にするものと、五輪塔状に側面に刻みを入れるものと
二者が認められる。下部は体部下半ぐらいうから尖らせている。形状
と文言からみて位牌である可能性も考えられよう。

卒塔婆二類(11-29, 29)は一類よりも大型と判断されるものである。全長は測定できないものの、幅が10cmを超えるような大型

のものもある。また、下部の形状は角を斜めに切断した裁頭三角形となるものがある。ほとんどが断簡であるためこれらの中には十

分に判読できないものもあるが、一連の卒塔婆の一部と判断した。

区NRO一から出土している。

の文字は墨が流れてしまつてゐる。このことから圖は長い間屋外にさらされていたものと考えられる。

四は白木の折敷底板に木目に直交する方向に記されたものである。

なお、木簡の訳説に際しては名古屋市蓬左文庫の下村信博氏の「教示を得た」

9 関係文献

側愛好思想文化研究センター「荘安賀遺稿」(二〇〇一年)

(鉛木正貴)

愛知・下津北山遺跡

おりづきたやま



(名古屋北山)

調査面積は計四一〇〇m²である。

- 1 所在地 愛知県稻沢市下津北山町・下津南山町・下津小井戸町

- 2 調査期間 一九九六年(平成8年)五月～九月、一九九七年一二月～一九九八年三月

- 3 発掘機関 県立愛知県埋蔵文化財センター

- 4 調査担当者 高橋信明・大崎正敬・加藤博紀・早野浩一

- 5 遺跡の種類 集落跡

- 6 遺跡の年代 古墳時代～近世

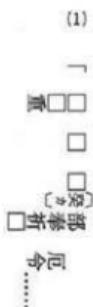
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

下津北山遺跡は、木曾川の分流である青木川によって形成された微高地とそれらに開まれた背渓地に立地する。遺跡の約一・五km西には尾張國府跡が所在する。発掘調査は、尾張西部都市拠点地区開発に伴い、一年次にわたり実施した。

検出遺構は、中世初頭(一二世紀後半)、中世前期(一二一～四世紀)、中世後期(一四一～五世紀)の三時期に区分される。中世初頭には、南北五〇mに及ぶ不定型な方形区画と、区画内に配された掘立柱建物を中心とした遺構群が展開する。

木簡は、一九九七年度の調査において、方形区画南溝から出土した。南溝には、「僧」「仏」「上」などと墨書きした山茶碗三〇点以上、「大」と刻書した山茶碗一点、綠釉円塔一点を含む大量の遺物も投棄されていた。また、方形区画内の廃棄土坑には、「僧」「見」「上」などと墨書きした四〇点以上の山茶碗、陶器三点(風字硯一点・方形容一点)が投棄されていた。これらに加えて、方形区画とその周辺には、猿投當清潔器三筋壺・水注・片口小瓶・子持器台、青銅製提子の環座金具など、宗教的な色彩が濃厚な遺物が多数分布することから、中世初頭には寺院が存在していたことが推測される。

- 8 木簡の篆文・内容





(配置は推定)

木簡は、接合しない一片と墨痕が確認できない一片があるが、元來は一点の木簡だったものと推定した。全体の形状は不明であるが、文字が記された二片はそれぞれ木簡の右端、左端に相当すると考えられる。材質はヒノキの板目材で、木目方向を横位にして文字を記す。墨痕は總じて不明瞭で、全体の文意は不明であるが、中世の寺院とする前述の推定と関わる語句が散見する。

なお、仮説にあたっては、浦沢市教育委員会の愛甲昇寛、名古屋大学の稻葉伸道、名古屋短期大学の上村喜久子、岐阜聖徳学園大学の清田善樹、日本福祉大学の福岡猛志、中京大学の村岡幹夫の各氏よりご教示を得た。

9 関係文献

【助愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター】「下津北山遺跡」(2000年)

(早野浩二)

愛知・清洲城下町遺跡



(名古屋北部)

- 1 所在地 愛知県清須市（旧西春日井郡清洲町）大字清洲字古城ほか
- 2 調査期間 一 一九八六年（昭61）八月～一月、二 一九九二年（平4）一月～一九九三年一月、三 一九九三年七月～九月、四 一九九六年二月～一九九七年三月、五 一九九七年一月～一九九八年三月
- 3 発掘機関 勝愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 一 梅本博志・小澤一弘・細野正俊、二・三 大竹正吾・齋江吉弘、
四 増澤徹・宮原健司・原田幹、五 黒田哲生・石黒立人・浅井厚視
- 5 遺跡の種類 城郭・都
市跡、集落跡
- 6 遺跡の年代 室町時代
後期～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川によって形成された自然堤防及び後背湿地に立地する。発掘調査は一九八一年から継続して行なわれ、調査面積は約九万m²に及んでいる。今回報告する調査区のうち、六一B区・九二C区・九六区・九七C区は、五条川河川改修に伴う事前調査で、それぞれ七〇七m²・一一〇m²・二〇〇m²・六〇〇m²が発掘調査された。また、九三D区は県道清洲新川線街路新設改良事業に伴う事前調査で、五〇〇m²が発掘調査された。

まず、六一B区は五条川左岸の遺跡南部に所在する。清須城下町

期前期（一五世紀末から一六世紀中頃まで）の武家屋敷と、城下町期後期（一五六六年頃から一六一〇年まで）の可屋、及び江戸時代の清洲宿場町に関連する遺構などが確認されている。木簡は一九世紀前期に位置づけられる巨大廐棄土坑SK六六九一から二点出土した。

九二C区・九三D区は五条川左岸の遺跡中央部に所在する。九一

C区では、戦国時代を中心とする清須城下町段階の五条川旧河道N

R四〇〇一と、江戸時代の清洲宿場町に関連する遺構などが確認されている。城下町期前期の旧河道N R四〇〇一からは大量の陶磁器・土器類とともに木簡が一点出土した。九三D区では、一边が約

一〇〇mにも及ぶ居館推定地を包む幅約一〇mの堀SD〇一が検出され、この堀から城下町期前期の多量の土器類とともに木簡が四

点出土した。

一方、九六区・九七C区は五条川右岸にあり、後期清須城本丸の東縁部に相当する地点である。調査区北端部に城下町期後期の張り出し部があり、その南北両側に下部に土台木を有する石垣が構築されていた。城下町期前期では五条川旧河道や溝が確認されている。

木簡は、石垣が構築される以前の城下町期前期の五条川旧河道の堆積物から、九六区のトレンチで三点、九七C区で二点出土した。後者は江戸時代に時期が下る可能性もあるが、遺物の大半は城下町期前期に属するものであり、木簡も同時期であると考えてよい。

なお、同じ五条川右岸を調査した九四A区において、北側の石垣遺構の土台木に墨痕が残存するものが一点出土したが、これはほぞ穴の目印につけた墨痕と考えられるので、木簡としての状況は立てなかつた。

8 木簡の积文・内容

一 六一B区

(1) 「水」

幅130×高104×厚2
061

(2) 「水」

幅130×高115×厚2
061

(1)(2)はともに柄杓の底板外面に墨書きされたもの。(1)は曲物柄柄杓、(2)は結物柄柄杓である。

二九二〇区

- (1) 「^(キヤカラバ)釋迦牟尼佛南無□世仏已淨土有性無性成仏道為□道禪門也」
 (2) 「^(ヒン)南無阿弥陀仏」

頭部が五輪塔形に作られた卒塔婆である。

三一九三〇区

(1) □
 (2) □
 (3) 「おしやうけんざま」
 (4) ム無名西二親□ 七月十八日」

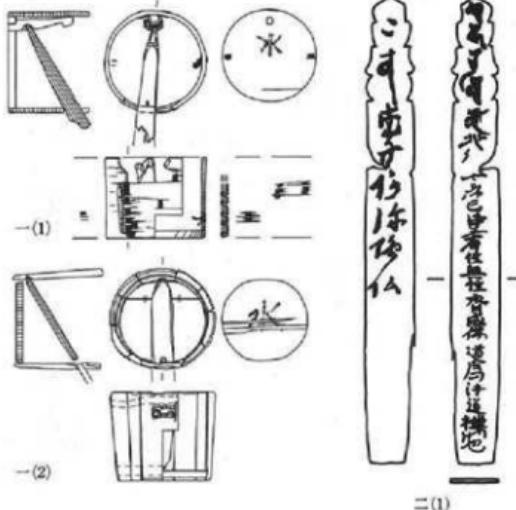
「於 将監

115×27×3
 (58)×(33)×1 061

(21.8)×20×2 061

(1)は折敷底板に墨書したもの、(2)(4)は卒塔婆、(3)は「於 将監
 公家山科言連が清須に滞在した間に輪道の弟子になつた人物で、然
 田大宮司紀伊守であつた。その居所が居館の近辺に所在していた」
 とも考へられよう。

(4)の七文字目は、「咎」または「共」の可能性がある。



四 九六区

(1) □南無妙×

頭部を五輪塔状に形作られた卒塔婆または袖經である。

五 九七C区

(1) □□□□□

(2) □□□□□

(170)×32×1
196

(237)×(89)×1
190

(45)×32×1
191

9 関係文献
(財)愛知県埋蔵文化財センター「清洲城下町遺跡」IV、V、VI、VII
(一九九四年、一九九五年、一九九六年、一九九七年)
愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター「清洲
城下町遺跡」Ⅳ(一〇〇一年)

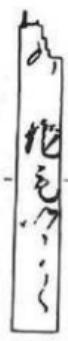
(鈴木正貴)



三(2)



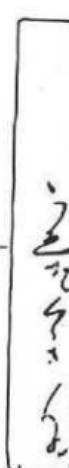
三(3)



五(1)



三(4)



五(2)



四(1)

山梨・上窪遺跡



(甲) 市

- | | | |
|---|---------------|------------------------|
| 1 | 所在地 | 山梨県中巨摩郡玉穂町下河東字天神木 |
| 2 | 調査期間 | 一〇〇三年度調査 一〇〇四年(平成16)二月 |
| 3 | 発掘機関 | 玉穂町教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 今村直樹 |
| 5 | 遺跡の種類 | 居館跡 |
| 6 | 遺跡の年代 | 一三世紀～一五世紀 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

上窪遺跡は甲府盆地中央、釜無川と笛吹川の合流地点にほど近い釜無川扇状地扇端部に位置している。区画整理事業に伴い一〇〇一年度から発掘調査を開始し、平安時代後半から室町時代までの遺構を確認している。今回報告する筆塔婆は、二〇〇三年度の試掘調査時に出土したものである。

同調査では、設定したトレーナーと平行して溝跡が確認された。その後の周辺調

査でこの溝跡は方形にめぐる区画溝の北面の一部であることが明らかとなった。区画の規模は東西約三三m、南北は推定四五mの長方形を呈し、ほぼ正方位に軸を合わせている。区画内では試掘調査が実施されているが、遺構は確認されておらず詳細は明らかでない。筆塔婆は、北面の溝のちょうど中央部分から、かわらけ・石製品・礫とともに一二点出土した。これらは重なった状態で一ヵ所から全てが出土した。周辺では、三點一組となるような状態で、かわらけが五ヵ所から出土している。かわらけは全て口唇部を欠き、周囲には煤の付着した礫が散在していた。これらのかわらけは一三世紀のものと思われる。

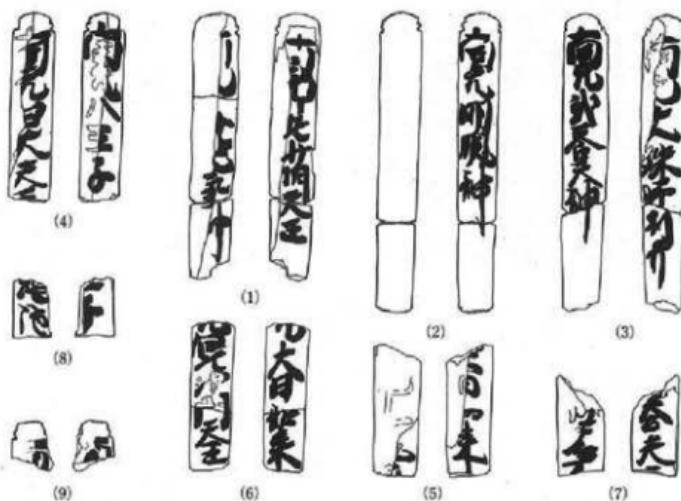
筆塔婆が出土した区画溝の北にも、同様の区画施設が隣接している。こちらは一辺が六五七〇mの正方形で南北軸が東へ若干振れ、区画内には掲立柱建物が配されている。時期は一四世紀後半から一五世紀にかけてと新しく、筆塔婆出土溝とは時期を異にする。両者の関係など、詳細は今後の調査整理作業を待つこととした。

8 木簡の积文・内容

(1) 「南无毘沙門天王

- 南无^(毒蛇カ) 気神

- (2) 「南无明現神」
〔南无カ〕
- (3) 「南无文殊師利井」
〔南无カ〕
- (4) 「南无八王子」
〔王カ〕
- (5) 「大日如來」
〔大日如來カ〕
- (6) 「蛇毒氣カ」
〔蛇毒氣カ〕
- (7) 「答天」
〔答天カ〕
- (8) 「陀子」
〔陀子カ〕
- (9)
- (127) × 18 × 3 061*
- (128) × 18 × 2 061*
- (129) × 6 × 2 061*
- (130) × 18 × 1 061*
- (131) × 17 × 2 061*



(9)

「南×」

「南カ」

□×

00

「南无カ」

□□

×
□□

01

□

02

□□

(16)×(5)×1
1601

(24)×15×3
691

(42)×15×3
691

(24)×15×2
661

190
160
160

82

(1)～(4)は頭部を圭頭状にし、(1)(2)(4)は左右二カ所ずつ、(3)は一カ所にそれぞれ切り込みを入れる。下端に向けて徐々に細くなっているが、下端が完存するものがないため、端部の原形は不詳である。

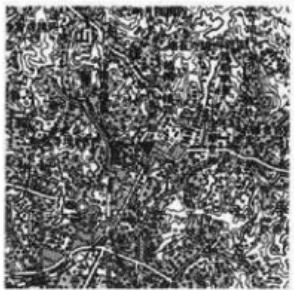
墨書の残りは良好なものが多く、「南无」に続けて毘沙門天(1)、大日如来(5)(6)の仏名、蛇毒(毒蛇)氣神(1)(5)、武答天神(3)(7)、八王子(4)などの中世牛頭天王信仰に関する神名が両面に記される。表裏の組み合わせは一様ではなく、表裏は任意である。(1)(2)も本来筆塔婆の一部であったとみられる。神仏名の筆塔婆への記載は、神仏習合の中世信仰世界を遺物で実証できる貴重な資料といえよう。

なお、木簡の釈説にあたっては、奈良文化財研究所史料調査室の方々の「教示を得た。」

(今村善樹)

神奈川・北条時房・顯時邸跡

はうじょうとうきふさ
あきときてい



(横須賀)

- 1 所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目
2 調査期間 一 一九八六年(昭61)五月～八月、二 一九八八年四月～七月、三 一九九六年(平8)四月～七月、四 一九九七年三月～六月
3 発掘機関 邸跡発掘調査会、四 鎌倉市教育委員会、三 北条時房・顯時
4 調査担当者 一 馬渕和雄、二 松尾宣方、三 宗基秀明、
四 素木秀雄

5 遺跡の種類 居館跡

6 遺跡の年代 古代～近
代

7 遺跡地は、北条時房・顯時
邸跡及び木簡出土遺構
の概要

遺跡地は、北条時房・顯時
邸跡と称され、主として
中世前期の遺構が検出され
ている。紹介する木簡もこ
の時期にあたると推測され

る。

頬時の屋敷については、金沢文庫所蔵『舞楽樂奈羅供私記』の奥書に「舞倉赤橋辺」と記載がある(『金沢文庫古文書』歴語篇二〇六四)。

「赤橋」とは鶴岡八幡宮の赤橋と考えられている。遺跡地の若宮大路を挟んだ東側は北条泰時・時頼邸と推測されるため、八幡宮の南、

若宮大路の西側一郭が時房・頬時邸に推定されている(貴達人「北條氏等址考」『金沢文庫研究紀要』八、一九七一年)。これに対し秋山哲雄氏は、時房は宝戒寺小町邸に住んでいたとし、頬時の屋敷についても資料が乏しく、遺跡名についても再検討の必要性を説いている

(秋山哲雄「御所と北条氏亭」舞倉市教育委員会『舞倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』一二(第三分冊)、一九九六年)。今回報告する四件の調査

は、いずれもこの地を対象とするものである。

一 の 調 査 区 は、北 条 時 房・時 頼 邸 の 南 端 に あ た る 地 点 で あ る。

南辺のトレンチでは、遺跡地の南を走る東西道路の側溝と考えられる溝が検出され、この溝より木簡が出土した。出土層位の年代は一

四世紀前半と報告されている。

二 の 調 査 区 は、若 宮 大 路 に 接 す る 遺 蹟 地 の や や 北 よ り の 地 点 で あ る。

この調査では、若宮大路の西側溝と考えられる南北溝が検出されている。木簡の出土状況・年代などの詳細は未報告のため不明であるが、後述する内容からみて舞倉時代のものである可能性が高いと思われる。

三の調査区は、若宮大路に面するやや南よりの地点である。古代

より近世・近代に至るまでの生活面が検出された。そのうち中世に属するものは第二面と第三面である。その主な遺構としては若宮大

路西側溝とそれに直交する東西道路、区画を分ける塀と独立柱建物がある。木簡は、第二面に属する若宮大路西側溝より出土した。

四の調査区は、遺跡地南東部にあたり、若宮大路に接する地点である。舞倉時代初期から一六世紀後半までの遺構が検出されている。主な遺構には、木組みの護岸がなされた若宮大路西側溝とそれに直交する溝、掘立柱建物などがある。木簡は若宮大路西側溝から出土した。

8 木 簡 の 釋 文・内 容

一 八 六 年 度 調 査

(1) 一 いたレカ
に□□ラし
けろれ

・ □□

105×38×7 011

判読できない文字が多く、全体の文意は不明である。表面最終行二文字目は「そ」の可能性もある。なお、表面には、手斧によると思われる加工痕がある。



二(3)



二(2)



二(1)



-(1)



四(1)



二(1)



三(1)



三(2)



四(2)



二 八八年度調査

(112)×(30)×1 081



(1) 「○○」
(2) 「○○」
・「○○」

231×(32)×1 081

(3) 「□」丈 あかき□入道

(251)×41×3 051

(1) (2) は判読不能である。(2)については表裏ともに文字ではなく、絵あるいは筆慣らしの可能性もある。(3)については石井進氏の考察がある。石井氏によると「赤木の入道」あるいは「あかき□入道」と考えられ、赤木氏とすれば「吾妻鏡」承応元年(一一三九)五月

「三日条にみえる赤木右衛門平忠光の一族の可能性があるとしている。「□」は側溝工事を御家人あるいは御内人に請け負わせる際の単位と推測されている(石井進「鎌倉から出土した最初の木簡」「日本歴史」四四九、一九八五年。同「中世の木簡」石井進著作)一〇、岩波書店、一〇〇五年)。

ともに判読不能である。(1)は折敷の底板である。筆慣らしの類であろうか。(2)は目を描いたもののようにもみえ、そうであれば呪符の可能性がある。

四 九七年度調査

232×17×15 061

(1) 「ナガララバフヌ 南無都率天上弥勒菩薩衆」十一「十七」
・「ナガララバフヌ 南無都率天上弥勒菩薩衆」十一「十七」

232×17×15 061

五輪塔形の卒塔婆である。上段の五文字の梵字(キヤ・カ・ラ・バ・ア)は東の発心門をあらわし、続く梵字は弥勒の種子(ニ)である。

9 関係文献

鎌倉市教育委員会「昭和六一年度発掘調査報告書」(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書三、一九八七年)

同「平成元年度発掘調査報告書」(鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書六、一九八九年)

北条時房・頼時邸跡発掘調査団「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目一七二番地点」(一九九七年)

鎌倉遺跡調査会「北条時房・頼時邸跡七」(鎌倉遺跡調査会調査報告二、一九九九年)

(鈴木弘太)

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡

(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」



(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

2004年出土の木簡



(1) 「□」

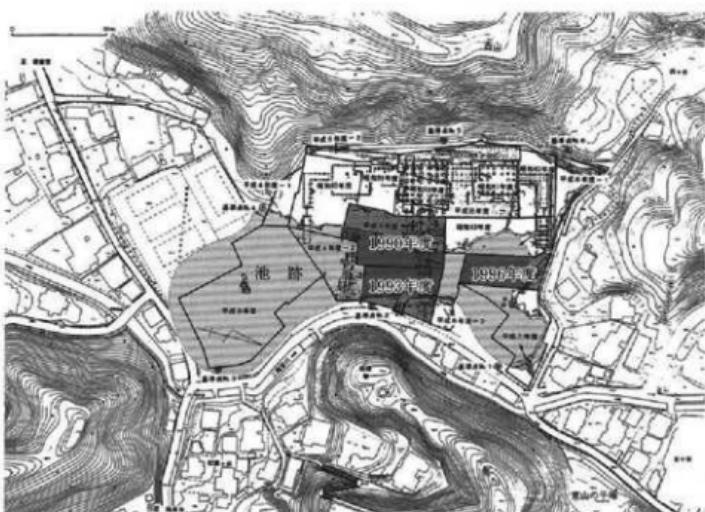


(2) 「□」

(109)×(42)×15 061
211×(30)×2 051

神奈川・永福寺跡

1	所在地	神奈川県鎌倉市二階堂
2	調査期間	一 一九九〇年(平2)八月一~二月、二 一九九三年七月一~二月、三 一九九六年七月一~一九九七年一月
3	発掘機関	鎌倉市教育委員会
4	調査担当者	福田 誠
5	遺跡の種類	寺院跡
6	遺跡の年代	一二世紀末~一四世紀
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	本遺跡地はJR鎌倉駅の北東約二kmのところに位置する。「二階堂」や「三堂」などの地名も残り、古くから永福寺跡と考えられていた。永福寺は「吾妻鏡」文治五年(一一八九)一二月九日条を初見とし、同年九月源頼朝による奥州



永福寺跡調査位置図

藤原氏追討時の戦死者供養がその建立目的とされる。また建立する際そのモデルとなつたのが、賴朝が平泉で実見した大長寿院の二階堂であつたとされる。

これまでの発掘調査によつて、永福寺の具体的な伽藍配置が明らかになつてきた。二階堂を中心とし、南側の阿弥陀堂と北側の薬師堂が東向きに並び建つ。特徴的なのがこの三堂の基壇として木製の基壇外装が用いられたことであり、寛元・宝治年間（一一四二～四九）に行なわれた大規模な修理により、石積みの壇正積基壇に造り替えられる。両脇堂からは庭園に向かい翼廊が伸び、中門を経て釣殿が設けられる。三堂の前面に穿たれた池には、尾根の先端部を削つて造り出した岬状の部分に、北奥の西ヶ谷より北翼廊を抜ける道水を引き込んでいた。

遺構の変遷について簡単に触れておくと、一二世紀末の創建後、

II期になると建物の解体修理など大規模な修理が行なわれ、前述したように基壇外装が木製から石積みへと変更される。弘安三年（一

二八〇）には火災が起つて、再建される（III期）。その際、規模・形状などは保たれるが、瓦の出土量が減り小型化する」とから、屋根が総瓦葺から檜皮葺へと変更されたと考えられる。延慶三年（一三一〇）に再び火災があり、再建される（IV期、一四世紀以降）が、複

木簡は、「(1)が二階堂前面から阿弥陀堂前面にかけての庭・池か

ら出土した。(2)(3)は二階堂正面の池中のII期遺構面（一二世紀中頃）から出土した。(3)は薬師堂前面の池中のIV期下層覆土中（一四世紀後半）から出土した。

8 木簡の収集・内容

一 一九九〇年度調査

(1) *〔北南天阿弥陀仏*

(230)×30×4 061

頂部の二カ所に圭頭状の切り込みを入れた板塔婆である。墨書きはわずかに残り、下半部は欠損している。

二 一九九三年度調査

(1) *□□□□*

(160)×21×2 019

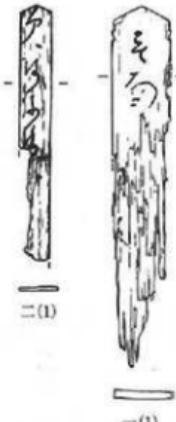
(2) *〔符跡〕〔鬼カ〕*

226×26×3 011

(3) *〔北南無大日如來〕*

384×24×2 051

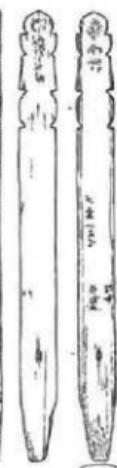
(1)は頭部を左右から切り込んで圭頭状にしてある。左下半の多くを欠損する。(2)は文字というよりも人面を表現したように見受けられ、呪符と考えられる。左上にわずかに残っているのは目と考えられ、また右中央下に「鬼」と書かれているように見える。中心部分に釘孔が貫通し、左下半部が欠損している。(3)は完形の板塔婆。



二(1)

二(2)

二(3)



三(1)

三(2)

三(3)

は説めるが、全体の内容までは判読できない。下端から約一四cmのところに釘孔が確認でき、何かに打ち付けて使用されたことが窺える。この形状の塔婆は本遺跡から他に一点出土しており（本誌第二六号）、また鶴岡八幡宮境内の調査においても、墨書はないものの一mを越える五輪塔を模した木製品が出土している（鶴岡八幡宮境内発掘調査団「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書（鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査）」、一九八五年）。中世における一般的な供養形態の一つであったと考えられよう。

9 関係文献

- 鎌倉市教育委員会「永福寺跡」（一九九二年）
- 同「永福寺跡」（一九九五年）
- 同「永福寺跡」（一九九八年）
- 同「永福寺跡—遺構編」（一〇〇一年）
- 同「永福寺跡—遺物・考察編」（一〇〇二年）

頂部を五輪塔状に削り出した大型の卒塔婆で、下端部は剝先状に尖らせている。表裏両面に墨書の痕跡が認められ、いくつかの文字

〔
（梵字） 南無
大之
身證去
〕

600×50×9 091

(1) ■ 南無
大之 ■ ■ ■
身證去

（梵字）

大之 ■ ■ ■
身證去

（梵字）

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

■ ■ ■

</



(東京西北部・東京東北部)

- 1 東京・水戸藩徳川家小石川屋敷跡・駿河小笠原家屋敷跡(春日町遺跡第三・IV地点)
- 2 第III地点 一九九一年(平成3)一〇月~一九九三年三月、第IV地点 一九九六年八月~二〇〇〇年三月
- 3 発掘機関 文京区遺跡調査会(文京区教育委員会)
- 4 調査担当者 加藤元信
- 5 遺跡の種類 遺物散布地・大名屋敷跡
- 6 遺跡の年代 繩文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 本調査は、文京区役所含(文京シビックセンター)

ならびに、施設(文京シビックホール)建設に伴うもので、庁舎建設範囲(第III地点)と施設建設範囲(第IV地点)とに分けて実施した。第III地点の南側が水戸徳川家の小石川屋敷跡に、第III地点の北側と第IV地点の西側が播磨安志藩小笠原家の屋敷跡に、そして第IV地点の東側が駿河小笠原家の屋敷跡にある。

水戸徳川家は家康第一子の頼房を藩祖とする。小石川の屋敷地は寛永六年(一六二九)当初は中屋敷として拝領され、明暦三年(一六五七)の大火を契機として、それまで江戸城内の松原小路(現在の吹上御所付近)に所在していた上屋敷を、ここに移したとされる。

播磨安志藩小笠原家は、清和源氏加賀美遠光を遠祖とする譜代大名である。鎌倉時代末期に信濃守護となつた貞宗をはじめ、武家礼法(小笠原流)の家として知られる。享保元年(一七一六)に無闇廢絶となつたが、先祖の功勞が考慮され、同年中に小笠原長興に一万石が与えられ、立藩した。所領地には居城を持たず、陣屋のみが設けられた。

駿河小笠原松平家は、元禄二年(一六八九)に松平(通監)信孝が増を受けて一万石の石高となり、大名として立藩したが、所領地には居城を持たず、陣屋のみが設けられた。安永・天明年間の家臣、倉橋格は「恋川春町」の筆名で「金々先生榮花夢」や「鷗鷺返文武二道」などの黄表紙を執筆したことでも知られている。因みにこの

筆名は、小石川・春日町をもじったものといわれている。

本誌第三二・二六号で報告したとおり、本遺跡は、小石川をはじめとする複数の河川が、周辺地域の洪積台地を浸食・開拓して合流し、「小石川大沼」と呼ばれる広大な湿地帯を形成していた地域に所在する。これまでの水戸徳川家小石川屋敷跡の調査では、縄文時代前期を嚆矢とする、複数度にわたる海進・海退の痕跡と、主として古墳時代以降に本格的に行なわれた水稻耕作の痕跡が、採取土壤の自然科學分析によつて明らかにされている。こうした地形的環境

(沖積低地) を屋敷地とするにあたり、人為的な客土・整地が行なわれている。整地が実施された具体的な時期については明確に得られないが、おそらくは水戸家が当該地域に屋敷地を拝領した寛永六年以前に当該地域に所在していた淨土宗本妙寺その他の屋敷地の造営前後のことと考えられる。

木簡をはじめとする多数の木製品(漆器・生活雑器類)と陶磁器類・金属製品(運管ほか)は、主に第三地点の発掘調査で出土している。陶器の中には水戸徳川家が屋敷地を拝領した寛永六年よりも古いものも比較的多く含まれていることから、水戸家あるいは、それ以前の本妙寺の造営の時期などに、脆弱な地盤を人為的に整地するにあたり土砂中に破損した陶磁器類を廃棄したか、もしくは文献などにたびたび記されている洪水の際に、流失した土砂に多量の陶磁器類が混在した可能性などが挙げられる。

木簡は、いずれも遺構に伴うものではなく、第三地点の包含層及び表土の遺物である。(1)・(2)は水戸徳川家屋敷跡、(3)は安志藩小笠原家屋敷跡から出土した。

水戸徳川家の江戸屋敷内部の空間構成については、絵図資料などが限定されており詳細は明らかではない。関連遺跡の調査で確認された連構群などから、屋敷の空間構成を復原してゆく必要があることは言うまでもなく、関係資料との比較を含めて今後の検討課題である。

8 木簡の収集・内容

包装簡

(1) 「納豆 勝魚六

191×74×61

191

61

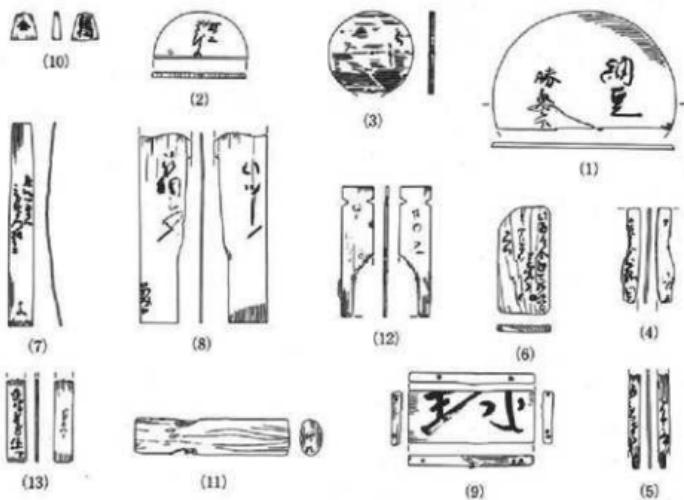
74

191



2004年出土の木簡

(5)	・ る十□□	
(6)	「□商売人□□□□□」	
(7)	「たい」ねら	142×54×6 061
(8)	「いべ□□」	215×25×2 011
(9)	「[封カ]」	(203)×49×2 081
(10)	「銀将」	55×132×11 061
(11)	「金」	29×28×5 061
(12)	「□□」	長161×長径37×細径24 061
(13)	「V□□□□□」	137×32×3 032



(13) の□□

□□□生ア」

(28)×30×2
516

(1)～(3)は重物容器の蓋板。(1)のように食材に関する内容をもつものが含まれることから、出土地点付近に水戸徳川家の厨房施設が存在していた可能性を指摘できる。(9)は二次的に整形されており、文字の上端は切れている。(10)は符棋の駒、(11)は刀子の鞘尻に墨書きしたものである。

9 関係文献

文京区役所・文京区遺跡調査会「春日町遺跡第III・IV地点—文京区役所庁舎等建設に伴う発掘調査報告書」(文京区埋蔵文化財調査報告書) (C)一〇〇〇〇年)

(加藤元信)

東京・水野原遺跡（新宿区No.一一〇遺跡）

所在地 東京都新宿区若松町

調査期間 一九九九年（平成）一二月～二〇〇〇年一月

発掘機関 新宿区水野原遺跡調査団・財新宿区生涯学習財團

調査担当者 宇佐美哲也

遺跡の種類 近世都市跡（武家地）

6 遺跡の年代 旧石器時代・縄文時代・江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

水野原遺跡は、江戸城下町の武家屋敷地の一郭に位置する。今回の調査地は、北側の大半が紀伊徳川家付家老の新宮城主水野家下

屋敷、南東側は尾張徳川家
川田久保屋敷、南西側は本
多家下屋敷など、複数の屋
敷地に相当する。調査面積
は八四四〇m²である。



（東京西北部）

調査の結果、江戸時代の
遺構面を三面（上から順に
〇〇一面、〇〇二面、〇〇三
面）確認した。そのうち〇

○二面は、区画溝の検出状況から、尾張徳川家川田久保屋敷に対応すると判断した。川田久保屋敷は、宝永二年（一七〇五）、本多家下屋敷の東側の一部を、尾張徳川家四谷末控屋敷の一部と相対替することによって成立したもので、○○二面は宝永二年以降と考えられる。

その後、川田久保屋敷はさらに本多家側へ拡張を続け、今回の調査でも、その状況を確認することができた。すなわち、○○一面で家臣團の長屋と推測される礎石建物を検出し、この建物に伴う一九世紀初頭以降の陶磁器類が相当量出土した。長屋が安政六年（一八五九）に火災に遭った記事（『東京市史稿』変更篇五）や、礎石建物の南東に長屋群の描かれた元治元年（一八六四）の「川田久保御屋舗御長屋之図」（名古屋市幕末文庫所蔵）が存在することから、一九世紀初頭頃から存在した長屋は、一八五九年に火災に遭い、一八六四年頃までに整理再建が行なわれている可能性がある。

台地上のため、ほとんどの遺構で木質遺物は出土していない。但し、水野・尾張徳川家の屋敷地の境界は台地に入り込む谷筋であり、境界付近の川田久保屋敷のB-100-1-146号、B-100-1-147号、D-100-1-148号遺構の三遺構で木材が計九一二点出土した。それらのうち、七九%が加工材、その大半は種類不明の部材で、生活財は少ない。焼成を受けているものが多いが、火災によるものかは定かでなく、共伴した陶磁器は焼けていない。今回報告

する墨書のある部材は、B-100-1-147号遺構から出土したものである。この遺構は、長軸八・三九m短軸五・〇二m深さ二・六mの長方形の大型土坑である。出土遺物は破片にして五一七一点を数える。検出した遺構に重複関係はなく、主軸方位も平行あるいは直行しているため同時期に存在したのである。共伴資料は、一七八〇年代から一八二〇年代にかけての所産であり、これらの遺構は尾張藩川田久保屋敷成立後に構築され、屋敷が拡張される以前に廃絶した。

8 木簡の叢文・内容

(1) 「口」

229×66×6 (86)

ほど穴が一ヵ所みられる。手桶の側板か。焼成を受けており、墨痕が確認できるものの、判読できない。

9 関係文献

学校法人東京女子医科大学・創立新宿区生涯学習財團「水野原遺跡」I、II（二〇〇一年、二〇〇三年）

（水本和美）



東京・葛西城址 (1)



(東京東北部)

- 1 所在地 東京都葛飾区青戸七丁目
- 2 調査期間 第六次調査 一九八〇年(昭55)九月~一九八一年一月
- 3 発掘機関 葛西城址調査会
- 4 調査担当者 古泉 弘
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 中世~近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

葛西城址は中川右岸の自然堤防上に立地する中世の城館跡である。

関東管領上杉氏によつて一五世紀に築かれたと推測さ

れており、重臣の大石石見

守が在城していた。一六世

紀になると後北条氏の支城

となり、天正一八年(一五九〇)に後北条氏の滅亡と

ともに落城した。その後この場所には、徳川将軍家が

青戸御殿を建てている。

調査地は葛西城の主郭中央で、環状七号線の建設に伴い葛西城の中心を南北に貫く形で調査を行なった。

木簡は、八一号井戸と八六号土坑からそれぞれ一点が出土した。

八一号井戸は、木桶の井戸側を有し、木桶の外側には砂岩や石塔などを円形に配置した石組みが設けられており、石組みの基底部には板碑が敷かれていた。この井戸は、天文七年(一五三八)の後北条氏による葛西城奪取後に造られたと考えられている。八六号土坑も中世の遺構で、時期は一六世紀と思われる。

- 8 木簡の叢文・内容

八一号井戸

(1) 「V□□」

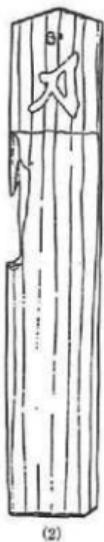
八六号土坑

(2) 「○□」

(106)×30×3 039

213×29×6 011

(1)は上部に切り込みを有し、下部は欠損している。切り込み部分は端部の一部が欠損している。
(2)はほぼ完形に近い状態である。頭部は山形になつており、穿孔を有する。墨書きは上部に梵字が一文字だけ認められるが、判読でき



(2)



(1)

(水越信吾(葛飾区教育委員会))

葛飾区葛西城址調査会「葛西城 葛西城址発掘調査報告書」(一)
九八三年

ない。下部は墨で塗りつぶされている。

9 関係文献

『平城京漆紙文書』一

(奈良文化財研究所史料第六九冊) の刊行

本書は、平城宮跡及び平城京跡から出土した漆紙文書五六点（大和郡山市教育委員会担当分を含む）を収録した報告書である。都城出土の漆紙文書の図録としては初めてのものとなる。新たに接続や出典の判明したものや、西隆寺出土のもののように今回初めて公表されるものも含まれる。

図版編には、可視光原寸大モノクロ写真を掲載するほか、赤外線デジタルカメラまたは赤外線ビデオカメラで撮影した画像を加え、遺物としてまた文字資料としてもつ漆紙文書の情報を十全に伝えるべく配慮されている。解説編では、一点ごとの詳細な解説のか、総説において反古紙の入手経路について個別に検討し漆紙文書の史料的位置付けを考える素材を提供する。

都城の漆紙文書は、このほか奈良市教育委員会担当の平城京跡の調査や、長岡宮・京跡でも着実に事例が蓄積されつつあり、漆紙文書が普遍的な遺物であることが明確になったといえよう。

市販は左記の通り。

奈良文化財研究所編『平城京漆紙文書』一 A4判 本文七八頁
図版二八ブレーント、東京大学出版会刊 六三〇〇円（税込み）

東京・葛西城址 (2)

かざいじょう

木簡は、この場から出土したものである。場からは、他に一六世紀の漁戸・差議陶器や在地産土器が出土しており、木簡もこの時期のものと考えられる。

1 所在地 東京都葛飾区青戸七丁目
2 調査期間 二〇〇三年(平成15年)五月
3 発掘機関 葛飾区教育委員会
4 調査担当者 永越信吾
5 遺跡の種類 城館跡
6 遺跡の年代 中世～近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
葛西城址は中川右岸の自然堤防上に立地する中世の城館跡である。調査地は、主郭の西部にあたる場所で、これまでの調査で主郭を囲む堀の一部を検出している。

この堀は、10m以上に及ぶ。今回の調査では内面すなわち主郭側に立ち上がる部分を検出した。調査範囲での深さは約1mであるが、従前の調査から最深部は二・五m以上になると推測される。

8 木簡の叢文・内容
(1) 「」
138×21×2 (32)

頭部に切り込みを有する荷札状の木簡である。墨痕が認められるが、軽説できない。

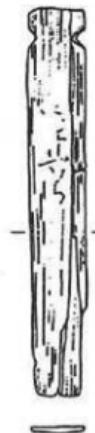
9 関係文献
葛飾区教育委員会「葛西城 XXIV」(2003年)

(永越信吾)



(東京東北部)

150



(永越信吾)

千葉・長須賀条里制遺跡



(館山市)

- 1 所在地 千葉県館山市下真倉字舞台
- 2 調査期間 一九九三年(平成5年)一一月一十九九八年八月
- 3 発掘機関 助手館文化財センター
- 4 調査担当者 高梨俊夫ほか
- 5 遺跡の種類 旧河道・水田跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 長須賀条里制遺跡は館山平野の南部に位置し、南北を汐入川と境川、東西を丘陵と砂丘列に取り囲まれた、標高約9mの後背湿地上に所在する。遺跡周辺には
- 8 条里型の水田区画が広範囲に存在しており、宅地化の影響を受けているものの現在でも基本的な地割は残存している。

今回の調査は国道建設に伴うもので、弥生時代・古墳時代の旧河道や水田、古

代以降の条里型水田、中世の堀立柱建物などの遺構が検出された。特に古墳時代後期の旧河道には、薪材を再利用した木橋が設けられたり注目される。なお、検出された条里型水田は、表層条里と方向を同じくするものであるが、共伴する遺物が少なく開田時期を決定するには至っていない。

古代以降の遺物としては、土師器・須恵器・青磁・中世陶器・錢貨などがあげられるが、耕作によって著しく磨耗・細片化しているものが目立つ。

木簡は調査区南端のAB区2層(暗褐色粘質土)から出土した。2層は近世以降の水田耕作土と考えられるが、明確な水田遺構は検出されず、出土遺物についても時期幅が大きい。このため木簡の年代は決定しがたい。なお、調査報告書では中世前後の所産と推定している。

8 木簡の収文・内容

(1) 「六日山□〔萩カ〕」

(10)×25×6 016

板目材で上端の一部と下端を欠失している。上端には刃物による切痕痕が認められる。調査地点の東側上流部に現在も「山萩」の地名が残っており、当該地との関連が注目される。

関係文献

財千葉県文化財センター「館山市長須賀条里創造跡・北条条里創造跡」(2004年)

(大谷弘幸(千葉県立中央博物館))



「平城宮発掘調査報告XIV—兵部省地区の調査」

(奈良文化財研究所学報第七〇冊) の刊行

平城宮の八省クラスの官衙の全貌を初めて明らかにした発掘調査報告書が刊行された。遺構・遺物・文献史料の総合的な検討によって、奈良時代後半、東区朝堂院南辺の朝集殿院と壬生門の間には、東に式部省、西に兵部省が東西対象に配されていたことが明らかになっており、本書はそのうちの兵部省を対象とするものである。八棟の瓦葺き礎石建物からなり、南に開いたコの字型の空間を構成するきわめて格式の高い空間を構成する一方、建築様式には明確な序列が設けられていた。

省内の遺構からの木簡の出土はないが、西側を南に流れる中央区と東区の間の基幹排水路SD三七一五からは、これまでに一五九一点の木簡が出土しており、本書ではその概略的な考察を試みている。また、平城宮内の平面構造についての総括的な再検討を行ない、新しい平城宮像を提示している。

市販は左記の通り。

奈良文化財研究所編『平城宮兵部省跡』A4判 本文編三〇四頁、図版編二九二頁、吉川弘文館発売 二三一〇〇円(税込
み)

千葉・市原条里制遺跡（実信地区）



（千葉県）

市原条里制遺跡は、市原市北西部に広がる標高約5mの冲積平野に立地している。

調査の結果、縄文時代後期の貝塚、弥生時代中期の溝、古代から近世にかけての水田が検出された。このうち田は、一部が市原地区検出の条里型水田と主軸方向や規格が一致しているものと

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| 1 所在地 | 千葉県市原市市原字実信 |
| 2 調査期間 | 下層本調査 一九九〇年（平2）六月～一九九一年三月 |
| 3 発掘機関 | 財千葉県文化財センター |
| 4 調査担当者 | 柴田龍司ほか |
| 5 遺跡の種類 | 貝塚・水田跡 |
| 6 遺跡の年代 | 縄文時代・弥生時代・古代・近世 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺物の概要 | |

古代以降の遺物は水田耕土中から出土したもので、耕作によって細片化しているものの、土器・須恵器・灰釉陶器・青磁・中世陶器など種類は豊富である。また、近接する八世紀初頭の寺院である菊間廃寺で使用された瓦類も出土している。なお、同じ市原条里制遺跡の市原地区から、「□□米五斗」の記載をもつ付札木簡が出土している（本誌第三号）。

今回報告する木簡は、下層（貝塚）本調査時に耕土中から発見されたもので、明確な年代は決定し得ない。

8 木簡の収文・内容

(1)



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



(40)×16×3 061

・



千葉・北下遺跡（一）



(東京東北部)

- | | |
|-----------------|------------------------|
| 1 所在地 | 千葉県市川市国分一丁目 |
| 2 調査期間 | 二〇〇一年(平成14)一一月一二〇〇三年一月 |
| 3 発掘機関 | 財千葉県文化財センター |
| 4 調査担当者 | 田井知二・山田貴久 |
| 5 遺跡の種類 | 遺物包蔵地 |
| 6 遺跡の年代 | 奈良時代～近世 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

北下遺跡（一）は、市川市北西部の国分台と称される舌状台地の東側縁辺に隣接する標高三～四mの低地に立地している。本遺跡から約二〇〇m西側の国分台地上には下総国分寺及び国

分尼寺があり、小谷津を挟んださらに西側の国府台地上には、下総国府の所在

が推定されている。

北下遺跡（一）の調査は、東京外郭環状道路建設に伴つて実施された。確認調査

を行なったのみで遺跡全体の様相は不明であるが、調査区北西隅から瓦窯の灰原の一部と思われる瓦の集積が検出された。瓦は、国分寺創建期のもので、調査区全体に散在している。瓦以外では奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・墨書き器や中近世の陶磁器などが出土している。

木簡は、遺物包含層に含まれていたもので、明確な遺構に伴つて出土したものではない。

8 木簡の収文・内容

(1)

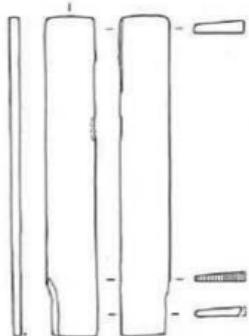


129×29×3 011

ほぼ完形の柾目材であるが、下端が一部欠損している。墨痕は表裏に認められるが、

現在のところ判読不能である。遺構に伴つて検出された資料でないため、年代も明確ではない。

(栗田賀久)



千葉・西根遺跡

である。奈良・平安時代の流路から木製形代（人形・馬形）や人名の記載された墨書き器が出土している。

木簡は、一九九九年の確認調査時にテストピットから一点出土したもので、明確な遺構に伴うものではない。

8 木簡の积文・内容

(1)

(118)×32×8 016

- | | |
|-----------------|--|
| 所在地 | 千葉県印西市戸神字棚田 |
| 2 調査期間 | 一九九九年（平成11年）七月～二〇〇〇年一月 |
| 3 発掘機関 | 財團千葉県文化財センター |
| 4 調査担当者 | 柳原弘一・沖松信隆ほか |
| 5 遺跡の種類 | 遺物包藏地・自然流路 |
| 6 遺跡の年代 | 縄文時代～近世 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 西根遺跡は、印旛沼に注ぐ神崎川の支流である戸神川に開拓された標高4m前後の谷津に立地する。区画整理事業に伴わる県道建設に伴い、一九九九年から二〇〇〇年にかけて三次にわたりて調査を実施した。 |

たって調査を実施した。
縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡で、特に
縄文時代後期を主体としている。検出された遺構は、
縄文時代後期から近世に至る流路と古墳時代前期の環

9 關係文献

財團千葉県文化財センター「印西市西根遺跡」（二〇〇五年）

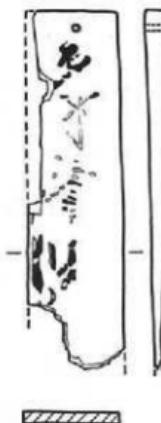
（栗田則久）



（佐倉）

西根遺跡は、印旛沼に注ぐ神崎川の支流である戸神川に開拓された標高4m前後の谷津に立地する。区画整理事業に伴わる県道建設に伴い、一九九九年から二〇〇〇年にかけて三次にわたりて調査を実施した。

縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡で、特に
縄文時代後期を主体としている。検出された遺構は、
縄文時代後期から近世に至る流路と古墳時代前期の環



（佐倉）

1	所在地	滋賀・関津遺跡	せきのつ				
2	調査期間	滋賀県大津市関津一丁目					
3	発掘機関	滋賀県文化財保護協会					
4	調査担当者	大崎哲人・藤崎高志					
5	遺跡の種類	集落跡					
6	遺跡の年代	縄文時代～室町時代					
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	大戸川の合流点の南、田上山系北麓の標高約九四mの低丘陵部から標高約八二三mの河川氾濫域にかけて立地する。二〇〇一年、県営圃場整備事業に伴う事前調査により新たに発見された遺跡である。					
8	木簡の収集・内容	発掘調査の結果、縄文時代前期の有舌尖頭器、後期の土器溝まり、晩期の土器棺、古墳時代の流路、飛鳥					

時代の堅穴住居・溝、奈良時代の掘立柱建物・溝・流路、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・土壙墓・溝などが検出された。飛鳥時代中期の溝からは、「甲」(同の異体字「臣」も)くは「四十」かと墨書きされた土師器の杯が一点出土している。また、鎌倉時代の遺構からは、大和からの輸入品とみられる瓦器を中心に、輸入陶磁器も多数出土している。

木簡は、遺跡北端の調査区で検出した流路から出土した。この流れは、幅約四m深さ約〇・九mで、大きく一層の堆積が確認され、その上層で木簡が検出された。上層からは九世紀末頃の土師器や黒色土器、一〇世紀前半の回転台土師器が伴出しており、木簡は九世紀末から一〇世紀前半にかけてのものとみられる。また、下層からは、奈良時代後半の須恵器や土師器のほか、和同開珎(一点)、神功開宝(一点)、人形代(一点)、墨書き土器数点(「本」「東」ないし「東」など)が出土している。

(1) 「大日奴良田」(上) 油水廿五日
 (2) 「」
 七月廿四日
 (130)×(19)×2 081

上端と左側面は原形を残しているが、右側面は縱に人為的とみられる割りが入る。また、下端部が強い力で折られ欠損しているほか、

中央付近の二ヵ所で折られているが、完全に分離はしていない。お

そらく廃棄段階で折られたものであろう。やや下部が細くなつてお
り、下端が尖っていた可能性がある。

墨の残りは比較的的良好で、表裏とも同一人の筆跡とみられる。表
面の上から六・七字目の二文字は、墨痕が薄いことと折れによる制
離により、訛讀困難であるが、赤外線写真により六字目は「上」で
ほぼ間違ないと考えられる。七字目については赤外線写真により
さんずい偏が見え、旁の左半分は「留」の左半と解されるところか
ら、「瀬」の可能性がある。

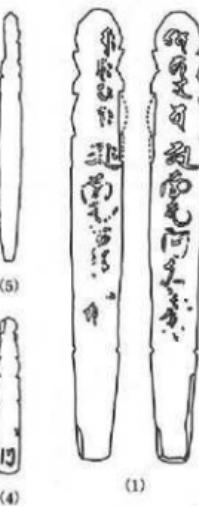
したがつて、文書としては読み通せないが、「大日の奴の良田へ
は、上の瀬め（池）の水を、この二五日に入れる」あるいは、「二
五日に止める」という意に解することができるのではないか。
とすれば、木簡を現地に掲示した告知札と推定することも可能であ
る。裏面の日付は、こうした告知がなされた日時で、おそらく用水
の取り口に突き刺して使用されたものであろう。また、「大日の
奴」とは、「大日（如来）に仕える」の意で、その田とは、大日如
來を祀るお堂の維持のために置かれた田地ではないかと考えられる。
遺跡の北一・二畝の瀬田川左岸に、大日山なる小山があり、大日
古墳群という後期古墳群もみられるが、その山頂に「大日觀音堂」
と呼ばれる祠が現存し、「近江輿地史略」は、「大日堂」には、行基
菩薩が造立した大日如來を祀るとする。木簡に見える「大日の奴」

に関わる可能性がある。

大日如來の信仰がわが国で広がるのは、九世紀以降とされており、
木簡の出土遺構の年代とほぼ一致する。そして、この地域は近年ま
で漁池漁業の盛んな地域であり、木簡は、今後平安時代前期にお
けるこの地域の開発と用排水管理の実態を明らかにするうえで、重
要な手がかりとなるであろう。

（1-7 藤崎高志、8 大橋信弘〈安土城考古博物館〉）





• □最後身聞法得果是□薦草名得增□

〔住方〕□最後身聞法得果是□〔名方〕
〔萬力〕諸佛世尊供養恭敬尊重讚歎弘宣諸力
〔意〕

〔女力〕

法華等而現其相時多寶仏告彼菩薩

卷之三

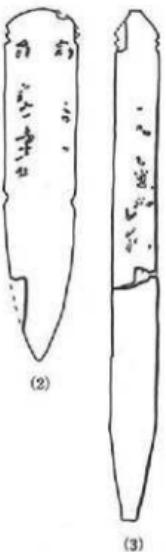
(8) 来文殊 □ 利法王子欲見汝 □ 于時

卷之三

(1)～(5)は平塔婆である。(1)は五輪塔形に作られた上部に、細長い

長方形の下部が付く。下端は平らに整えられ、下から約二cmの所

分の側面に切り欠きが一対みられる。(4)も(1)と同様の形態を呈する。小型の板塔婆(葦塔婆)である。(5)はほぼ完形品で、五輪塔形の上



群中に彫れ、長い下部が付く。但し、頂部は円形ではなく、上端が山形を呈する方形である。表面の上半に文字が認められるが、墨そのものは既に消失し、文字部分が白く浮き出た状態で残る。(2)(3)は頂部を山形に作り、その下に左右から二回ずつ切り欠きを入れていて。また、経文は二行にわたって書かれているようだが、解説不能。これらは鎌倉時代から室町時代にかけての卒塔婆であろう。

(6)・(8)は柿経である。(6)は「法華經」卷第二薬草喻品第五と授記書き難いだものと想定できる。(7)(8)は、「法華經」卷第六妙音菩薩品二十四のは連続する(三文字分を久く)一節を記す。裏面にも書写されているが判読できない。いずれも室町時代のものであろう。

9 関係文書

滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会「北萱遺跡発掘調査報告書」(一九九四年) (大橋信弥(安土城考古博物館))

滋賀・加茂遺跡

所在地	滋賀県近江八幡市加茂町
調査期間	一九九〇年(平2)六月～一九九一年一月
発掘機関	滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会
調査担当者	大沼芳幸
遺跡の種類	集落跡
遺跡の年代	古墳時代～江戸時代
遺跡及び木簡出土遺構の概要	加茂遺跡は、元の水堀内湖の縁辺部の微高地上に立地する遺跡の一つである。微高地の最も高い場所には賀茂神社が鎮座し、その南を中世以来の主要街道である朝鮮人街道(県道大津・能登川・長浜線)が通つている。加茂遺跡は、この微高地から壬子町に南に延びる部分を中心に広がるが、調査以前の考古学的知見は少なく、わずかに弥生時代、古墳時代の遺物散布が知ら

れているのみであった。また、周辺からは古瓦が採集されており、奈良時代もしくは白鳳期の古代寺院(加茂廃寺)の存在が予測されていた。

今回、加茂の集落の南を通るバイパス工事が計画され、試掘調査を行なった結果、広い範囲で古墳時代から近世に至る遺構、遺物が検出された。そこで、遺構の存在の予想される部分約三万m²について発掘調査を実施することになった。

調査の結果、自然流路から绳文時代後期の土器、古墳時代前期の土器が出土したが、中心となる遺構として奈良時代の堅穴式住居群と掘立柱建物群、加茂廃寺に供給された瓦の原料の粘土を採取したと考えられる土坑群、一二世紀から一三世紀にかけての掘立柱建物を中心とする遺構群などを検出した。一五世紀から一六世紀にかけてのものと考えられる洗い場状の遺構、エリ状の遺構も検出されている。

木簡が出土したのは自然流路SD一四からである。SD一四是、近世初頭まで少しずつ位置を変えながら流れた自然流路である。埋土は粘質土と砂層の互層で、流れの早い時期と淀んだ時期とが繰り返し訪れたことが窺える。ここから出土した大量の遺物は、全て溝の南斜面の中・下層からのものであるが、層位による時期差は認められない。八世紀をおおよそその上限とし、九世紀から一〇世紀まで、一一世紀から一二世紀までの二時期にピークが認められる。こ

これらの遺物は、いずれも上流から流下してきたものであるが、摩滅をほとんど受けていることから、上流部の遠からぬ所に先の二時期の大集落が存在すると考えられる。

八世紀から一〇世紀にかけての遺物には、須恵器杯・蓋・壺・

壺・鉢・灰釉碗・皿・壺・綠釉皿・綠釉素地碗などがあり、一一世紀から一二世紀にかけての遺物としては、回転台成形土師器杯・

皿・高台付き杯・高台付き小皿・土師器碗・小皿・黒色土器碗・

鉢・甕・土師質羽釜・壺・信楽窯・須恵質曳網系土器・土師質曳網

系土器などがある。回転台成形土師器杯や黒色土器碗の中には、底

部外面や内面に「井」の線刻や墨書きの施されたものがある。また、

金属製品には、隆平水宝（延暦五年七九六）初鋳・富寿神宝（弘

仁九年八一八）・延喜通宝（延喜七年九〇七）などの銅錢・鐵錢、

刀子などがある。なお、木簡がいずれの時期に属するかは不明であ

る。

このように、今回の調査においては、寺院自体の遺構は検出されなかつたが、寺院の存在を窺わせる遺構、遺物が検出されており、この地域における古代から中世にかけての中核的集落の一部であることが明らかになった。

8 木簡の积文・内容

(1)



368×64×2 065

両端部を削り、丸く仕上げる。二次的加工の可能性が考えられる。

左辺の一部は欠損している。表裏に多数の文字らしきものがあるが、赤外線テレビカメラ装置を用いても解読できなかつた。

9 関係文献

滋賀県教育委員会・財賀賀県文化財保護協会「主要地方道大津・能登川・長浜線改良工事に伴う加茂遺跡・一ノ坪遺跡発掘調査報告書」（一九九四年）

（大橋信務（安土城考古博物館））





(近江八幡)

慈恩寺遺跡は、現在の安土淨嚴院付近に所在した慈恩寺の跡と推定される遺跡である。慈恩寺は、近江守護佐々木氏頼が母の菩提を弔うため、延文・康安年間（一三五六～一三六二）に建立したと伝える。応永一七年（一四一〇）一〇月に守護佐々木氏が慈恩寺に年貢半分を寄進するとした文書の中に「守護方私寺」とあり、佐々木氏の菩提寺であった（東寺雜掌申状案）（東

滋賀・慈恩寺遺跡

じおんじ

- | | |
|---------------|----------------------|
| 所在地 | 滋賀県蒲生郡安土町大字慈恩寺 |
| 調査期間 | 一九八一年（昭57）九月～一九八三年一月 |
| 発掘機関 | 滋賀県教育委員会・即滋賀県文化財保護協会 |
| 調査担当者 | 石橋正嗣 |
| 遺跡の種類 | 集落跡 |
| 遺跡の年代 | 古墳時代前期・室町時代 |
| 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | |

慈恩寺遺跡は、現在の安土淨嚴院付近に所在した慈恩寺の跡と推定される遺跡である。慈恩寺は、近江守護佐々木氏頼が母の菩提を

弔うため、延文・康安年間

（一三五六～一三六二）に建

立したと伝える。応永一七

年

（一四一〇）一〇月に守

護佐々木氏が慈恩寺に年貢

半分を寄進するとした文書

の中に「守護方私寺」とあ

り、佐々木氏の菩提寺であ

った（東寺雜掌申状案）（東

寺百合文書ル函一二二号）。しかし、戦国時代以来しばしば兵火にさらされ、最後は織田信長の近江侵攻により廃寺となつたといふ。

一九八二年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行なわれ、慈恩寺に関わる遺跡の検出が期待された。しかし、調査地域からは、寺院に関わる明確な遺構の検出ではなく、室町時代とみられる大規模な池をはじめ、溝・井戸などが検出され、これとは別に古墳時代前期の堅穴住居二三棟と土坑が検出された。出土した遺物は、室町時代に属する大量の土師器皿・陶磁器類・瓦類・石製五輪塔と柿経とみられる木簡、及び古墳時代前期の古式土師器である。柿経を含む室町時代の遺物の大半は、池より出土した。

柿経の出土した池は、土層・出土土器などからその形成時期を二期に想定でき、それぞれの時期に柿経が伴い、東・西二カ所より出土している。

東側の地点からは細幅で両面に写經の施されたものと、同じく細幅で、片面にのみ写經の施されたものの、一種類が出土している。

一方、西側の地点からは幅が広く、片面にのみ写經の施されたものが出土している。これら三種類の柿経は、いずれも木目のまっすぐ通ったビノキを使用しており、頭部は圭頭状である。頭部左右に切り込みは認められず、二〇本一一把で根元を紐でくくつたものや、いくつかの経巻をまとめて「タガ」をはじめた状態にあるものも認められなかつた。なお、今回出土した柿経のうち訛説できたものは、合

計三七九点である。

楠経は、池跡の東西二カ所で検出したものであるが、そのおのおのに関連遺物が認められる。まず、東側の地点の繩縄陶面写經の楠経に伴うものとしては、木製の小塔があげられる。これは一材からなっており、高さわずか八・七cmと小型のもので、方形の基礎部の上にふくらみをもつた球形に近い塔身部とその上に笠部、さらに笠部の中央より棒状の突出を作り出しているが、全体的に腐蝕が著しいため塔の種類は判断しがたい。ただ、この突出部が五輪塔の空・風輪にあたる部分で、腐蝕によって棒状になつたと考えるならば、奈良の元興寺極樂坊や当麻寺にその類例が認められ、鎌倉時代から室町時代にかけてのものといえよう。

次に、西側の地点の広幅片面写經の楠経に伴う遺物としては、土師皿と瓦質の火舍があげられる。土師皿は退化へソ皿の形態を残しているもので、底部外側中央にわざかながら凹みを有し、口縁部付近に一条の沈線が入るものである。沈線は有するものの、底部の凹みは認められない。瓦質の火舍は口径二三cmのもので小破片の残存であるため詳細については不明である。ともあれこれらの土器はいずれも室町時代後期から桃山時代にかけての特徴を有するものであり、前述の木製小塔より時代が下がるものと考えている。

8 木簡の积文・内容

(1) 「了無礙如彼卉木叢林諸葉草等而不自知
・」 三三之 111 (345)×29×0.34 019

(2) 「上中下性如來知是一相一味之法所謂解
〔脱相離相滅相究竟涅槃常■寂滅相終帰於
(310)×29×0.43 019

(3) 「空仏知是已觀衆生心欲而將護之是故不
〔即為說一切種智汝等迦葉甚為希有能知
(342)×27×0.37 019

(4) 「空仏知是已觀衆生心欲而將護之是故不
〔如來隨宜說法能信能受所以者何諸仏世
(343)×27×0.31 019

(5) 「尊隨宜說難解難知爾時世尊欲重宣此
〔尊隨宜說法
(343)×27×0.31 019

(6) 「義而說偈言
〔破有法王出現世間隨衆生欲種種說法
(345)×29×0.41 019

(7) 「義而說偈言
〔破有法王出現世間隨衆生欲種種說法
(346)×29×0.31 019

(8) 「義而說偈言
〔破有法王出現世間隨衆生欲種種說法
(349)×29×0.36 019

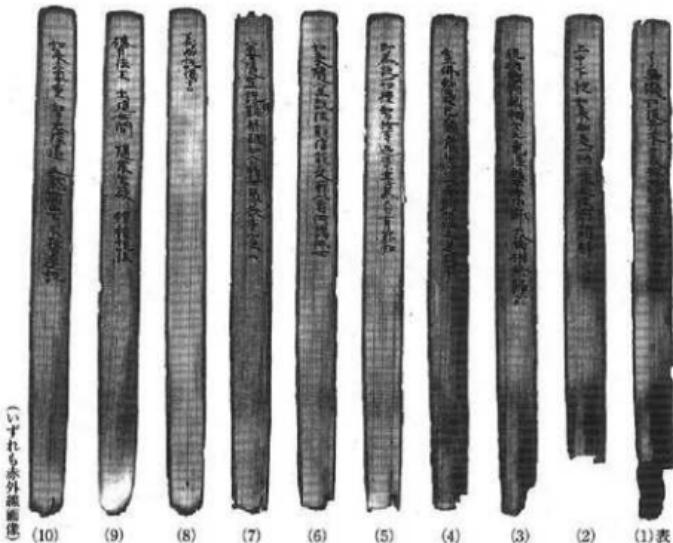
(9) 「如來尊重智慧深遠久默斯要不務速說
(351)×28×0.33 019

訳読できた袖経の内訳は、細幅両面写経一四三点、細幅片面写経一七点、広幅片面写経二九点の合計三七九点である。但し、長さ一一三寸の小破片をはじめ経文部分の欠損が著しいもの、一本として数えるには不適当なもの、あるいは土圧が抜けずに密着したままの塊状のものなどもいくつかあるため、その正確な出土点数は不明である。点数が厖大であるため、ここでは広幅片面写経の一部を例示して紹介した。妙法蓮華經卷第三葉草喩品第五のうちの一連の部分である。(3)には書き損じの訂正、(7)には脱字補入がみられる。さて、この三種類の袖経を形態別に比較一覧すると、左表のようになる。筆跡は太字や細字、整った字や曲がった字など個性豊かなものが多く、書体は行書・草書・楷書を使用し、一人の仕事でないことは明白である。経典は法華經八卷二八品のみで、開結一經(無量義經・般若經)は解説したものには含まれていなかった。

慈恩寺遺跡出土袖経の形態別比較

写経 方法	製作方法	写経面	長さ(③) (最大値)	幅(③)	厚さ(③)
両面 割り刺き					
片面 削り刺き	滑らか	やや粗い	一七・四	一	〇・〇三一
片面 削り刺き	滑らか	一九・六	一九・六	〇・九	〇・〇一五
片面 削り刺き	滑らか	四五・一	二・四	一・一	〇・〇四六
片面 削り刺き	滑らか	一三・三	一三・三	一・一	〇・〇二一

(未完形面はない)



(いずれも赤外線画像)

これらの点と全体をみた上で、分類整理した結果は次の通りである。

- ① 両面写経の場合は、一般的な二〇本一把握を必ずしも遵守していないものもある。但し片面写経は一把の本数は不詳。
- ② 卷数・品題は法華經に該当し、他の經文は入っていない。
- ③ 広幅片面写経は校正が施されており、「皆校」「一枚」の記入がある。他の一種類も校正されているが、整然としたものではない。
- ④ 番号記入がところどころ見受けられる。後の作業、例えば大把にする時などの煩を避けるためであろう。

⑤ 同じ經文を書いたものは細幅片面写経は二点、広幅片面写経も二点ある（細幅片面写経は數が少なく不詳）。このことから法華經の大把は四つ以上あったと推定されるが、実際の出土量は少なく腐蝕が進んでいるという事実は否めない。

なお、細幅片面写経に「南無阿弥陀仏」と六字名号が記入されたものが四点ある。

9 関係文献

滋賀県教育委員会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X-5-1』（一九八四年）

同『昭和五七年度滋賀県文化財調査年報』（一九八四年）

（石橋正嗣（安土町教育委員会）
河内美代子（近江八幡市立郷土資料館））

『木簡研究』在庫状況のお知らせ

領価	品切れ	五・六号	三五〇〇円
一・四・七号	三八〇〇円	一三号	四三〇〇円
八・一二号	四五〇〇円	一四・一五号	五〇〇〇円
一四・一五号	五五〇〇円	一六・一三・二六号	(五・六号は残部僅少)
送料			
一冊	六〇〇円	二冊	八〇〇円
四冊	一一〇〇円	五冊	一〇〇〇円
一一一〇冊	一一〇〇円		

◇個人でのお求めは代金前納です。代金と送料を郵便振替
○一〇〇〇—六—一五二七 木簡学会
までお送りください。

◇公的機関の場合は代金後納で結構です。
左記の銀行振込か右記の郵便振替でお願いします。

口座番号：みずほ銀行西大寺出張所

普通預金 一一一〇三一五

お問い合わせは左記へどうぞ
〒六三〇一八五七七 奈良市一条町一丁目九番一号

奈良文化財研究所

電話 ○七四一—三〇一六八三七

木 簡 学 会

宮城・一本柳遺跡

いっぽんやなが



- 1 所在地 宮城県遠田郡小牛田町字新一本柳・一本柳・塩釜
- 2 調査期間 第一次調査 一九九五年（平7）八月～二月
第二次調査 一九九六年四月～二月
- 3 発掘機関 宮城県教育委員会・小牛田町教育委員会
- 4 調査担当者 菊地逸夫・山田晃弘・茂木好光・伊藤裕・
首原弘樹・星清
- 5 遺跡の種類 集落跡・屋敷跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代・平安時代・中世・近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一本柳遺跡は宮城県北中央部の大崎低地東縁部に位置し、鳴瀬川左岸に形成された標高約10mの自然堤防上に立地する。奈良・平安時代・中世・近世の複合遺跡で、東西500m以上、南北500mほどの広がりをもつ。調査は鳴瀬川中流

域堰閘運工事に伴うもので、一九九八年度の調査でも木簡が出土している（本誌第二号）。今回報告するのは、これに先立つ第一次・第二次調査で出土した木簡である。調査面積は合わせて約六五〇〇m²であり、ここでは両調査の成果を一括して紹介する。

奈良・平安時代の遺構には、掘立柱建物九棟のほか、溝、土坑、小溝状遺構がある。建物は総柱建物を主体とした倉庫群とみられ、八世紀後半から九世紀前半頃までのものである。

中世では、屋敷が五軒（屋敷一・五）見つかっている。このうち屋敷一・三はそれぞれ溝で方形に囲まれていたとみられ、屋敷三の溝の南辺では土橋も検出された。また、屋敷一と二は調査区内を東西に走る用耕水路とみられる溝を挟んで、南側と北側に當まっている。溝と各屋敷の間は通路となっている。

屋敷の規模は、調査区の制約のため不明なものもあるが、屋敷一が東西約70m、南北40m、屋敷二が東西70m以上、南北8m以上、屋敷三が東西50m以上、南北22m以上である。内部の様子は屋敷一が比較的明らかで、多數の掘立柱建物や井戸、土坑によつて構成されている。敷地利用には一貫した継続性が認められ、建物は敷地の中央部西寄りと北側の二カ所に、井戸は建物の周囲に集中し、敷地の北西・南西・南東部は空開地となっている。建物の配置も規則的で、西寄りに主屋とみられる大型の東西棟、北側に雜舎を並べている。居住者は、屋敷の規模・規則性・継続性から在地領

主程度の武士が想定される。屋敷一と三の内部や居住者の詳細はわからないが、区画の規模からみると屋敷一と同じようなものと思われる。屋敷一と三の年代は、屋敷を囲む溝や内部の遺構、及び屋敷一と二の間にある用排水路出土の陶磁器類から、屋敷一と二が一五世紀頃、屋敷三が一六世紀頃とみられる。

木簡は溝SD四九から一点、溝SD五〇から二点、井戸SE二二一〇から一点出土している。SD四九は前述の屋敷一と二の間を東西に走る用排水を兼ねた水路である。上幅三・五m深さ一・〇mほどで、一九二mm分を検出した。木簡以外では多数の陶磁器・かわらけをはじめ、刀子・鏃などの鉄製品、板草履・箸・曲物などの木製品、

銀元宝・皇宋通宝などの宋錢、板碑の破片などが出土した。陶器は在地産のものより常滑・瀬美・古瀬戸など東海産のものが多い。磁器には白磁のほか、龍泉窯系の青磁がある。

SD五〇は屋敷三を埋む溝、南辺と東辺の一部五・三m分を検出した。上幅は三・〇m、深さは一・五mほどある。木簡以外では多数の陶磁器・かわらけをはじめ、石鉢・茶臼などの石製品、折敷・板草履・下駄などの木製品が出土した。陶磁器の内容は前述のSD四九とはほぼ同じである。

SE二二〇は屋敷三に伴う直径一・五m深さ一・五mほどの素掘りの井戸である。木簡以外では龍泉窯系の青磁、無釉陶器、かわらけ、漆塗椀、折敷、小刀が出土した。

8 木簡の积文・内容

溝SD四九

(1)

溝SD五〇

(1)

(2)

(3)

井戸SE二二一〇

(4)

著88×厚5 061

四点とも墨痕が薄く不鮮明で、判読は難しい。(1)は上端左右に切り込みがあり、荷札とみられる。三・四文字分ほどの墨痕がある。(2)は曲物の側板に墨書きしたもので、五、六文字ほどとみられる。(3)も曲物側板の片面に書かれたもの。(4)は曲物底板の片面に墨痕が認められるものである。

9 関係文献

宮城県教育委員会「一本柳遺跡」I、II(一九九八年、二〇〇一年)
(吉野 武(宮城県多賀城跡調査研究会))



(1)



(2)

著88×厚5 061

岩手・柳之御所跡 (2)



(一) 図

遺跡及び木簡出土遺構の概要
遺跡の種類 居館跡・屋敷地跡
遺跡の年代 一二世紀

所在地	岩手県西磐井郡平泉町字柳御所
調査期間	第五三次調査 二〇〇〇年(平12)四月～五月
発掘機関	平泉町教育委員会
調査担当者	本澤愬輔
遺跡の種類	居館跡・屋敷地跡
遺跡の年代	一二世紀

柳之御所跡はJR東北本線平泉駅の北約〇・七kmの地点を中心には広がる史跡「柳之御所遺跡」と周知の遺跡範囲の総称である。遺跡の立地は、北が高塙山から

続く緩斜面地、東が北上川に侵食された崖線が境となる。

り、西と南は猫間が淵と呼ばれる沢状地形が延びて、全体が舌状に広がる。標高は二二一三三mほどである。

一九八八年から北上川堤防及び国道バイパス工事に

伴い大規模な調査が実施され、奥州藤原氏時代の東北地方支配の拠点となる重要な遺跡として保存が決定された。一九九七年には約六haが史跡指定を受け、周知の遺跡を合わせると全体で約一〇haの規模を有する。掘に開まれた「堀内部地区」からは、一二世紀第三四半期をピークとする遺構や遺物が大量に出土し、「吾妻鏡」に記された政府「平泉館」と推定される。一方、北側の「堀外部地区」は奥州藤原氏の一族や家臣の居住域と考えられている。遺跡の保存決定後に行なわれた「堀内部地区」の調査によつて、一二世紀初頭から前期にかけてのものと考えられる遺物・遺構が確認された。これらのことから、遺跡は初代清衡の時代から文治五年(一一八九)に奥州藤原氏が滅ぼするまでの各時期にわたり存続したことことが判明した。土器・土製品、国産陶磁器、中国産陶磁器、木製品、金屬製品など、多種多様な遺物が出土する、平泉を代表する遺跡である。

第五三次調査は「堀外部地区」の一郭、中尊寺に向かう道沿いの建物跡や付属施設が密集する地域で実施した。狭い範囲の調査であったが、一二世紀後半の掘立柱建築、区画溝、井戸、道路遺構が検出された。四点の木簡が出土した井戸は、径一・二m・三mの円形で、深さ三〇の井戸底に木枠が残る。木枠は〇・七m長の隅柱と三枚組みの横木を四角に接合し、その上にまた四角に組んだ横木を積み重ねている。御板は二・二m長の一枚のみで、二段目以上の木枠や他の側板は失われている。

井戸底からは中国產青白磁輪花柄一点、大形手づくねかわらけ五点が出土したが、これらは井戸鎮めとして用いたと推定される。木簡は、いずれも井戸を埋めた土の中位層から、陽物形・筆先・櫛などとともに出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) 「□目 桶五、鉢五、杓二、尺三」
門田 桶五、
〔鉢五〕 柄一、 尺師三、
□ 桶五、
〔鉢五〕 柄一、 尺師三、

273×(66)×2
(150)×10×1
(150)×10×2

061
061
061

(2) 「△□ △□」
(3) 「△□ △□」
(4) 「△□ △□」
70×40×3
065

(1) は折敷の底板とみられる薄板の破片に書かれている。上下両端は原形をとどめるが、左右両辺は削れている。(2)(3)は筆塔婆で、(4)は針状を呈し、上端の一面を小さく抉り、下端を尖らせている。

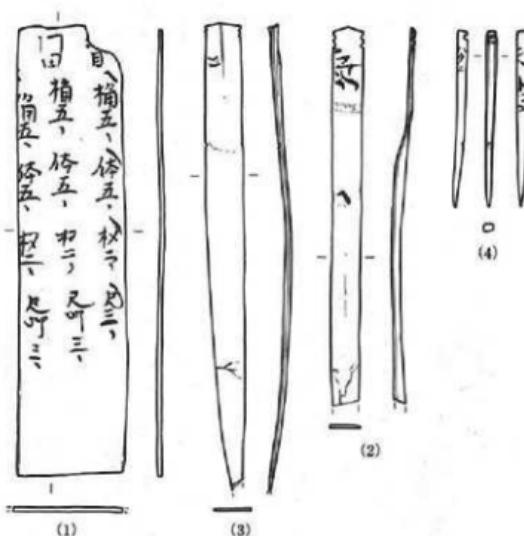
なお、木簡の积読にあたっては、奈良女子大学の鎌野和己氏と同大学院の前川佳代氏のご教示を得た。

9 関係文献

平泉町「樽之御所資料館第一回特別展図録」(1990年)

平泉町教育委員会「平泉遺跡群発掘調査報告書」七七(1991年)

(菅原計一)



岩手・花立II遺跡

はなだて



(一) 間

花立II遺跡はJR平泉駅の北西約六〇〇mに所在し、周囲には特別史跡無量光院跡や、特別史跡毛越寺跡の飛地である白山社跡、並びに花立庵寺跡がある。遺跡の北部は史跡金剛山に統く丘陵地、南部は平坦地となる。遺跡内の花立溜池付近には三十三間堂跡の伝承地がある。

第一次調査は歩道拡幅工事に伴うもので、幅三〇から六〇mと狭い調査区である。

- | | |
|---------|--------------------|
| 1 所在地 | 岩手県西磐井郡平泉町平泉字花立地内 |
| 2 調査期間 | 第一次調査 一九九〇年(平2)一〇月 |
| 3 発掘機関 | 平泉町教育委員会 |
| 4 調査担当者 | 及川 司 |
| 5 遺跡の種類 | 寺社跡 |
| 6 遺跡の年代 | 一二世紀 |

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

花立II遺跡はJR平泉駅の北西約六〇〇mに所在し、周囲には特別史跡無量光院跡や、特別史跡毛越寺跡の飛地である白山社跡、並

びに花立庵寺跡がある。遺跡の北部は史跡金剛山に統く丘陵地、南部は平坦地となる。遺跡内の花立溜池付近には三十三間堂跡の伝承地がある。

- 第一次調査は歩道拡幅工事に伴うもので、幅三〇から六〇mと狭い調査区である。
- （及川 司）
- （一）
- （1）
- （2）
- （3）
- （4）
- （5）
- （6）
- （7）
- （8）
- （9）
- （10）
- （11）
- （12）
- （13）
- （14）
- （15）
- （16）
- （17）
- （18）
- （19）
- （20）
- （21）
- （22）
- （23）
- （24）
- （25）
- （26）
- （27）
- （28）
- （29）
- （30）
- （31）
- （32）
- （33）
- （34）
- （35）
- （36）
- （37）
- （38）
- （39）
- （40）
- （41）
- （42）
- （43）
- （44）
- （45）
- （46）
- （47）
- （48）
- （49）
- （50）
- （51）
- （52）
- （53）
- （54）
- （55）
- （56）
- （57）
- （58）
- （59）
- （60）
- （61）
- （62）
- （63）
- （64）
- （65）
- （66）
- （67）
- （68）
- （69）
- （70）
- （71）
- （72）
- （73）
- （74）
- （75）
- （76）
- （77）
- （78）
- （79）
- （80）
- （81）
- （82）
- （83）
- （84）
- （85）
- （86）
- （87）
- （88）
- （89）
- （90）
- （91）
- （92）
- （93）
- （94）
- （95）
- （96）
- （97）
- （98）
- （99）
- （100）
- （101）
- （102）
- （103）
- （104）
- （105）
- （106）
- （107）
- （108）
- （109）
- （110）
- （111）
- （112）
- （113）
- （114）
- （115）
- （116）
- （117）
- （118）
- （119）
- （120）
- （121）
- （122）
- （123）
- （124）
- （125）
- （126）
- （127）
- （128）
- （129）
- （130）
- （131）
- （132）
- （133）
- （134）
- （135）
- （136）
- （137）
- （138）
- （139）
- （140）
- （141）
- （142）
- （143）
- （144）
- （145）
- （146）
- （147）
- （148）
- （149）
- （150）
- （151）
- （152）
- （153）
- （154）
- （155）
- （156）
- （157）
- （158）
- （159）
- （160）
- （161）
- （162）
- （163）
- （164）
- （165）
- （166）
- （167）
- （168）
- （169）
- （170）
- （171）
- （172）
- （173）
- （174）
- （175）
- （176）
- （177）
- （178）
- （179）
- （180）
- （181）
- （182）
- （183）
- （184）
- （185）
- （186）
- （187）
- （188）
- （189）
- （190）
- （191）
- （192）
- （193）
- （194）
- （195）
- （196）
- （197）
- （198）
- （199）
- （200）
- （201）
- （202）
- （203）
- （204）
- （205）
- （206）
- （207）
- （208）
- （209）
- （210）
- （211）
- （212）
- （213）
- （214）
- （215）
- （216）
- （217）
- （218）
- （219）
- （220）
- （221）
- （222）
- （223）
- （224）
- （225）
- （226）
- （227）
- （228）
- （229）
- （230）
- （231）
- （232）
- （233）
- （234）
- （235）
- （236）
- （237）
- （238）
- （239）
- （240）
- （241）
- （242）
- （243）
- （244）
- （245）
- （246）
- （247）
- （248）
- （249）
- （250）
- （251）
- （252）
- （253）
- （254）
- （255）
- （256）
- （257）
- （258）
- （259）
- （260）
- （261）
- （262）
- （263）
- （264）
- （265）
- （266）
- （267）
- （268）
- （269）
- （270）
- （271）
- （272）
- （273）
- （274）
- （275）
- （276）
- （277）
- （278）
- （279）
- （280）
- （281）
- （282）
- （283）
- （284）
- （285）
- （286）
- （287）
- （288）
- （289）
- （290）
- （291）
- （292）
- （293）
- （294）
- （295）
- （296）
- （297）
- （298）
- （299）
- （300）
- （301）
- （302）
- （303）
- （304）
- （305）
- （306）
- （307）
- （308）
- （309）
- （310）
- （311）
- （312）
- （313）
- （314）
- （315）
- （316）
- （317）
- （318）
- （319）
- （320）
- （321）
- （322）
- （323）
- （324）
- （325）
- （326）
- （327）
- （328）
- （329）
- （330）
- （331）
- （332）
- （333）
- （334）
- （335）
- （336）
- （337）
- （338）
- （339）
- （340）
- （341）
- （342）
- （343）
- （344）
- （345）
- （346）
- （347）
- （348）
- （349）
- （350）
- （351）
- （352）
- （353）
- （354）
- （355）
- （356）
- （357）
- （358）
- （359）
- （360）
- （361）
- （362）
- （363）
- （364）
- （365）
- （366）
- （367）
- （368）
- （369）
- （370）
- （371）
- （372）
- （373）
- （374）
- （375）
- （376）
- （377）
- （378）
- （379）
- （380）
- （381）
- （382）
- （383）
- （384）
- （385）
- （386）
- （387）
- （388）
- （389）
- （390）
- （391）
- （392）
- （393）
- （394）
- （395）
- （396）
- （397）
- （398）
- （399）
- （400）
- （401）
- （402）
- （403）
- （404）
- （405）
- （406）
- （407）
- （408）
- （409）
- （410）
- （411）
- （412）
- （413）
- （414）
- （415）
- （416）
- （417）
- （418）
- （419）
- （420）
- （421）
- （422）
- （423）
- （424）
- （425）
- （426）
- （427）
- （428）
- （429）
- （430）
- （431）
- （432）
- （433）
- （434）
- （435）
- （436）
- （437）
- （438）
- （439）
- （440）
- （441）
- （442）
- （443）
- （444）
- （445）
- （446）
- （447）
- （448）
- （449）
- （450）
- （451）
- （452）
- （453）
- （454）
- （455）
- （456）
- （457）
- （458）
- （459）
- （460）
- （461）
- （462）
- （463）
- （464）
- （465）
- （466）
- （467）
- （468）
- （469）
- （470）
- （471）
- （472）
- （473）
- （474）
- （475）
- （476）
- （477）
- （478）
- （479）
- （480）
- （481）
- （482）
- （483）
- （484）
- （485）
- （486）
- （487）
- （488）
- （489）
- （490）
- （491）
- （492）
- （493）
- （494）
- （495）
- （496）
- （497）
- （498）
- （499）
- （500）
- （501）
- （502）
- （503）
- （504）
- （505）
- （506）
- （507）
- （508）
- （509）
- （510）
- （511）
- （512）
- （513）
- （514）
- （515）
- （516）
- （517）
- （518）
- （519）
- （520）
- （521）
- （522）
- （523）
- （524）
- （525）
- （526）
- （527）
- （528）
- （529）
- （530）
- （531）
- （532）
- （533）
- （534）
- （535）
- （536）
- （537）
- （538）
- （539）
- （540）
- （541）
- （542）
- （543）
- （544）
- （545）
- （546）
- （547）
- （548）
- （549）
- （550）
- （551）
- （552）
- （553）
- （554）
- （555）
- （556）
- （557）
- （558）
- （559）
- （560）
- （561）
- （562）
- （563）
- （564）
- （565）
- （566）
- （567）
- （568）
- （569）
- （570）
- （571）
- （572）
- （573）
- （574）
- （575）
- （576）
- （577）
- （578）
- （579）
- （580）
- （581）
- （582）
- （583）
- （584）
- （585）
- （586）
- （587）
- （588）
- （589）
- （590）
- （591）
- （592）
- （593）
- （594）
- （595）
- （596）
- （597）
- （598）
- （599）
- （600）
- （601）
- （602）
- （603）
- （604）
- （605）
- （606）
- （607）
- （608）
- （609）
- （610）
- （611）
- （612）
- （613）
- （614）
- （615）
- （616）
- （617）
- （618）
- （619）
- （620）
- （621）
- （622）
- （623）
- （624）
- （625）
- （626）
- （627）
- （628）
- （629）
- （630）
- （631）
- （632）
- （633）
- （634）
- （635）
- （636）
- （637）
- （638）
- （639）
- （640）
- （641）
- （642）
- （643）
- （644）
- （645）
- （646）
- （647）
- （648）
- （649）
- （650）
- （651）
- （652）
- （653）
- （654）
- （655）
- （656）
- （657）
- （658）
- （659）
- （660）
- （661）
- （662）
- （663）
- （664）
- （665）
- （666）
- （667）
- （668）
- （669）
- （670）
- （671）
- （672）
- （673）
- （674）
- （675）
- （676）
- （677）
- （678）
- （679）
- （680）
- （681）
- （682）
- （683）
- （684）
- （685）
- （686）
- （687）
- （688）
- （689）
- （690）
- （691）
- （692）
- （693）
- （694）
- （695）
- （696）
- （697）
- （698）
- （699）
- （700）
- （701）
- （702）
- （703）
- （704）
- （705）
- （706）
- （707）
- （708）
- （709）
- （710）
- （711）
- （712）
- （713）
- （714）
- （715）
- （716）
- （717）
- （718）
- （719）
- （720）
- （721）
- （722）
- （723）
- （724）
- （725）
- （726）
- （727）
- （728）
- （729）
- （730）
- （731）
- （732）
- （733）
- （734）
- （735）
- （736）
- （737）
- （738）
- （739）
- （740）
- （741）
- （742）
- （743）
- （744）
- （745）
- （746）
- （747）
- （748）
- （749）
- （750）
- （751）
- （752）
- （753）
- （754）
- （755）
- （756）
- （757）
- （758）
- （759）
- （760）
- （761）
- （762）
- （763）
- （764）
- （765）
- （766）
- （767）
- （768）
- （769）
- （770）
- （771）
- （772）
- （773）
- （774）
- （775）
- （776）
- （777）
- （778）
- （779）
- （780）
- （781）
- （782）
- （783）
- （784）
- （785）
- （786）
- （787）
- （788）
- （789）
- （790）
- （791）
- （792）
- （793）
- （794）
- （795）
- （796）
- （797）
- （798）
- （799）
- （800）
- （801）
- （802）
- （803）
- （804）
- （805）
- （806）
- （807）
- （808）
- （809）
- （810）
- （811）
- （812）
- （813）
- （814）
- （815）
- （816）
- （817）
- （818）
- （819）
- （820）
- （821）
- （822）
- （823）
- （824）
- （825）
- （826）
- （827）
- （828）
- （829）
- （830）
- （831）
- （832）
- （833）
- （834）
- （835）
- （836）
- （837）
- （838）
- （839）
- （840）
- （841）
- （842）
- （843）
- （844）
- （845）
- （846）
- （847）
- （848）
- （849）
- （850）
- （851）
- （852）
- （853）
- （854）
- （855）
- （856）
- （857）
- （858）
- （859）
- （860）
- （861）
- （862）
- （863）
- （864）
- （865）
- （866）
- （867）
- （868）
- （869）
- （870）
- （871）
- （872）
- （873）
- （874）
- （875）
- （876）
- （877）
- （878）
- （879）
- （880）
- （881）
- （882）
- （883）
- （884）
- （885）
- （886）
- （887）
- （888）
- （889）
- （890）
- （891）
- （892）
- （893）
- （894）
- （895）
- （896）
- （897）
- （898）
- （899）
- （900）
- （901）
- （902）
- （903）
- （904）
- （905）
- （906）
- （907）
- （908）
- （909）
- （910）
- （911）
- （912）
- （913）
- （914）
- （915）
- （916）
- （917）
- （918）
- （919）
- （920）
- （921）
- （922）
- （923）
- （924）
- （925）
- （926）
- （927）
- （928）
- （929）
- （930）
- （931）
- （932）
- （933）
- （934）
- （935）
- （936）
- （937）
- （938）
- （939）
- （940）
- （941）
- （942）
- （943）
- （944）
- （945）
- （946）
- （947）
- （948）
- （949）
- （950）
- （951）
- （952）
- （953）
- （954）
- （955）
- （956）
- （957）
- （958）
- （959）
- （960）
- （961）
- （962）
- （963）
- （964）
- （965）
- （966）
- （967）
- （968）
- （969）
- （970）
- （971）
- （972）
- （973）
- （974）
- （975）
- （976）
- （977）
- （978）
- （979）
- （980）
- （981）
- （982）
- （983）
- （984）
- （985）
- （986）
- （987）
- （988）
- （989）
- （990）
- （991）
- （992）
- （993）
- （994）
- （995）
- （996）
- （997）
- （998）
- （999）
- （1000）
- （1001）
- （1002）
- （1003）
- （1004）
- （1005）
- （1006）
- （1007）
- （1008）
- （1009）
- （1010）
- （1011）
- （1012）
- （1013）
- （1014）
- （1015）
- （1016）
- （1017）
- （1018）
- （1019）
- （1020）
- （1021）
- （1022）
- （1023）
- （1024）
- （1025）
- （1026）
- （1027）
- （1028）
- （1029）
- （1030）
- （1031）
- （1032）
- （1033）
- （1034）
- （1035）
- （1036）
- （1037）
- （1038）
- （1039）
- （1040）
- （1041）
- （1042）
- （1043）
- （1044）
- （1045）
- （1046）
- （1047）
- （1048）
- （1049）
- （1050）
- （1051）
- （1052）
- （1053）
- （1054）
- （1055）
- （1056）
- （1057）
- （1058）
- （1059）
- （1060）
- （1061）
- （1062）
- （1063）
- （1064）
- （1065）
- （1066）
- （1067）
- （1068）
- （1069）
- （1070）
- （1071）
- （1072）
- （1073）
- （1074）
- （1075）
- （1076）
- （1077）
- （1078）
- （1079）
- （1080）
- （1081）
- （1082）
- （1083）
- （1084）
- （1085）
- （1086）
- （1087）
- （1088）
- （1089）
- （1090）
- （1091）
- （1092）
- （1093）
- （1094）
- （1095）
- （1096）
- （1097）
- （1098）
- （1099）
- （1100）
- （1101）
- （1102）
- （1103）
- （1104）
- （1105）
- （1106）
- （1107）
- （1108）
- （1109）
- （1110）
- （1111）
- （1112）
- （1113）
- （1114）
- （1115）
- （1116）
- （1117）
- （1118）
- （1119）
- （1120）
- （1121）
- （1122）
- （1123）
- （1124）
- （1125）
- （1126）
- （1127）
- （1128）
- （1129）
- （1130）
- （1131）
- （1132）
- （1133）
- （1134）
- （1135）
- （1136）
- （1137）
- （1138）
- （1139）
- （1140）
- （1141）
- （1142）
- （1143）
- <p

(5) 「卍」

270×465×(12) 0.61

(6) 「○」

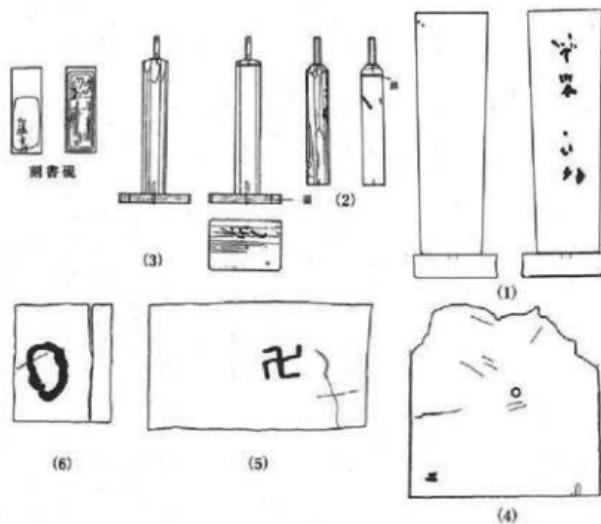
249×207×(12) 0.61

(1)~(3)は位牌である。(1)は、上端部のやや広い棹と櫛状工具で切られた角材の台座で構成されている。墨痕は棹片面にあり、被葬者の戒名が記載されていたと思われる。(2)は六ないし八角の棹の上端に長さ三cm程度の棒を刺し、下端に板状の台座が付く。それぞれ棹、台座に墨痕や墨書が確認されている。(4)~(6)は棹の鋼板で、下端もしくは中央に墨で印を書き入れている。

9 関係文献

財山形県埋蔵文化財センター『淡江遺跡第四次調査報告書』(一)
〇〇一年)

(押切智紀)



山形・手藏田一〇遺跡



(酒田)

- 1 所在地 山形県酒田市大字手藏田字村上
- 2 調査期間 一九八七年（昭62）四月～九月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 名和達朗・斎藤克典
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

手藏田一〇遺跡は、酒田市街地東方約六・五km、庄内平野の水田地帯に位置し、平川河西岸に面する河間低地の微高地、標高約六mに立地する。県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行なわれた。調査面積は四五五六m²で、一〇世紀前後と三世紀前半から江戸時代後期までの多數の土坑のほか、井戸、溝を検出した。調査溝はその施設の区画に関係

する可能性もある。遺物には、赤焼土器を中心とする土器、陶磁器、木製品がある。

木簡は、調査区内を北側から西側方向へ弧状にめぐる幅六・二m深さ七〇cmの溝SD五五九から一点出土した。共伴遺物には一六世紀後半の陶磁器がある。このほか、長方形の材の一端の左右に切り込みをもつ木簡状木製品が、不整格円形の土坑SK一一五から一点、長方形の土坑SK七六から五点、計七点出土している。

8 木簡の积文・内容

(1) 「□昌正正正」

147×34×3 011

書写木簡と考えられる。文字は、片面のみにある。墨痕はわずかに確認できる程度で、判読できない部分もある。

解説に際しては、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9 関係文献

山形県教育委員会「手藏田一〇・一遺跡発掘調査報告書」（一九八八年）

（名和達朗
（山形県教育庁））



山形・鶴ヶ岡城跡

つるがおかじょう



(鶴ヶ岡)

- 所在地 山形県鶴岡市馬場町
2 調査期間 一 第一次調査 一九九九年(平成11)七月~一二月
二 第二次調査 二〇〇〇年四月~一月
3 発掘機関 研究会
4 調査担当者 菅原哲文
5 遺跡の種類 城館跡
6 遺跡の年代 平安時代・中世・近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 鶴ヶ岡城跡は、庄内平野の南西に位置する鶴岡市に所在し、市街を流れる赤川左岸の微高地に立地する。城は本丸・二の丸・三の丸と、各郭の外周をめぐる堀と土塁を備える輪郭式平城である。中世には大宝寺城と称され、室町時代初期に大泉荘の地頭であった武藤長盛によつて築城されたと伝えられる。

- 1 所在地 山形県鶴岡市馬場町
2 調査期間 一 第一次調査 一九九九年(平成11)七月~一二月
二 第二次調査 二〇〇〇年四月~一月
3 発掘機関 研究会
4 調査担当者 菅原哲文
5 遺跡の種類 城館跡
6 遺跡の年代 平安時代・中世・近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 鶴ヶ岡城跡は、庄内平野の南西に位置する鶴岡市に所在し、市街を流れる赤川左岸の微高地に立地する。城は本丸・二の丸・三の丸と、各郭の外周をめぐる堀と土塁を備える輪郭式平城である。中世には大宝寺城と称され、室町時代初期に大泉荘の地頭であった武藤長盛によつて築城されたと伝えられる。

天正五年(一五八七)に武藤氏が滅亡し、上杉氏と最上氏の領土争いや関ヶ原の戦を経て、慶長六年(一六〇一)に最上義光が城主となつた。この時、城名を鶴ヶ岡城に改めた。元和八年(一六二二)に最上氏が改易され、信州松代より酒井忠勝が入部して以後、江戸時代を通じて酒井氏が代々城主であった。現存する土塁と堀は、酒井氏入部の後に整備されたものとされる。一八七五年に廃城となつた。

調査は、東北公益文科大新築事業に伴い実施された。第一次調査では、二の丸堀跡(一区)、二の丸土塁の一部(二区)、百間堀跡(三区)、絵図面での松原地点(四区)の合計五一四五m²を調査した。第二次調査では、引き継ぎ二の丸土塁部分(二区E-W-Sトレーン)、松原から百間堀跡にかかる地点(五区)、二の丸堀跡(六・七・九区)、二の丸郭内(八・一〇区)の合計六一〇〇m²を調査した。

二の丸堀跡からは、廢城の際に廃棄された板材、漆器・下駄・曲物などの木製品、中・近世の陶磁器、瓦などが出土した。二の丸土塁では、土留め施設の杭列と石積みが、ほぼ全周にわたって施されていたことが明らかとなつた。二の丸郭内では、近世と考えられる礎石建物と、その下層に、酒井氏入部以前の遺構面が二面から三面存在することが確認された。松原地点では、近世の掘立柱建物や井戸を検出し、家臣の屋敷地と推定される。

次に、木簡などの文字資料の出土遺構について述べる。SD-

(1)の丸堀跡は江戸時代の構築であり、覆土は四層に大別される。

一層は廢城時の堆積層、二~四層は江戸時代の堆積層と考えられる。

墨書きや刻書きが認められる木製品が、覆土一層から一点(1)(2)、覆

土三層から一点(2)(3)、計三点出土した。一区SK一七土坑は、

二の丸堀と百間堀との間に中土手に位置し、五点の漆器が出土した。

そのうちの一点に文字が記されていた(4)。一区からは、この

他に出土地点・層位不明の一点がある(5)。四区井戸SE一九

からは、「一点の漆器と挽物皿が出土」、このうちの漆器極一点に文

字らしき漆痕があった(5)(6)。五区のSD三(百間堀跡)では、木

簡状の木製品が一点出土したが、文字は認められなかった。この区

の百間堀跡に近接する土層からは木製品の出土が多く、(2)は江戸

時代の遺物包含層である三層から、(3)は、その上層の明治期のII

層から出土した。

8 木簡の現文・内容

一 第一次調査

一区SK一七土坑

(1) [脚カ] [口墨入]

185×95×6 061

(2) 「三月十七 廿」(刻書き)

85×95×6 061

一区田土地点・層位不明

[口] [口]

一区SK一七

[口]

[三カ]

一区SD三

[口]

[口]

[口]

幅132×高43 061
幅120×高50 061

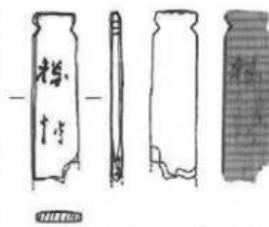
(1)は箱物の底板と思われ、縁辺に竹釘の痕が一〇カ所認められる。文字の左右両端にも墨痕があるが、文字か模様か不明である。(2)は糸巻きである。刻線による文字が描かれている。左側の文字は、報告書では「仔カ」としたが、再検討の結果「仔」とした。(3)~(5)は漆器極である。(3)は外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗られ、文字は赤色漆で書かれる。(4)は外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗られ、赤色漆で梅花文と文字が書かれる。文字の一部は剥落している。(5)は内外面ともに黒色漆が施され、底面に赤色漆による文字あるいは文様と思われるものが認められる。



- (1)



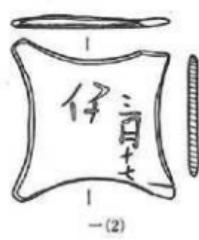
- (1)



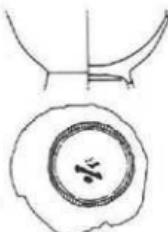
- (1)



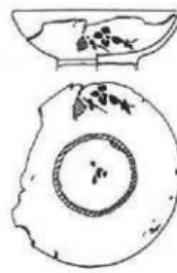
- (1)



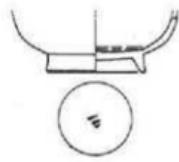
- (2)



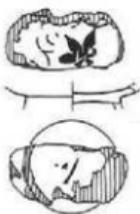
- (3)



- (4)



- (2)



- (3)



- (5)

二 第二次調査

一四〇一標土三層

(1) 「△□□

(90)×24×5 (09)

五区遺物包含層三層

(2) 「一一」

径(122)×厚(41) 061

五区遺物包含層三層

(3) 「一一」

径(90)×厚(41) 061

(1)は付札で、下端を欠損する。(2)は漆器碗で、内外面ともに黒色
漆が施され、赤色漆による文字がある。(3)は漆器皿で、内外面とも
に黒色漆が施され、赤色漆による花文と文字がある。

なお、木簡の釈読にあたっては、山形県立米沢女子短期大学の吉
田敏氏のご教示をいただいた。

9 関係文献

(財)山形県埋蔵文化財センター「鶴ヶ岡城跡発掘調査報告書」(一
〇〇一年)

(著原哲文)

木簡画像データベース「木簡字典」の公開

奈良文化財研究所では二〇〇五年二月、木簡画像データベース「木簡字典」を公開した。これは木簡の文字の画像を一文字毎に検索でき、しかもさまざまな条件による絞り込みが可能な画期的なシステムである。画像もモノクロだけでなく、カラー、赤外線などさまざまなタイプの複数の画像が選択できる。また、木簡の文字を読んだ記録である記帳ノートも公開している。さらに、その画像の文字が書かれた木簡の基礎データを参照でき、どの木簡のどういう文脈で用いられた文字かがわかる。

現在、奈良文化財研究所が調査した木簡だけでなく、九州歴史資料館の協力によって大宰府跡出土木簡も含め、約六〇〇字種、約六三〇〇文字分のデータを収録している。データの拡充（絶対量・時代・遺跡）、孰語（複数文字）検索、訛説支援システムの中での位置付けなど課題も多いが、木簡を読み、資料として活用していく上で不可欠の工具となることが期待される（なお、このデータベースは、二〇〇三—〇七年度（予定）日本学術振興会の科学研究費補助金基盤研究（S）「推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」（研究代表者渡辺晃宏）の研究成果の一部である）。

URL: <http://www.nabunken.go.jp/database/>

木簡データベースの画像の拡充

公開から六年余りになる奈良文化財研究所の木簡データベースは、当学会の協力による「木簡研究」誌掲載の全国出土の木簡のデータの掲載によって、文字通り日本木簡の総合的なデータベースとして広く利用されている（年四回更新。現在四〇二六二点の木簡を収録）。

このデータベースは木簡の基礎的な情報についてのテキストデータを主体としつつ、木簡の全体画像とのリンクもはかつてきた。これまで画像とのリンクは奈良（国立）文化財研究所が調査した木簡のうち、長屋王家木簡・二条大路木簡の優品から順に進めてきたが、このたび『平城宮木簡』一～六所収の木簡について、画像の公開を開始した。これにより、現在入手困難なものもあるこれらの報告書所収の木簡について、手軽に画像を閲覧できるようになった。

奈良文化財研究所では、このデータベースとは別に木簡画像データベース「木簡字典」を公開した（16頁参照）。が、データの拡充にはなお時日を要することが予想されるので、従来の木簡データベースにおける木簡全体画像とのリンクへの期待は大きい。

文化財写真に携わる人の必携マニュアル
「埋文写真研究」一六号

埋蔵文化財写真技術研究会編

巻頭言

特集 フィルムメーカーに聞く

画像処理一考

白黒フィルムISO感度

立面集写真観書II—構成エレメント編—

仏像と写真

あなたが参考にしている本は何ですか?

在庫状況のお知らせ

頃備 一号～五号 品切れ 六号～八号 三五〇円

九号 三〇〇円 一〇号～一六号 三五〇円

送料 一冊～四冊 五〇〇円

五冊～一〇冊 一〇〇円 一冊以上 無料

ご注文は、埋蔵文化財写真技術研究会まで直接お申しつみください。ご送金は郵便振替でお願いいたします。

宛先 〒630-18577 奈良市一条町二丁目九番一号

奈良文化財研究所 柴田 埋蔵文化財写真技術研究会

電話 ○七四二-一三〇-六八三八

郵便振替 口座番号 ○一〇五〇-九一九九三〇

ホームページ <http://www.maishaken.jp/>

一九七七年以前出土の木簡（二七）

奈良・平城宮跡

- | | | |
|---|---------------|---|
| 2 | 所在地 | 奈良市佐紀町 |
| 3 | 調査期間 | 第七八大調査南区 一九七三年（昭48）四月—七月 |
| 4 | 発掘機関 | 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部 |
| 5 | 調査担当者 | 代表 坪井清足 |
| 6 | 遺跡の種類 | 官殿跡 |
| 7 | 遺跡の年代 | 奈良時代 |
| | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | 平城宮には中央区と東区の二つの大極殿・朝堂空間があり、複雑な変遷を辿ったことが知られている。これに対し内裏は、称徳天皇の西宮の時期を除いて継続して東区北方に営まれ、六時期の変遷が明らかにされている。しかし、女帝や太上天皇の存在によって、その様相が平安宮の内裏と大きく異なるだけでなく、奈良時代を通じて大きな変遷を遂げることとなつた。平安宮の内裏の原形が成立す |

るのは、初めて内裏に後宮が設けられたV期の光仁朝以降と考えられて いる。

さて、内農地場の発掘調査では、調査直後の前に木製品の出土が数件ある。少なく、計一二点を数えるに過ぎない。そのうち今回報告する木簡を含む二点が井戸SE七九〇〇枠内の遺物である。

井戸SE七九〇は、内裏東端中央部に位置する内裏内唯一の井戸で、上下二段の井戸枠をもつ。下段の円形井戸枠は、スギの一本切り抜きで、外径約一・六五m、内径約一・三m、厚さ一五一・二〇cm。上段の方形横板組の井戸枠は、南・東・西の三面に遺存し、長さ約一・六一・一・七m、高さ約二〇cm、厚さは現状で三一四cmある。井戸枠の据付掘形は一辺約三・五一三・八mの隅丸方形で、深さは約二・七mあり、底に砾を敷き詰め井戸枠を据えている。井戸枠は奈良時代を通じて改修の痕跡はないが、内裏の区画施設を掘立柱構から築地回廊に改修するのに伴って周辺の盛土造成が行なわれ、外周に石敷きの洗場が設けられる。

SE七九〇〇はよく清掃が行き届き、出土遺物は少ない。木製品は、掘形から出土した曲物一点以外はいずれも井戸枠内のもので、

木簡以外には、蒼串、木錐、櫛、曲物の底板や蓋板、曲物の側板を二次利用した朱の付着痕跡のある用途不詳板がある。金属製品には銅鏡（丸鏡表金具）、和同開珎・神功開宝・隆平永宝各一点など、土器は内裏廬絶後の時期のものが少量出土している。瓦には陽軒平瓦や隅平瓦があるほか、井戸の周辺からは「司」の刻印のある瓦が四点出土している。

8 木簡の板文・内容

(1) 「(墨画) 白物桶福徳」

(墨画) 白物桶
福徳



71×(25)×4 (691)

上下両端とも円弧状に削り出されており、曲物底板の断片の可能性がある。その場合の復原径は七・一四となるが、上端の削り方が粗く、断定はできない。白物桶は不詳。「奈尔波」は難波津の歌の一節の可能性がある。表面上部には墨画と思われるものがみられるが、一部消失しており、何を描いたものかは不詳である。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XIII』(一九九一年)

(渡辺晃宏)



木簡学会会則

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

1 会長一名

2 副会長二名

3 委員若干名

4 監事二名

5 評議員若干名

第七条 委員・監事および評議員は総会において選出され、任期は二年とする。ただし再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもとづき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

五 評議員は会務運営についての助言を行なう。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金等をもつてあて、総会において会計報告を行なうものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また権限を定めることができる。

(一九七九年三月三十一日制定、一九九五年十一月一日改正、二〇〇四年十一月四日改正)

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つきの事業を行なう。

1 木簡に関する情報の蒐集および整理

2 研究集会の開催

3 会誌「木簡研究」その他の刊行

4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力

5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に從事し、本会の趣旨に賛同する個人および団体は会員になることができる。

二 本会に入会しようとする場合は、会員一名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。ただし団体については、会員の推薦は必要としない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、その他の前条の事業に参加することができる。

彙報

第二回総会及び研究集会

木簡学会第二回総会及び研究集会は、一〇〇四年二月四・五日、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、一六三名の個人会員、二団体の団体会員の参加を得て開催された。会場には、平城宮跡第九二次調査出土木簡・藤原宮跡朝堂院東南隅出土木簡・石神遺跡第一六次調査出土木簡（以上、奈良文化財研究所）、禁野本町遺跡出土木簡（跡枚方市文化財研究調査会）、青木遺跡出土木簡（島根県埋蔵文化財調査センター）、新田（二）遺跡出土木簡（青森市教育委員会）が展示された。

△一〇〇四年二月四日（土）（一三時～一七時）

第二回総会（議長 吉岡義之氏）

佐藤宗諱会長による開会挨拶の後、以下の報告が行なわれた。

会務報告（渡辺晃宏委員）

会員の状況（個人会員三八八名、団体会員四団体、海外会員四名の他、

一〇〇五年度新入会員一名）、会員サービスについての報告があつた。

編集報告（笛野和己委員）

「木簡研究」第二六号の編集について報告があり、額面を五五〇

円にする旨の提案がなされた。

会計・監査報告（一〇〇三年度決算）（山中敏中委員・東野治之監事）
山中委員により、一〇〇三年度会計（一般会計及び特別会計）の決算報告がなされた。これについて東野監事より、会計が適正に執行されている旨の監査報告がなされ、あわせて財政状況を改善するための付帯意見が出された。

会則改正（渡辺晃宏委員）

事務運営を機能的に遂行するための組織改革として、評議員制度新設を柱とする会則改正案が提案された。

以上の案件は、すべて原案通り承認された。なお、新会則は前頁を参照されたい。

会計報告（一〇〇五年度予算）（山中敏中委員）

新会則に基づき、一〇〇五年度予算案が提示され、承認された。

役員改選

次期（一〇〇五年度・一〇〇六年度）役員について、新会則に基づいて改選が行なわれた。立候補者がいなかつたため、櫻山明委員より候補者の提案がなされ、承認された。総会終了後、会長・副会長互選のための臨時次期委員会を開き、柴原水達男氏を会長に、笛野和己氏と田辺征夫氏（兼任）を副会長にそれぞれ選出した。新役員は別表（x頁）の通りである。また、研究集会一日目昼の休憩時に再度臨時次期委員会を開き、委員の役割分担（編集、企画・情報、会

計庶務)を定めた。

研究集会

報告（司会 小林昌一委員）

二〇〇四年全国出土の木簡

出雲市・青木道跡の調査報告

平文清風・卷之六

香田（二）費赤の開拓二木商

安芸国分寺跡の調査と木簡

馬場氏の報告は、二〇〇四年

以上は、二〇〇四年に全国の遺跡から出土した木簡及び二〇〇三年以前に出土した木簡のうち、これまで本会で把握できていなかつた分についての報告である。そのうちの多くは本号に報文を掲載できた。今岡、平石、西村、木村、妹尾、佐竹各氏の報告書は、それぞれの遺跡における発掘調査成果の概要、及び出土した木

館の内容についての報告である

研究会

シンポジウム「中国簡牘研究の現状」(司会 角谷常子氏)

基調報告

荊州地区出土戰国楚簡—特に包山楚簡・郭店楚簡

・上海博物館藏楚簡を中心に

廣雅

(100五年度予算案及び会計内規の変更)、会誌二六号の編集報告及

総会に先立ち、会務、第一六回総会・研究集会の予定、会計報告

於奈良文化財研究所

△1004年二月四日(土)10時半-12時

委員會報告

前日の木簡出土事例報告も含め、全体にわたって質疑応答が行なわれた。最後に、田辺征夫副会長の挨拶により閉会となつた。

るスライドによる説明に切り替えた。

なお、量の休憩時には平城宮跡中央区朝堂院朝廷の現場見学を予定していたが、降雨によるコンディション悪化のため、講堂におけるスライドによる説明に切り替えた。

詩譜（司会 坂上康儀委員）

なお、昼の休憩時には平城宮跡中央区朝堂院朝庭の現場見学を予定していたが、降雨によるコンディション悪化のため、講堂におけるスライドによる説明に切り替えた。

ハネルティスカフシヨン 一
些かな木蘭学のために

(二)メンテナンス 佐藤 信氏

長沙志願三國與龍

富谷 至氏

び頒佈、次期役員候補者の推薦などにつき、報告、提案がなされ、

協議、修正を経た上で承認された。

◇二〇〇五年六月一日（水）一四時—一七時

於奈良文化財研究所

以下の案件について報告、協議がなされた。

1 新委員会・体制の発足について。新会則の確認、新委員会構成員及び役割分担の確認を行ない、運営体制について協議した。2 会務について。常任委員の委嘱、会員の異動の確認を行ない、常任委員会などの開催についての報告がなされた。3 入会審査について。入会申込者八名についての報告がなされ、審査を行なった。4 会計報告、監査報告について。二〇〇四年度決算報告、監査報告がなされ、承認された。あわせて、厳しい財政状況についての対策を協議した。5 「木簡研究」第二七号の編集について。編集担当者寺崎保広委員とすること、及び編集状況についての報告がなされた。6 第二七回総会・研究集会について。日程を二〇〇五年一二月三日（土）・四日（日）とする」とすることを確認し、内容について検討がなされた。また、総会当日に開催予定の当該年度第三回委員会の進め方について議論した。7 九州特別研究集会について。二〇〇六年に開催を予定している特別研究集会の準備状況について報告があった。8 その他。雑誌「日本歴史」への会誌広告掲載の件、京奈和自動車道問題についてその後の経過の件、第二回委員会の日程の件につい

て報告、確認がなされた。

◇二〇〇五年一月一〇日（木）一四時—一六時

於奈良文化財研究所

以下の案件について報告、協議がなされた。

1 会務について。会員の異動、常任委員会などの開催について報告がなされた。2 入会審査について。入会申込者八名について審査を行ない、全員の入会が承認された。3 会計報告について。二〇〇五年度会計中間報告、二〇〇五年度下半期収支予定について報告がなされた。ひき続き二〇〇六年度予算案について提案がなされ、審議の上承認された。4 第二七回総会・研究集会実施要項について。日程の確認、内容の検討を行なった。5 「木簡研究」第二七号の編集について。編集経過について報告がなされた。6 九州特別研究集会について。七月二二日に第一回実行委員会（委員長坂上康徳委員、委員赤司善彦氏（九州国立博物館）、兒玉真一氏（九州歴史資料館）、酒井芳司氏（同）、中間研志氏（同）、橋本義則氏（山口大学）、東中川忠美氏（佐賀県教育委員会）、松川博一氏（九州国立博物館）、山崎純男氏（福岡市教育委員会）、山村信義氏（太宰府市教育委員会）、渡辺晃宏委員）を開催し、日程を二〇〇六年九月一五日（遺跡見学）・一六日（研究集会）於九州国立博物館）と決めたこと、運営委員会（委員長赤司善彦氏）を発足させて準備を進めることなどが報告され、了承された。

（古尾谷知造）

PROCEEDINGS OF THE JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 27 2005

Contents

Foreword: Acts of Writing, Acts of Shaving	MOMIYAMA Akira..... i
Contents	iii
Legend	vii
Wooden Writing Tablets Recovered in 2004	1
Outline.....	YOSHIE Takashi..... 1
Explanatory Notes	8
Nara Prefecture: Nara Palace Site; Block 1, East Second Ward on Third Street, Nara Capital Site; Block 10, East Fifth Ward on Third Street, Nara Capital Site; Former Precinct, Tōdaiji Temple; Former Precinct, Saidaiji Temple; Garden at the Former Daibyōin Temple; Shimonaga Higashihō Site; Fujiwara Palace Site; West Fourth Ward on Eleventh Street, Fujiwara Capital Site; Shijō Site; Ishigami Site; Asuka Capital Site	
Kyoto Prefecture: Block 6, West Third Ward on Sixth Street, Heian Capital Site; Uji Urban Site; Uchisato Hatchō Site	
Osaka Prefecture: Kin'ya Honmachi Site; Shimakami County Seat Site; Kita Hanadaguchi Site	
Hyogo Prefecture: Kawayoke/Fujinoki Site; Itai Teragatani Site; Inadome Site; Yomegabuchi Site	
Aichi Prefecture: Kariyasuka Site; Orizu Kitayama Site; Kiyosu Castle Town Site	
Shizuoka Prefecture: Ōtaka Murahigashi I Site; Tsuchihashi Site	
Yamanashi Prefecture: Kamikubo Site	
Kanagawa Prefecture: Hōjō Tokifusa/Akitoki Residence Site; Geba Shūhen Site (Kamakura Jogakuin Location); Yōfukuji Temple Site	
Tokyo Prefecture: Tokugawa Family, Mito Branch's Koishikawa Residence	

Site/Suruga Kojima Domain's Matsudaira Family Residence Site/ Harima Anshi Domain's Ogasawara Family Residence Site (Locations III-IV, Kasuga-chō Site); Mizunohara Site (Shinjuku Ward Site No. 110); Tenryūji Temple Site; Kasai Castle Site (1); Kasai Castle Site (2)	
Saitama Prefecture: Kobari Kita Site	
Chiba Prefecture: Nagasuka <i>Jōri</i> Field System Remains; Ichihara <i>Jōri</i> Field System Remains (Sanenobu Location); Kitashita (1) Site; Nishine Site	
Shiga Prefecture: Sekinotsu Site; Kitakaya Site; Kamo Site; Jionji Temple Site	
Gifu Prefecture: Sagiyamasemni Site	
Nagano Prefecture: Isemachi, Matsumoto Castle Town Site	
Tochigi Prefecture: Kabasakidera Temple Site	
Fukushima Prefecture: Izumi Abandoned Temple Site (Namekata County Seat, Mutsu Province)	
Miyagi Prefecture: Wakabayashi Castle Site; Ichikawabashi Site; Ippon'yanagi Site	
Iwate Prefecture: Yanagi no Gosho Site (1); Yanagi no Gosho Site (2); Hanadate II Site	
Yamagata Prefecture: Shibue Site; Tegurada 10 Site; Tsurugaoka Castle Site	
Akita Prefecture: Kuriyagawa Yachi Site; Higashi Negoyamachi Site; Wakimoto Castle Site	
Aomori Prefecture: Takama (1) Site	
Ishikawa Prefecture: Honmachi Itchōme Site; Morimoto C Site	
Toyama Prefecture: Umehara Gomadō Site; Koide Castle Site; Yuminoshō Castle Site	
Niigata Prefecture: Mitsumata Site; Matsuba Site; Jōda Site; Test Excavation Location at Yokawa, Minamiuonuma-shi; Tsujidate Higashi Site; Nishikawauchi Kita Site	
Shimane Prefecture: Nakano Shimuzu Site	
Hiroshima Prefecture: Kusado Sengen-chō Site; Jōbutsu Doi Residence Site	
Kagawa Prefecture: Takamatsu Castle Site (Matsudaira Daizen Family Residence)	
Tokushima Prefecture: Naka Tokushima Itchōme, Tokushima Castle Town Site; Jōsanjima Site; Shinkura Site	
Fukuoka Prefecture: Hakata Site Group; Hondō Site	
Wooden Documents Recovered before 1977 (27)	200
Nara Prefecture: Nara Palace Site	
Revisions and Additions (8)	202
Ishikawa Prefecture: Katada B Site (No. 20, 21, 22)	
Tokushima Prefecture: Tokushima Castle Town Site (No. 22)	
Record of the Symposium on "Current Status of Research on Ancient Chinese Wooden/Bamboo Documents"	
Chu-Language Documents of the Warring States Period, Recovered from the Jingzhou Region	HIROSE Kunio..... 211

Bamboo Documents Recovered from Tomb 247 at Zhangjashan in Jiangling, Particularly Regarding <i>Ernian luting</i>	TOMIYA Itaru.....	235
The Zhangshahuw Documents as a Historical Collection: A Preliminary Treatise	SEKIO Shirō.....	250
An Opinion about the Symposium on "Current Status of Research on Ancient Chinese Wooden/Bamboo Documents"	MOMIYAMA Akira.....	267
New Publication		
TOMIYA Itaru, <i>Mokkan/chikukan no kataru Chūgoku kodai</i> [Chinese antiquity as told by wooden and bamboo documents]	WATANABE Akihiro.....	272
Bulletins.....		279
Editor's Notes		282
Columns		
Report on First-Hand Observations of Roman Tablets.....	BABA Hajime.....	126
Report on First-Hand Observations of Roman Tablets Researchers	BABA Hajime.....	128
Some Thoughts on Corrections of Previously Published Wooden Documents	WATANABE Akihiro.....	166
Illustrations		
PL 1 Wooden Documents Recovered from the Fujiwara Palace Site		
PL 2 Wooden Documents Recovered from the Ishigami Site		
PL 3 Wooden Documents Recovered from the Kamikubo Site		
PL 4 Wooden Documents Recovered from the Wakimoto Castle Site		

Published by
**THE JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS**

木簡研究 第二七号

11005年十一月二十日 印刷
11005年十一月二十五日 発行

〒630-8577 奈良市二条町二丁目九番一號
奈良文化財研究所

平城・史料調査室 気付
木 簡 學 会

会員

常原

永瀬

勇

TEL (0743) 31-6837

E-mail mokkan@nabunken.go.jp

印 刷
編集発行
木 簡 學 会
平城・史料調査室 気付
会員
常原
永瀬
勇
TEL (0743) 31-6837
E-mail mokkan@nabunken.go.jp

〒600-8475
堀井口座 0100-16-1517
〒630-8577 奈良市二条町二丁目九番一號
奈良文化財研究所

平城・史料調査室 気付
木 簡 學 会
会員
常原
永瀬
勇
TEL (0743) 31-6837
E-mail mokkan@nabunken.go.jp

ISSN 0912-2060

ISSN 0912-2060